

ヒロイン戦記 4

# 陸軍女子三等兵強制全裸突撃

～玉砕の南洋に咲く大輪の被虐花



濠門長恭

## 登場人物

### 柴野美雪

成金の娘。父親の悪行に心を痛め、犠牲になった人たちに同情しているが、所詮はお嬢様の上っ滑りな観念でしかない。徴兵逃れに父が仕組んだ縁談を蹴って入営する。

本人は自覚していないが、天性の被虐体質。

### 皆川秋夫

美雪の縁談の相手。

女子新兵教育大隊の中隊長。

美雪のマゾ素質を見抜き、新兵教育を口実に調教を施す。

上官の権力で、美雪のすべての処女穴を差し出させる。

後に南方戦線で美雪を従兵という名の奴隷にする。

### 佐東征子

柴野家では、美雪の世話係。美幸と共に

入営。

美幸の父に会社を乗っ取られて心中した一家の生き残り。引き取られて無給の妾にされたが、美雪はその事実を知らない。

本田加奈恵

美雪の父親の会社で過労に倒れた父に代わって、家族を養うために身売りする。佐東征子と共に、美雪への虐めの首謀者。

# 目次

登場人物 .....	- 2 -
1章 徴兵検査（屈辱の性器評価） ....	- 5 -
2章 新兵教育（縄褌で全裸行軍） ..	- 34 -
3章 従兵見習（三穴の処女蹂躪）	- 109 -
4章 桃色訓練（全裸体罰の蔓延）	- 214 -
5章 南方派遣（輸送船内の輪姦）	
6章 前線勤務（重労働と慰安婦）	
7章 相撲大会（八百長への制裁）	
8章 悦虐従兵（嗜虐者への服従）	
9章 全裸爆装（強制された特攻）	
終章 肉弾分隊（悦虐従兵の戦後）	
参考文献・URL	
後書き	
おまけ（イラスト原画）	

## 1 章 徴兵検査（屈辱の性器評価）

戦局が傾くにつれて兵力の補充が消耗に追いつかなくなり、陸軍では乙種合格者はもとより、現役には適さないとされる丙種の一部も徴集し、いったん除隊した予備役兵もつぎつぎと召集していった。

しかし、二十代から三十代にかけての予備役兵は、生産の中核を担う労働者でもあった。婦人や少年による勤労奉仕では、彼らの抜けた穴を埋めることは不可能だった。素人が速成教育を受けて旋盤を回したところで、百分の一ミリの精度が必要な機械部品を作れるわけがない。指先が器用でも、銅線に薄紙を巻きつけてニスで絶縁する電線を規格どおりに作れるものでもない。真っ赤に焼けた鉄鋏で鋼板を水密に接合するには、技量と腕力とが要求される。

生産の絶対量が確保できず、しかも工場から出てくる製品は、強度不足の鋼材、すぐに故障する発動機、回路の短絡で使い物にならない通信機、不発ならまだしも頻繁に筒内爆

発を生じる砲弾。これでは戦争を戦えない。

しかも、働き手を兵隊に取られて食糧の生産も落ち込み、国民は飢えていく。

継戦能力の危殆に直面した戦争指導部は、人的資源の配置について根本的な見直しを迫られた。

熟練工の養成には、何年もかかる。しかし陸軍の根幹を成す歩兵は、数か月の基礎訓練で作戦行動が可能になる。歩兵に最低限求められるのは、必要な装備と食糧とを携えて前線に到達し、単純な土木作業で陣地を構築する体力だった。精密な射撃術よりは、敵陣に突撃する勇気だった。

ならば。身体的欠陥のある丙種合格者よりは、健康な女性のほうが兵士に適しているのではないか。軟弱なアメリカ兵よりは、大和撫子のほうが、よほど勇気がある。

かくして承和十八年十月、女子徴兵制度が施行されたのだった。

男子の徴兵年齢は十九歳だったが、女子は成熟が早い。できるだけ早く家庭に戻して、次代の国民を産ませる必要もある。男子では一部の兵種で十五歳からの志願兵が認められ

ている事例も勘案されて、女子の徴兵年齢は両者の中間に定められた。志願兵制度はなく、熟練工と既婚者は兵役を免除された。

明けて十九年の二月。最初の女子徴兵検査が全国で実施された。不公平を無くするために、二十二歳までの全女性が対象とされた。

二か月前に徴兵年齢に達したばかりの柴野美雪も、二十一歳になる女中の佐東征子とともに、指定された受検場へ同じ日に出頭した。

毎日かよっている駅から女学校までの道が、今日はセーラー服ではなくさまざまな格好の娘たちであふれている。といっても儉約第一、外套でさえも寒冷地以外では贅沢品の戦時下。地味な和服かブラウスにセーター、下はモンペ姿の娘が多い。

「おはようございます、柴野様」

振り返ると、美雪と同じ服装——セーラー服にモンペ姿の娘が歩いていた。美雪の後姿を見て追いかけてきたのだろう、白い息を蒸気機関車みたいに吐いている。

「おはようございます、本堂様」

隣のクラスの本堂絹江だった。

美雪のすぐ後ろを歩いていた征子は、さら

に何歩か下がって絹江に道を譲った。

「今日は、うちの生徒が見当たりませんわね」

「そうですわね。でも、ここで検査を受ける方は百人もいませんから、四回に分ければ二十人くらいじゃないかしら」

それがぱっと閃くくらいには、美雪は聡明だったが。友達ともいえない顔見知りにも適当に相槌を打っておく要領の良さはなかった。それは美雪も自覚しているので、無難な言葉を継ぎ足した。

「それに、私服の方もいらっしゃるでしょうし」

「わたくしも、そうすればよかったかしら。だって今日ばかりは、学校に制服で行くのがなんだか恥ずかしいですわ」

「そう言えば、そうですわね」

馬鹿丁寧な言葉のやりとりを続けながら、美雪と絹江は女学校の正門に着いた。門札には『城泉市第二女子徴兵検査場』と墨書された紙が貼られている。

「本日はご苦労様です」

門札の横に立った音楽の土井先生に頭を下げられて、美雪と絹江もぺこんとお辞儀をし

た。お尻のあたりがこそばゆい。

勝手知ったる体育館への道順——というのは、この二人に限ってのこと。壁に貼られた矢印と、曲がり角に立っている生徒の案内を頼りに、娘たちは検査場へ向かう。

体育館の前には長机が置かれて、国民服姿の男がふたり座っていた。

「新開一丁目二番地の柴野美雪です」

美雪が差し出した受検通知の葉書を、初老の男が名簿と照合してから。じろりと美雪をねめ上げた。頭のとっぺんから長机で遮られた太腿のあたりまで、ゆっくりと視線を下ろしていく。

美雪はそ知らぬ顔で立っている。自分は異性の注目を浴びるほどの美人ではないし、身体つきにしても同級生と比べて女性としての魅力に乏しいと自覚している。

卵形の輪郭は、まずまずだけど。二重瞼を帳消しにしている、泣いているような目尻。すっと通った鼻筋の先で小ぢんまりと胡坐をかいている団子っ鼻。小ぶりなくせに、ぽってりと厚い唇。男の目から見れば、美人云々はともかく、思いきり泣かせてみたくなる顔

立ちなのだが——そう聞かされたところで、美雪はますます自分の顔が嫌いになるだけだろう。

「そうか、あんたが柴野石炭商会の箱入娘さんか」

はたして、初老の男は美雪が予想していたとおりの言葉を吐いた。

美雪が他人の注目を浴びる理由は、この一事につきた。石炭商会の看板を掲げてはいるが、ただの卸問屋ではない。自前の炭鉱と精錬工場を所有し、戦前は石油や鉄屑の輸入でも大きな利益を上げていた。地方の小財閥といったところだ。

柴野石炭商会が今日の規模に成長したのは、美雪の父に代替わりしてからだった。先代が拓いた炭鉱から共同経営者を追い出し、労働組合とヤクザを使って倒産に追い込んだ精錬工場を乗っ取り、賄賂も使って輸入の利権を拡大していった。それだけでも世間の僻みや嫉みを買うというのに。国策協力と称して労働時間を延長しても賃金は据え置き。帳面上では残業無し。過労が原因で病を得た者は涙金さえ払わず首を切り、落盤事故で大黒柱を

失った一家を容赦なく炭鉱住宅から追い出す。

娘の目から見ても、社会人として尊敬できる父ではなかった。しかし、物資の欠乏した戦時下でもひもじい思いとは無縁で、庶民には高嶺の花の女学校にも通わせてもらっているのは——父のおかげだった。そしてなにより。父母の恩は山よりも高しという修身の教えを疑うことのない美雪だった。

だから。敵意を剥き出しにした言葉を浴びせられても、美雪は黙って耐えるしかないのだった。

「どうせ兵隊には行かんくせに、徴兵検査だけはしおらしく受けるんかい」

ボール紙に印刷された受検票を、男はポイツと投げてよこした。

「つぎは……佐東征子。うん、住所が同じ？ ああ、住み込みの女中さんか。今日は、お嬢様の付き添い気分では困るぞ」

征子には、受検票をきちんと手渡した。

男の言葉が気にかかったが、美雪は深く考えなかった。自分の一生を左右しかねない徴兵検査に臨んで、それどころではなかった。

火の気のない二月の体育館は、屋外と同じ

くらいの気温だった。その一画に並べられた籠の前で、美雪は着衣を脱いでいった。緊張のせいか、鳥肌が立っているというのに、寒さはあまり感じなかった。

ズロース一枚の半裸になって、美雪たちは最初の検査の列に並んだ。検査を担当しているのは、陸軍の軍医と看護兵。つまり男性だったが、それに異を唱える娘はいなかった。小学校での身体検査は男女別々だったが、女先生の手が足りなければ男の先生も女子の測定を手伝う。銃後の守りも頑健な肉体からと、真冬に半裸で授業を受ける小学生や、乳房を揺らして乾布摩擦する女学生がニュース映画で紹介される。そういう時代だった。

美雪は、ある意味これで『おあいこ』だと思わないでもなかった。徴兵検査は一般の見学が許されている。美雪も三年生のときに、校外授業のひとつとして見学していた。父や兄の性器でさえもちらっとしか見たことがないのに、この日だけは何十人もの逸物を堂々と観察できた。たいていの人はいしょぼんとうなだれていたけど、鎌首を水平にもたげている青年も何人かいた。さらに二人だけ、まる

で播粉木みたいに太く長くなったそれをおなかにくっつくほどそっくり返していた。夫婦生活を営むときにはそうなるのだと、あとから先生が教えてくれた。

さすがに今日は見学が禁止されていたが、それでも、見ず知らずの男性に裸身を見られる恥ずかしさは、あまり変わらなかった。

しかし恥ずかしいというのなら。検査の手伝いに駆り出されている下級生たちに見られるほうが、より実感をともなっていた。男性に裸を見られるのは恥ずかしいことだと教えられてきたが、なぜ恥ずかしいのかを、美雪はうまく説明できない。けれど同性に見られるのは――一年上なのに胸が小さいとか、あんな細腰じゃ何人も子供を産めそうもないとか、『見られた後』のことが容易に想像できた。

せめて態度だけは毅然としていようと、美雪はしゃんと背筋を伸ばした。検査票で胸を隠したりはしなかった。

身長、体重、視力を検査されて、それから問診と聴診。ここで検査を打ち切られてしよげる娘もいた。兵隊になれないから悔しいとかいうのではない。男だって、本心は兵隊に

取られて戦地へなんか行きたくない。女なら、なおさらだ。しかし、心臓に雑音が聞こえるだの肺結核の疑いが濃厚だのと脅かされては、不合格になったと喜んででもいられない。

美雪は形だけ聴診器を当てられて、診察はすぐに終わった。

「文句なしの健康優良児だ。優秀な兵士になれるぞ」

「はい、ありがとうございます」

美雪は複雑な思いだった。自分が人並み以上に健康だとすれば、それは父の悪業のおかげなのだ。軍隊になんか行きたくはないけれど、せめてもの罪滅ぼしになりはしないだろうか。そんなことを考えながら、つぎの検査に並んだ。

握力、背筋力、垂直跳び、球投げ。運動能力の測定は、男の徴兵検査にはない項目だった。美雪は、すべての測定で優秀な成績をおさめた。少なくとも、美雪の前に測定した数人の娘たちの記録は抜いていた。

後ろめたい思いは残っているものの、素直に誇らしい気分でもあった。美雪は何十人もの娘たちと自分とを見比べて、女性としても

平均以上のようにだと、ひそかに自惚れもした。

これまでは同級生と自分とを比べて、いくぶんかの劣等感を抱いていたのだが、女学校にかよっているのは裕福な家庭の娘が多い。器量はともかく、体格は平均以上なのだ。

美雪は百五十三センチ、四十五キロ。食糧不足の昨今では背の高いほうだが、頭ひとつ分も大きいわけではない。しかし、なによりも均整がとれていた。乳房は小ぶりでも、お椀を伏せたようにこんもりと盛り上がって張り詰めた感じだった。お尻は大きいのに肋骨が浮いていたりとか、肌がたるんでいておなかも二段とか、そういった不健康なところがなかった。

最後に美雪は、体育館のいちばん奥へ行った。緞帳が下りた演壇の脇にある控え室。舞台への上がり口にいる下士官に受検票を渡して、二十人ほどの娘たちと一緒に、名前を呼ばれるのを待った。

厳粛な徴兵検査の場。箸が転んでも可笑しがる形容される娘たちも、おのずとワイワイキャアキャアは控えているが、体育館の中は華やいだざわめきに満ちている。しかし、

この一画だけは。まるでお通夜のように静まり返っていた。

ここからは演壇が見通せた。緞帳に沿って二メートルほどの通路を残して、奥は衝立で八つほどに区切られていて、衝立の手前にはカーテンが掛けられていた。女性の下半身を検査するにあたっての配慮だった。

それぞれのカーテンからは二分おきくらいに娘が出てくる。顔を真っ赤に染めていたり、今にも泣き出しそうな様子だったり。ほんとうに泣きじゃくっている娘もいた。もちろん、平然と反対側の控え室へ下りていく姐御もいないことはない。とろんとした表情で、雲の上を歩いているようにふらふらと立ち去った娘も、一人だけいた。

「園田多恵……鈴木淑子……」

名前を呼ばれた娘が受検票を受け取って演壇に上がり、緊張した顔つきでカーテンの奥へ消えていく。

「つぎ、柴野……」

五分ほどで、自分の名前が呼ばれかけた。が、下士官は口ごもって、上から二番目の受検票を引き抜いた。

「もとい。小田サクラ」

覚悟を決めた瞬間につっかい棒を外された気分だった。さらに二人分の順番を飛ばされて、美雪は不安になってきた。柴野石炭商会の箱入娘への、ちょっとした意地悪。それくらいしか、美雪には心当たりがない。

しかし、何十分も待たされたりはしなかった。いちばん手前のカーテンが開くと同時に、美雪は名前を呼ばれた。受検票を返してもらって、美雪は短い階段を上がった。

(え……?)

開かれたカーテンの前で、一瞬美雪は戸惑った。衝立で仕切られた小部屋の中には、白衣を着た引っ詰め髪の女性が座っていた。三十歳くらいだろうか。

産婦人科の女医さんだろうと、すぐに美雪は見当をつけた。女性の下半身に詳しい軍医など、いるはずがない。民間の医師に検査を委託したのだ。

「よろしくお願いします」

美雪は丁寧に挨拶をしてから、カーテンを閉めて戻ってきた看護婦に受検票を渡した。

小部屋の中には二つの教室机が置かれてい

た。衝立の脇にある机には、検査器具や書類が並んでいる。中央に置かれた机のほうは、踏み台みたいに背の低い丸椅子が置かれている。女医が、その机に片手を置いた。

「下穿きを脱いで、ここに腰掛けなさい」

美雪はいさぎよくズロースを脱いで、そこでためらった。だって、教室机だ。腰掛けているところを見つかったら、優しい先生でも教室の隅にお立たされ。厳しい男先生だったら、問答無用でビンタが飛んでくる。

(これは診察台の代わりなんだから)

美雪は大きく深呼吸してから、机に腰を下ろした。

「もっと腰を前に。両足を机の角に乗せなさい。倒れそうなら、後ろに手をつきなさい」

美雪はおずおずと、命じられた姿勢をとった。顔が火照って、脹脛がぷるぷる震えた。

「ふうん……ずいぶんと毛が薄いのね。なにか手入れをしているの？」

いきなり劣等感を直撃された。銭湯には何年も行っていない美雪がそれを自覚したのは、昨年の修学旅行だった。一緒にお風呂にはいった同級生の中では、自分がいちばん薄かつ

た。産毛を濃くしたような、あまり縮れてもいない叢が、下腹部のごく一部に生えているだけ。何人かは美雪と同じような毛質だったが、正面から割れ目が丸見えになっているのは自分だけだった。

「手入れ……と言いますと？」

「形を整えるためにまわりを剃ったり、毛抜きで抜いたりとかする人もいるのよ。でも、あなたは天然のようね」

女医はガラス棒を右手に持って美雪の正面に置かれた背の低い丸椅子に腰を落とした。左手の指を秘裂の左右にあてがって、くぱっと左右に広げた。

「あ……！」

熱を帯びたそこが冷気に晒されて、美雪はぶるっと腰を振るわせた。

「所見は異常無し。次の用意を」

「はい」

看護婦が受検票に所見を記入してから、その上に帳面を広げた。

「大淫唇はふっくらしてるけど、小淫唇は発育が遅れてるようね。色素の沈着もなくて淡い紅鮭色だわ」

自分の恥ずかしい箇所を事細かに描写されて、美雪は気が遠くなりそうだった。女医がしゃべるたびに息が股間に吹き込まれて、奥がじわっと熱くなってくる。

「あら？ なにかにじみ出てきてるわね。見られて濡らすなんて、はしたない娘ね」

女医に指摘されてカアッと全身が火照った。腰の奥が、ますます熱くなってくる。

いきなり、冷たい感触が股間を走った。

「ひゃ……」

顔をうつむけて、ガラス棒が股間の内側をなぞっているのだと知った。

「お行儀が悪いうえに、汚れにも無頓着のようね」

女医がガラス棒を美雪の鼻先に突きつけた。先端に黄色っぽい豆腐のような塊がこびり付いていた。海藻とチーズを混ぜたような饅えた臭いに、美雪はむせた。

(やだ……！)

その正体に気づいて、美雪の顔が真っ赤に染まった。

「入浴時に、ちゃんとビラまでめくって洗うようにしなさい」

そのビラの内側が、さらにこじ開けられて。ガラス棒でぐりんとえぐられた。攣れるような、軽い痛み。

「環状の処女膜は、わりと薄いわね。これなら破瓜の苦痛も少ないでしょうね」

美雪の羞恥は極限に達していた。腰の奥がますます熱く疼いて、全身が火照っている。

「淫核は発達しているわね」

つるんと、割れ目の頂点にある突起を剥かれた。

「ひゃああっ……ん」

痛みの中にはっきりと甘い衝撃を感じて、悲鳴が鼻に抜けた。

「くううう……」

剥き出しにされた粘膜をガラス棒でこすられて、未知の鋭い快感が腰の奥まで突き抜けた。腰が、がくがくと震える。腰の奥が熱いだけでなく、濡れていくのが自分でもはっきりとわかった。

「あら、検査の最中に感じているのね。淫乱——訂正、感度は鋭敏」

看護婦が鉛筆を走らせたが、美雪は気づかない。

女医は淫核に付着していた恥垢を、ちゃんと美雪の鼻の頭になすり付けた。

「机の上で四つん這いになりなさい」

どきん……！ 美雪の心臓が、つまずいたように強く拍った。それが絶対に必要な検査だということは、美雪も理解している。行軍中に大出血を起こしたり、決戦を前に動けなくなったりしては、本人だけでなくまわりの者にも迷惑をかける。

美雪は身体をひねって、両手と両膝を机の天板につけた。顔をうつむけたせいで、鼻の先につけられた自分の臭いが鼻腔を刺激した。拭き取りたいけれど、叱らせそうなので我慢した。

美雪は、性器を検査されたとき以上に緊張していた。恥ずかしさよりは、恐怖と不安だった。ガラス棒を奥まで突っ込んでグリグリ掻き回されるとか、家鴨の嘴のような器具でこじ開けられて中を覗かれるとか、身近の男性から脅かされた級友も少なくない。美雪の兄は妹をからかったりはしなかった。けれど、美雪が聞きかじってきた噂を、間違っているものについては明確に否定して、事実である

ものについては言葉を濁した。

尻たぶを左右に割り開かれたとき、それを予測していた美雪はぴくっと身体を震わせただけだった。

「ここも綺麗な色よ。皺が深くて緻密だわ。あなたの夫になる人は幸せ者ね」

意味はよくわからないが、卑猥な話題らしいとは見当がついた。

「いちおう、内痔核の触診もしておかなくてはね」

そう言って女医が美雪の肛門に押しつけたのは、ガラス棒ではなかった。もっと太くて柔らかな――指先だった。ねちゃねちゃした感触は、指先に軟膏でも塗っているのだろうか。

「もっと力を抜きなさい。おしっこをするときみたいに。はい、大きく息を吐いて」

美雪が息を吐くと同時に、つぶっと指が侵入してきた。痛みはなかったのだが。

「……………」

内側を指であちこち押されて、美雪はすこし気分が悪くなった。

指が引き抜かれて、肛門のまわりをアルコ

ール綿で拭かれた。その冷たさが、美雪を正気づかせた。

「異常無し。検査は終わったわ。診察台から下りなさい」

美雪は飛び降りるように床に立って、ズロースを穿いた。看護婦から受検票を返してもらって。女医と看護婦に頭を下げてから、逃げるように通路へ出た。緞帳とカーテンの間を歩きながら、美雪は何度も鼻の頭を指で拭いた。ちらっと検査票を見ると、いちばん下の欄には『外性器所見、正常』『痔疾患等、無』と書かれているだけだった。具体的な所見が書かれていなかったのも、美雪はホッとした。

反対側の控え室で、大尉の肩章を付けた判定官に検査票を渡した。判定官は十秒ほど眺めただけで、検査票に大きな角印を押した。

「合格、乙種第一」

「ありがとうございます」

美雪は型どおりに挨拶をしたが、内心では不服だった。男子でも甲種合格の目安は身長百五十二センチだった。美雪は百五十三センチある。他の娘より健康状態が良くて運動能力にも秀でている自分が乙種というのは、納

得できなかった。

それが声に表われていたのだろう。判定官が諭すように言った。

「女子の最上位は、現役を志望するしないに関わらず乙種第一なのだ」

数年前までは乙種合格者のうち、事前に兵役を志望していた者を第一と分類して、それ以外を第二とする。兵士不足の現況では無意味な区分けだった。女子徴兵検査では甲種該当者を乙種第一、本来の乙種を乙種第二と称するらしい。

「女子から甲種合格者を出すと、乙種で入営した男子が可愛そうなのでな」

「はい、わかりました。ありがとうございました」

それが男女差別だなどという考えは、この当時にはなかった。美雪はすっきりした気分になって、大きな声で返事をした。

(兵隊さんになるのかあ……)

同じく乙種第一で合格した佐東征子を伴って帰路に就いて。美雪は他人事のような心地でいた。女子兵がどのように軍隊に組み込まれるのか、まだ公表されていない。いきなり

戦地へ送られることはないだろうというのが、一般的な見方だった。実際には合格者の一部しか徴兵せず、内地任務を肩代わりさせるにとどまるのではないか。速成の医療教育を施して、野戦病院の看護兵にするのではないか。

どちらにしても自分は徴集されるだろう。そのときは——自分をここまで育ててくれた御国と父母への恩返し、そして父に代わっての罪滅ぼしに、是非とも頑張らなければ。と、観念的に考えるのが精一杯の美雪だった。

「……そうか」

最上位の格付けで合格したと聞かされて、父が発した言葉はそれだけだった。

「おめでとう。御国のためにしっかり働きなさい」

母は、形ばかりの激励。

美雪ほど体格が良くて健康なら合格するのは当然だし、兵隊に取られるかもしれないことを嘆くのは非国民のすることだから、両親の態度は立派といえは立派だったが。娘の運命にこれほど淡々としていられるのかと、美雪は疑念を持たないでもなかった。

週が明けると、美雪はそれまでと何ひとつ変わることもない女学校の生活に戻った。変わらなさ過ぎた。女子徴兵検査は三回に分けて週末ごとに実施されるので、級友の三人に一人は初回を受けているはずなのに、それが話題になることはなかった。男の人の前で裸になったなんて、けっして吹聴できる話ではないけれど。今後のことは気にならないのだろうか。徴集されるか否かで、進路が大きく変わるというのに。

当然の疑問への答えを美雪が知ったのは、翌週の水曜日だった。休憩時間に、隣のクラスの本堂絹江が美雪を廊下に誘い出した。徴兵検査へ行くとき、一緒だった娘だ。

「お別れのご挨拶をしておきたくて」

絹江は横須賀の海軍工廠に事務員として就職が決まったという。下宿の準備や面接のために、月末には横須賀へ行くことになる。

就職が決まってから面接を受けるというのもおかしい話だった。

「父が縁故を頼って、急に決まった話ですの。ていの良い徴兵逃れですわ」

絹江が自嘲気味につぶやいた。

「でも、わたくしだけでもありませんのよ。柴野様のクラスの大田さんは、卒業前に仮祝言を済ませて入籍されるとか。わたくしのクラスでは、島さんが——この方は、前々から決まっていたそうですが、卒業式の三日後に結婚式を挙げられます」

誰その家では先祖伝来の掛軸を手放したとか、仲の良かった夫婦がいきなり離婚して母子家庭になったとか、ゴシップ好きの女学生らしい話題も交えて、絹江は休憩時間いっぱい喋りまくった。大金を作ったというのは賄賂につながるのだろうし、母子家庭で弟妹の世話をしなければならなくなった娘は兵隊に取られないかもしれない。

徴兵逃れに腐心しているのは自分だけではないと、絹江は言いたかったのだろう。

「柴野様は、卒業後はどうされますの？」

「父の会社の事務を手伝うことになっていきますけれど……御国がわたしをお召しになるなら、喜んで馳せ参じます」

「そうですの？　でも、教育徴集になるのでしょうかね」

(あ……！)

美雪は、兄の正雄が三か月で除隊していたことを思い出した。甲種合格で徴集された兄は教育期間を終えるとすぐに除隊となった。兵隊として必要最小限の教育だけをして、予備役にまわす教育徴集という制度が適用されたのだった。

最近では教育徴集の実例を聞いたことがなかった。もしも自分が、父の裏工作で早期除隊ということにでもなったら、一億国民が火の玉となって強大な敵と戦っているときに、それは敵前逃亡にも等しい醜聞だと、美雪は思う。けれど。裏工作なんかしないでほしいと言ったところで、父はわかったわかったと頷きながら、娘のために良かれと思ったことをやめはしないに決まっている。

呆然と突っ立っている美雪に軽く会釈をして、絹江は教室へ戻った。

——三月が訪れてすぐ。美雪に縁談がまともりかけた。年末から進んでいた話のようで、お見合いをして双方に依存がなければ、すぐにでも結納を交わす段取になっていた。

相手の素性を聞かされて、美雪は眉をひそめた。どうせ恋愛結婚などかなわぬ夢と諦め

ていた。銀行の偉いさんか将官の御子息、それとも若手の中央官僚。そんなところだろうと予想していた。ところが、美雪の夫に見立てられたのは、倍も歳の違う陸軍大尉。両親はそれなりに裕福な地主だというが、柴野家としては縁戚になって何の得もない相手だった。

「こんな徴兵逃れが見え透いたお話なんて、厭です」

核心を突いて拒否したが、とにかく会うだけは会いなさいと強く言われると、それ以上は父に逆らえなかった。

お見合いまでの数日間、美雪はあれこれと考えて、卒業の準備どころではなかった。

陸軍将校の婚約者となれば、徴兵をまぬがれる可能性はある。階級は高いほど良いが、お相手は三十六歳の大尉。大佐にでも出世すれば柴野家にも何かと便宜を図ってくれるだろうが、この歳で佐官にもなっていないのだから、見込みはない。

それにしても。早期除隊になるよう裏工作をしていては間に合わないほど、事態は切迫しているのだろうか。兄のときに横車を押し

過ぎて、二匹目の泥鰌は無理ということなのだろうか。陸軍上層部につながりのある父は、女子兵の扱いについて、何か知っているのだろうか。たとえば、全員が戦地へ配属されて生還を期しがたいとか。

戦死。その言葉がちらっと頭に浮かんだが、実感はともなわなかった。

——当日。日本髪に結って初めての薄化粧をして振袖姿で、いちおうはしおらしくお見合いの席に座って。

(ええっ……?)

げんなりした。第一印象は、逆さ下駄。五分刈りの頭が角張っていて顎が張っている。太い眉毛が怒ったように吊り上っていて、下駄の鼻緒をひっくり返したみたい。滑稽というよりは怖い顔だった。年齢相応に腹も出ている。

美雪は顔をうつむけて塩っぱい桜湯をすすりながら、仲人さんが双方の両親をあおるように、どんどん話を進めていくのを聞いていた。

結納を交わしても、すぐに祝言を挙げるわけではないと、父は言っていた。もっとふさ

わしい男性が現われたら、今度の話は破談にしてもよいと。だから今日のところはおとなしくしておくれと釘を刺されているのだけれど。

「では、今月中の吉日に結納の段取りでよろしいですね」

「時局柄、何事も儉約が第一です。結納はやめて仮祝言にしたいと、自分は考えておりますが、いかが？」

「仮祝言となると……」

同居生活はともかくとして、すくなくとも仮祝言の当夜は同衾することになる。美雪の父が渋るのは――今日の相手は徴兵逃れの当て馬だからだ。

美雪としても、この男性と肌を合わせるなんて真っ平だった。けれど、それ以上に。

「わたし、このお話はいったんお断わりさせていただきます」

美雪は座布団を前へ押しやるようにして立ち上がった。

「この危急存亡の秋、徴兵逃れの駆け込み結婚なんて、非国民のすることです。四月が過ぎても徴集令状をいただかなかったときは、

あらためてお話を進めてください」

言い放つと、慌てる両親を尻目に美雪は座敷から逃げ出した。

——さすがに大目玉を食らうだろうなと覚悟していた美雪だったが、困ったことをしてくれたなと小言をもらっただけですんだ。父はまだ次の一手を持っているのかと疑った美雪だったが、何事もなく日が過ぎて、卒業式の翌日に徴集令状が届いた。

## 2章 新兵教育（繩禪で全裸行軍）

月曜日の四月三日。美雪は父母に伴われて、徴集令状に指定された場所へ赴いた。佐東征子も徴集されていたが、身寄りのない彼女は付き添いの女中にしか見えなかった。

汽車と木炭バスを乗り継いで三時間。女子新兵教育第七大隊——学童疎開で無人になった小学校を利用して建設された施設だった。

女学校の卒業生百二十人のうち、徴集されたのは四十人ほど。陸軍付属看護婦養成所への入所を命じられたのが十人で、その他は内地勤務の軍属にまわされた。現役の兵士として徴集されたのは美雪だけだったことになる。こうなってみると、美雪の父の裏工作が失敗したというよりは、それへの懲罰ではないかとさえ思えてくる。

（それでも——わたしは立派に御国のために働いてみせる）

父を恨むことなく健気に決心する美雪だった。

——肉親の付き添いは正門まで。美雪は父

母に一礼すると、後ろを振り返ることなく正門をくぐった。

受付の天幕で徴集令状の照合。体調の悪い者はここで申し出て軍医の診察を受け、場合によっては即日の帰郷を命じられることもある。しかし、美雪の見たかぎりでは申告する者はいなかった。皆、本邦初の女子兵としての名誉と重責とをひしひしと感じている。

入営を許可された者は、体育館で兵器の支給を受ける。兵器といっても、小銃などではない。兵が用いる器具は、すべて兵器なのだ。平たくいえば――軍靴、営内靴、軍服、下着類などだった。それらがひとまとめに詰められて、あらかじめ名前が書かれている袋を受け取る。

定刻になって。四百八十名の新兵は支給された荷物を持って営庭に整列した。

この部隊の最高責任者である高橋甚吾少佐の短い訓示。

伝統と栄光の帝国陸軍、新たな一頁、大和撫子の底力。決まり文句ばかりの訓示を、美雪はまるで聞いていなかった。正面に居流れる教官だか部隊長だかの一人に、美雪の目は

釘付けになっていた。四角い顔に、下駄の鼻緒をひっくり返したような眉。お見合いの席で振った相手――皆川秋夫大尉その人だった。皆川大尉は美雪の凝視に気づいたふうもなく、左胸に略綬をちりばめた軍服を着て、ゆったりと立っている。お見合いの席で見た私服姿より、五割方は男前だった。

（父は知っていたんだ……）

新兵教育部隊の教官が、婚約者を訓練するわけにもいかない。婚約が成立していれば、美雪は確実に徴兵を免れていただろう。

美雪は先行きに漠とした不安を感じた。陸軍将校ともあろう人が、まさか小娘に振られた私怨を、軍規厳正な場に持ち込んだりはしないだろうけれど。

「ただいまより、分隊ごとに軍装を整える。先に申し渡した小隊単位で集合せよ」

体育館の壁際に少尉から上等兵までの上官が七人ずつ、十二の組に分かれて立っている。美雪と征子は『第1中隊2』と床に書かれた所へ行った。

「第一分隊は右、第二分隊は左へ整列ッ」

少尉の肩章を付けた若い男性に命令されて、

ざわざわざわと四十人の娘たちが二列に並んだ。少尉の後ろに立っている二人の下士官が、その動きを不機嫌そうに眺めている。

「貴様たちの小隊長、渡辺孝二である」

細めでハンサム。四十人の目がキラキラしてきた。

「第一分隊長の林伍長、第二分隊長の北村伍長」

美雪の直属上官は、とにかく目が細いという印象がすべてだった。

「前任、あとは任せたぞ」

かわって、林伍長が前に立った。

「第二小隊、まわれー右ッ」

ざざざざざと、四十人が後ろ向きになる。

「第二小隊、まいえー進めっ」

ざんっ……四十人が一斉に左足を踏み出す。学校や町内会で軍事教練を受けているから、足並みくらいはちゃんとそろろう。玄関で脱いだ靴は手に持って、教室へ移動。ひとつの教室が一個分隊二十人に割り当てられていた。

教壇以外の机は取り払われていて、教室の後ろには布団が積まれている。布団の山と山との間には行李が二十個。それが新兵一人ず

つの荷物入れだった。

「ただ今より、軍装を調える。私服はすべて脱衣せよ」

一瞬。美雪は言葉の意味がわからなかった。ほかの娘たちもぽかんとしている。

「ええーっ？」

誰かが素っ頓狂な声をあげたのを皮切りに、教室がざわついた。

「私服って……全部ってこと？」

「ここで裸になるの？」

「こんなのって、聞いてない」

「やだよ……」

悲鳴のような囁きが飛び交い、娘たちは顔を見合すばかり。

「私語は慎め！」

林伍長に一喝されて、娘たちはぴたりと口を閉ざした。

「同じ命令を繰り返すのは、これが最後だぞ。私服はすべて脱衣せよ——いや、生理中の者は下穿きを着用したまま窓際へ並べ」

軍隊とは恐ろしいところ。初年兵にとっては地獄も同然。身近な兵役経験者から脅されている娘も少なくはなかった。黒板の前に並

んでいる上官たちに背を向ける格好で、娘たちはおずおずと衣服を脱ぎ始めた。

美雪もブラウスのボタンをはずしていった。いったん覚悟を決めると、無垢な処女の大胆さで、潔くモンペまで脱いだ。ズロースのゴムに手を掛けると、さすがに恥ずかしさで全身が燃えるようだったが、えいやっと引き下ろした。

窓際に並んだ娘は五人。

「生理中の褌については説明せずともわかるだろう。衣類袋の上から二番目にある黒い丁字帯を着用せよ。当て布は丁字帯に挟んである」

五人は腰をかがめて黒い布を取り出した。八十センチほどの長さで幅は二十センチ。一端に黒い紐が付いている。後ろから前へ通した布を、腰に巻いた紐にくぐらせる。越中褌は軍隊で制式採用されている下穿きだった。女性も出産の前後にはお世話になるし、これを生理帯にしている娘も少なくない。

「常用する褌について説明する。衣類袋のいちばん上にある布を取り出せ」

皆に背を向けて――ということは、窓の外

に正面を晒して生理帯を付け替えている五人を除く娘たちが、命令に従った。

「ええーっ？」

さっきと同じ娘が、全員の気持ちを代弁した。

美雪も布を手にして首をかしげた。布は幅十センチ、長さ二十センチほどの三角形だった。底辺が折り返されて筒状に縫われている。三角形の頂点からは一メートル以上の紐が伸びていた。黒猫褌と呼ばれている下着なのだが、美雪——だけでなく、ほとんどの娘は知らない。そもそも、これをどう着用するのも見当がつかなかった。

「さっきから騒々しい貴様、名前は？」

素っ頓狂な悲鳴をあげていた娘が、指差されてびくっと裸身を震わせた。

「西川……和子」

「声が小さいッ！ 申告するときは直立不動の姿勢だ。デアリマスを付けろ。やり直し！」

娘は胸をかばっていた手を反射的に下ろして、背筋を伸ばした。

「西川和子であります！」

やけくそめいた大声。

「よし。西川三等兵、前へ出て皆に向き合え。  
女子禪着用の手本を示せ」

和子は戸惑いを顔に浮かべて、林伍長の横に並んだ。

「禪の前ミツに紐を通せ。できた輪の中に片脚を入れて禪を引き上げろ」

紐の端を後ろへまわして輪に引っ掛けて、ぐいと引き寄せる。三角形の頂点から伸びている紐が、尻の谷間におさまった。

「紐をじゅうぶんに引き締めてから、余った端は腰紐にねじって巻きつけろ——それではユルフンだ」

林伍長は和子の手を払いのけて、尻に食い込んでいる紐を、和子の踵が浮くほど力いっぱい引き上げた。

「痛い……きついです」

「いちいち泣き言を入れるな」

最後に、すぼまっている逆三角形の形を整えて、着用よし。

「貴様、毛が濃いな。はみ出ているぞ」

ひゃあっと叫んで、和子がうずくまった。全裸を見られるよりも、下着からはみ出た淫毛を見られるほうが恥ずかしい。

「今日のところは見逃しておく。各員、下の毛を手入れしておくこと。いっそのこと——」

それまで真面目くさった顔で説明をしていた林伍長が、好色そうにニヤリと嗤った。

「丸刈りにしてもかまわんぞ。長髪を許してあるのだから、そのかわりだ」

兵隊は丸刈りが原則だ。二等兵が五分刈にでもしようものなら、ビンタくらいではすまない。しかし、女子兵は例外的に長髪が認められた。といっても、髪型は二つだけ。首筋が見える散切りか、肩甲骨までの三つ編み。

美雪は許されるぎりぎりの長さで三つ編みにして、毛先から五センチほどのところを小さな臙脂色のリボンでくくっていた。

娘たちは見よう見真似で褌を身に着けた。上等兵の二人が、褌の締め加減をたしかめていった。ユルフンはほどいて、彼らの手で容赦なく引き絞る。

ひとりだけ、手際よく身に着けた娘がいた。紐はまったく肌に食い込んでいないのに、逆三角形の布がぴたりと吸いついている。ばかりか、うっすらと縦筋が股間に浮いていた。ほう……といった感じで林伍長に覗きこまれ

ても、平然と正面を見つめて姿勢を崩さなかった。

禪のつぎは肌着（軍隊では襦袢という）。これも、男子兵のものとは形が違っていた。灰色の粗末な生地で作られた袖なしの丸首。女子のほうが小柄だし、腰回りに比べて胸部が大きいのだから、別仕立なのはわかるとしても。丈が腰までしかなかった。禪も襦袢も、布を惜しんでいるとしか思えなかった。

軍衣はあちこちが繕われたお古。胸回りを基準に選んであるため、全体にぶかぶかで袖は折り返す必要があった。軍袴（ズボン）にいたっては膝が抜けたのを切り落として、五分丈だった。尻が擦り切れかけた品も少なくない。

新兵はお古をあてがわれるとは聞いていたけれど、寸切れのズボンなんてひど過ぎる。その程度にしか期待されていないのだと、美雪はひがんだ。

男子は二等兵としていきなり現役部隊へ編入されるのに、女子は三等兵として別途に基礎教育を受けさせられるというのも、能力を疑われているからだろう。

教育部隊といっても、編成は現役部隊に準じている。まがりなりにも軍装に改めた娘たちは、十人ずつの内務班に分けられた。班長を務める上等兵に軍制上の指揮権はないが、日常生活の指導は彼が主体となる。ここでも美雪と征子は同じ班に割り振られた。班長は横田上等兵。年下の娘たちに囲まれて、照れくさそうな顔をしている。

それまで着ていた私服は一人ずつ小さな行李に入れて、分隊長に預けて。

最初は、軍隊内における最低限の礼儀を教え込まれた。といっても、全員が最下級の兵士。女性として男性を立てる心構えはできているから、その応用で――男子兵よりはよっぽど早く分隊長を満足させた。

そのつぎは、布団の上げ下ろし。頭を向かい合わせにして一班十人が五列、八十センチの通路を空けて、また五列。これを三分以内。片付けるのは五分以内。布団はぴったり直角にたたんで、角を揃えてまっすぐ積み上げる。

「布団を敷くのに十分もかけて、どうする」

「そこ、通路が狭い。やり直し」

「なんだ、この積み方は。女のくせに、布団

も満足に扱えんのか」

敷いてはたたみ、積んでは敷きなおす。賽の河原もかくやという作業の連続。急ぐあまり、あちこちでぶつかったり転んだりの阿鼻叫喚。一時間も繰り返すと、娘たちは汗びっしょり。それでも班長の指導で、作業を分担するコツもつかんで、なんとか合格点をもらえた。

すこし遅れての<sup>ひるめし</sup>昼食（メシと言わなければならない）。角張ったバケツにはいったご飯と副菜と汁を炊事当番が運んできて、黒板の下に立てかけてあった折りたたみ式の長机を部屋の中央に広げて、まず分隊長と班長の食事を盛る。この三人は、飯を増やせだの汁を減らせだの、注文のつけ放題。それから、二十人分を均等に分配。

ちなみに。小隊長以上は理科教室を改装した将校食堂で食事をするか、自室に持って来させる。寝起きも別。

「いただきます」の合唱で、食事開始。とたんに、部屋がにぎやかになった。

「うわあ、銀シャリだよ」

「鰯の煮付けが、まるまる二匹……甘辛くて

おいしい」

「お味噌汁、ほんとに味噌の味ができる。これだけでご飯が食べられちゃう」

トウモロコシだの豆滓だのの代用食が常態化した配給で飢えていた娘たちにとって、軍隊の食事は夢のようなご馳走だった。

けれど美雪にとっては、粗食以下の食事ではない。銀シャリというけれど、麦が三割は混じっているし、米も黄ばんでいた。鯛の煮付けも、微妙にアンモニア臭がしていた。

不満に思っではいけないと、美雪は自分を諭した。これまでの生活が贅沢だったのだ。美雪はろくに咀嚼もせず、息を止めるようにして口の中の不快な味を呑みくだした。ほうっと息を吐いて。ほとんどの娘が夢中でかぶりついている中、美雪と同じように食事を持って余している者が二人いるのに気づいた。

佐東征子は、女中とはいえ柴野家の人間だから、それなりの給食を受けてきた。無表情に黙々と口を動かしているが、つまりこの食事に感激はしていないということだ。

それから、ひとりだけ器用に禪を着けていた娘。胸の名札をちらっと見ると、本田加奈

恵と書かれていた。思い切り裁ち落して六四に分けた、簡素にしてお洒落な髪形。色白の勝気そうな顔にはっきりと眉をひそめて、機械的に箸を進めていた。

分隊長も二人の班長も、娘たちがおいしそうに食べているか不味そうにしているかには関心がないようだった。しかし、行儀にはうるさい。寄せ箸やねぶり箸を見つけると、厳しい声で叱った。

炊事当番は校庭（ではなくて宮庭）の隅に設けられた物干場ぶっかんばの横で食器を洗ってから返納して。一三〇〇（午後一時）までの休憩は、巻絆まきはんの巻き方の練習にあてられた。

分厚い包帯みたいな薄茶色の布。これを踝から脛脛にきつく巻きつける。ズボンの裾を押さえるだけでなく、長時間の行軍時には脚への鬱血を防ぐ機能もある。だから、五分丈の軍袴でも装着しなければならない。緩く巻けば、すぐずり落ちる。きつ過ぎると、血行を妨げる。きちんと巻けるようになるまで、何度も練習させられた。

午後からは行軍の訓練。というよりは体力づくり。背囊に十キログラムほどの荷物を詰

めて、木銃を肩に担いで、分隊単位の二列縦隊で営庭をぐるぐる歩く。

「歩調一取れッ」

「イッチニ、イッチニ、イッチニイサンシー」

ザザッ、ザザッ、ザザッ……微妙にそろっていない。

「野田、前列と開きすぎている」

「森本、銃を立てろ」

右手で銃を支えて、左手は歩調を取って、背筋を伸ばして、膝をきちんと蹴り上げて二十人が一斉に脚を着地させる……最初はひとつずつ気をつけていても、肩に食い込む背囊の重みで、それどころではなくなってくる。

「足並みが乱れてきたぞ」

「実戦では何倍もの荷物を担ぐのだ。これくらいで、へばるな！」

五十分歩いて、小休止の号令。ぺたんと座り込んで、肩で息をする娘たち。やっと息が落ち着く頃には十分が過ぎて、行軍再開。

今度は三十分もすると息があがってきた。脚だけが機械的に、ざんっざんっ前へ出ていく。巻絆のおかげか、疲れているわりに脚は軽い。

(あと二十分……)

営舎の壁に掛けられた時計を数分おきに見上げながら、つぎの小休止を待ちわびる。

(あと十分……もう、ひと頑張り)

美雪だけではない。誰もが同じ思いなのだろう。疲労を意識して足並みが乱れた、そのとき。

「きゃあ！」

「うわ……！」

「ぶつかる！」

先頭を歩いていた娘がつまずいたかどうかして隣の娘にすがりつき、そこへ後続の二人がぶつかって。四人がまとめて転んでしまった。

「痛あーい……」

「馬鹿者、なにをしておるかッ！」

分隊長が飛んできて、四人の頭上に罵声を浴びせる。

「だって……ズボンが合わなくて、脱げそうになったんです」

最初に転んだ娘——鈴木登代が上体を起こして言い訳をした。指導のためにつくっていた分隊長の厳しい表情が、ほんものの怒りに

変わった。

「貴様、国民の血税で購われた兵器にイチャモンをつけるのかッ！」

登代も顔色を変えた。自分の失策に気づいたのだ。が、遅かった。

「合わない軍袴など脱いでしまえ」

登代は言葉を失って分隊長の顔を眺め、厳しい視線に射竦められてうつむいた。

「もったときつくベルトを締めれば……」

「敵性語を使うな、<sup>たいかく</sup>帯革と言え。起立！」

号令をかけられて、あわてて登代は立ち上がった。

「あの……」

「俺は、軍袴を脱げと命令したのだぞ。上官の命令に逆らう者がどうなるか、身をもって知りたいのなら教えてやるぞ？」

それまでとは一転した優しい声が不気味だった。登代は肩を震わせながら軍袴を引き下ろした。脚から抜き取ろうとして前かがみになり、背囊の重みでまた転びかけた。

「転んだ三人も連帯責任だ。軍袴を脱げ」

すぐそばで成り行きを見守っていた三人は、競うように軍袴を脱ぎ捨てた。さいわいに軍

衣の裾が長いので、尻はすっぽり隠れる。しかし、四人とも顔を真っ赤にして羞恥に震えている。

全員が裸になった徴兵検査や着替えのときは状況が違う。五百名ちかい同年兵と何十人もの上官（男性）の中で、腿の付け根ちかくまで露出しているのは自分たちだけなのだ。現代のファッション感覚でいうなら超ミニのワンピースといったところだが、この時代の娘たちにとって、公衆の面前で太腿を晒すなど破廉恥きわまりない行為だった。

とはいえ。道端どころか電車の中でも平然と赤ん坊に乳房をふくませる母親が珍しくはなかったのだから——つまりは、露出する必然性の有無ということだろうか。現代でも、水着姿で街中を闊歩する娘は（ほとんど）いない。

それはともかく。分隊長は娘たちの羞恥をあおるつもりか、帯革で絞った軍袴をそれぞれの木銃の先端に括りつけた。

四人は半ベソをかきながら隊列に戻った。木銃を肩にかついで、脱いだ軍袴を幟のように押し立てた。

「小休止、終わりッ」

始まってもない小休止が終わってしまった。しかし、命令に逆らう者への罰を志願する娘などいなかった。

「分隊まいえー進めッ」

ザンッ……二十人の左足が、一斉に踏み出された。ざん、ざん、ざん……気合を入れられた娘たちの歩調は、見事にそろっていた。

——延べ四時間におよぶ行軍訓練が終わって。這うようにして部屋へ戻ると、疲労で倒れそうだった。けれど、課業は続いている。背囊を所定の場所へしまつて、木銃を磨いて銃架に立てて。炊事当番は夕飯を取りに行く、他のものは長机を引き出して食器を並べる。

長机は二つ。女子兵五人ずつが向かい合つて、上座に班長。分隊長は教壇に陣取っている。

「なんだ、この飯の量は？」

第二班長の清水上等兵が箸を両手に持った。「多すぎる。昼飯のときに教えたはずだぞ」箸を器用にあやつつて、汁椀の中に飯椀をひっくり返した。汁は一滴も飛び散らない。

「申し訳ありません！」

盛り付けた娘は、上体を四十五度に傾ける無帽時の最敬礼をしてから、別の飯椀にご飯をよそった。ぶっかけ飯は、彼女が引き受けるしかない。均等に配給する量より多めだから役得といえなくもないが、当人は失態に顔を引き攣らせている。

配膳が終わって。分隊長の合図で、一斉に「いただきます」

疲労困憊。食欲なんてない——ような顔つきの娘たちだったが。最初のひと口を食べると、猛然と食欲が湧いてきて。五分後には半数以上の者が食べ終えていた。

美雪は逆だった。痛んだ古米の臭いが鼻について、ますます食欲が失せた。

(でも、食べなきゃ……)

食事を残すなんて、もってのほか。お天道様に罰があたる。だいいち、食べて体力をつけなければ訓練についていけない。吐き気に蓋をするように、汁で流し込んだ。

食事の後片付けが終わると、汗まみれになった下着の洗濯と入浴。入浴は義務ではないので、美雪は見送った。月の障りでもないのに汚れた身体のまま寝るなんて、物心ついて

以来のことだったが、疲労には勝てなかった。

夜の点呼が終わって、二一〇〇(午後九時)に消灯。ただし、全員が就寝できるわけではない。ひとりずつ一時間交代で廊下に立って不寝番。実戦にそなえての訓練だろうが、別の理由があるのかもしれないと、美雪は疑った。半日の行軍訓練は、軍事教練とは比べものにならない厳しさだった。これから、もっともっと厳しくなるだろう。脱走を試みる不心得者が出ないともかぎらない。

しかし、今日の訓練を厳しいと感じたのは、美雪がしょせんはお嬢様育ちだったからだろう。

「思ったより、上官が優しいね」

「うん……まだ誰もビンタされてないよね」

そんなひそひそ声が、美雪の耳に届いた。

言われてみると、たしかにそうだった。ビンタなんて『しごき』のうちにはいない。鉄拳制裁とか自転車漕ぎとか編隊飛行とか、毎晩のように新兵は虐められると、美雪も兄から聞かされた記憶があった。

女子だから手加減してくれているのかもしれない。美雪は複雑な気分になった。軍袴を

脱がされた情景を間近に見ていても、それが女子にしか加えられない体罰だとまでは思い至らなかった。

別室で行なわれていた打ち合わせが終わって分隊長たちが部屋に戻ってくると、ひそひそ声も途絶えた。

美雪はすぐ深い眠りに落ちて――起床喇叭で叩き起こされた。

○五三〇（午前五時半）。内紐式の薄い寝巻を軍装にあらためて、朝の支度。便所は増設されていたが、男子兵の所要時間を基準に数を決めたらしくて、長蛇の列。集合の喇叭に追われて、尿意をこらえながら営庭へ駆けていく娘も少なくなかった。

営庭で分隊ごとに整列して、番号を唱えて員数確認。

「第一小隊第一分隊、総員二十三名、病欠二名、現在員二十一名」

「第一小隊第二分隊、総員二十三名。欠員なし、現在員二十三名」

病欠というのは、生理が重くて訓練を免除された者のことだ。

分隊長の報告を受けて、小隊長が中隊長に申告する。

「第一中隊第二小隊、総員四十八名。病欠二名、現在員四十六名」

総員が増えているのは、小隊長本人と小隊付下士官が員数に加えられたから。

員数確認の後は、小隊長直々の服装検査。  
「襟が折れている。火熨斗（アイロン）を掛けておけ」

「いつまでも袖を折り返しているんじゃない。女のくせに裁縫もできんのか」

「上官の顔を見つめるものではない。額のあたりに注目せよ」

「戦闘帽は、まっすぐ被れ」

「貴様、釦を掛け違えておるぞ」

失笑が湧いて、分隊長にどやされる。

「ただいま指摘を受けた者は、本来なら相應の罰直を与えるところだが、一回だけは目をつむってやる」

点呼の後は、体操と駆け足。

「厠を済ませておらぬ者は、分隊長に申告してから行ってこい」

矢鱈に厳しいだけでなく、見るべきとこ

ろはちゃんと見ていて、臨機応変の処置。

○七〇〇から朝飯。朝だからなのか、麦だけでなく雑穀も混じった雑炊。量だけはたっぷりあったが、それが美雪にとってはつらい。塩辛い味噌汁で無理やりに流し込んだ。

午前の演習は座学。軍隊手帳の講義というよりも棒読みと丸暗記。軍隊手帳は、最初の部分が身分証明書と履歴になっていて、次の頁からは軍人勅諭とか戦陣訓とかがびっしり印刷されている。

手帳にびっしりの漢字と難解な言い回しに頭を抱える娘がほとんど。二千七百字からなる軍人勅諭は、全文暗誦を義務付けられた。女学校を卒業したばかりの美雪にとっては、至極平明な文章だが、原稿用紙五枚以上の文章を暗記するとなると、そう簡単ではない。ほかの娘たちと同じように、何度も繰り返して音読するしか方法はなかった。

首筋が熱くなるほど頭を使ったあとは、軍隊生活二度目の昼飯。七分搗きの黄変米と麦三割の臭い飯、筋だらけの牛肉ちよっぴりを汁が真っ赤になるほど入れた唐辛子で煮込んだ大根。牛肉というだけで感涙にむせぶ娘も

いる中で、美雪はその牛肉を噛み砕こうと悪戦苦闘していた。

「ねえ、あんた……」

最初、美雪は自分に向けられた声だと気づかなかった。

「なんで、そんなに厭そうに食べてるのさ？」

美雪は顔を上げた。阿倍房江と名札に書かれている斜め前の娘と目が合った。

「知らないの？ 柴野は御用達商人のお嬢様なのよ」

同年兵同士は姓を呼び捨てにする。

「ああ、柴野石炭商会ね」

名札を見ただけでは気づかなかったのだから、房江の出身地は城泉市から離れているのだろう。それでも、柴野石炭商会の悪名は知っていた。

「それじゃ、こんな粗末な食べ物なんて、お口に合わないんでしょうねえ」

皮肉たっぷりに言ってから、伝法な口調で付け足した。

「だからって、そんな不味そうな顔をするんじゃないよ。あたいたちにとっちゃ、これでも大ご馳走なんだ」

美雪は口の中の塊を飲み下してから、頭を下げた。

「ごめんなさい。これからは気をつけます」

楽しく食事をしているときに、不愉快そうにしている者が交じっていけば雰囲気はぶち壊しになる。怒られても仕方がないと、美雪は反省した。

「無理することはないよ。不味いものは不味いんだから」

隣の長机に座っていた娘が、美雪をかばった――にしては、挑発的な言い方だった。美雪よりもはっきりと、食事に不快の色を表わしていた本田加奈恵だった。

「あちきなんかね、朝からビーフステーキにチキンのスープ。夜は夜で、鯛の生き造りや牡丹鍋。贅沢な食事に舌が肥えちまって、こんな残飯は食べられんせん」

「本田……」

班長の清水上等兵が立ち上がりかけたが「初年兵の言い分を最後まで聞いてやれ」

林分隊長に低い声でたしなめられて、腰を落とした。

「残飯といえば、あちきのご馳走もお客の残

飯ではありんすけどね」

「お客……？」

美雪には、加奈恵の言葉の意味がわからなかった。廓言葉そのものの存在を知らないのだから、無理もない。

「あいね。売れっ妓ともなれば、お昼まで寝てても叱られないし、のんびり湯に浸かって肌を磨いて、お客に相伴してご馳走を食べて、好色爺いだらうと女を縛るのが好きな変態役人だらうと、にっこり笑って股ぐらを開いて、あんあん鼻声を出してりゃ暮らしていったんだ。ほんっとうに極楽の生活をさせてもらったよ——ぬしさんの父御<sup>ててご</sup>のおかげでね！」

「……………！」

ここまで明け透けに語られては、美雪も彼女の素性に気づかないわけにはいかなかった。しかし最後の部分が、憎しみを叩きつけるように吐き出された言葉が理解できなかった。

「わたしの父が……なにか？」

「そうともさ。わっちの父さんはあんたんとこの炭鉱夫だったんだ。炭塵のせいで胸を患ったというのに、いきなりクビにしやがった。療養費の前借とやらで身ぐるみ剥がされて、

炭鉦長屋も追ん出された。路頭に迷って、しょうがないから、わっちが身売りさね」

美雪は衝撃で口が利けなかった。父の無慈悲な遣り口は知っているつもりだった。何十人何百人もの人が泣かされていると、そのことに胸を痛めてはきた。けれど、しょせんは実感を伴わない理解であり、他人事の同情だった。相手を選ぶ自由もなく、夜毎に男に抱かれる。同じ女性として、身の毛もよだつような境遇だった。

「でも、あなたには親兄弟が残されているのでしょうか？」

佐東征子が腰を浮かして、物静かに加奈恵へ語りかけた。

「あたしの父は、コークス精錬工場の社長だった。柴野石炭商会に乗っ取られて、一家心中したわ。自分だけが生き残って、親の仇に引き取られたのよ」

「そのことは、父も済まなく思っています。だから、女中といっても家族同然に遇してきました」

それがなんの罪滅ぼしにもならないとはわかっていきますけど——と言葉を続ける前に、

圧倒的な怒りの言葉が浴びせかけられた。

「無給の妾が、家族同然なものか！」

「え……？」

日頃は過保護なくらいに身の回りの世話をしてくれていた女中の言葉に、美雪は耳を疑った。メカケ……聞き違いだと思った。

「●三歳で引き取られて……その夜のうちに、犯されたわ！ まだ毛も生えていなかったそこに、搦粉木みたいなのを突っ込まれてね。自分の身に何が起きたのか、土曜日ごとに何をされているのか、ちゃんと理解したのは●四になってからよ！」

美雪は頭が真っ白になった。ほとんど無意識に、床に両手をついていた。尻を後ろへ滑らすようにして、土下座した。

「ごめんなさい！」

ただ詫びるしかなかった。一家心中に追いやった仇に身柄を引き取られるというのは、年端もいかない少女にとっては他に選択肢がなかったとはいえ、耐え難い屈辱だったろう。今さらに、美雪はそのことに思い至った。しかも、引き取られたその夜に純潔を奪われて、それからも犯され続けてきたなんて。どれだ

け待遇を良くしたところで、償える罪ではない。

そして、加奈恵。美雪の父が原因で苦界に身を沈めた。この二人には、どれだけ謝っても済むものではなかった。いや……二人だけではない。父のせいで悲惨な境遇に追い込まれた一家は、何十何百とあるだろう。その人達の怨嗟が、ずうんと背中に乗せられた思いだった。

「土下座されたって、父さんも母さんも兄ちゃんも洋子も、生き返らないんだよ！」

征子が立ち上がって美雪の横に立った。

「こん畜生っ！」

呪詛の言葉とともに、美雪の脇腹を蹴り上げた。

「ぐうっ……！」

美雪は土下座した身体をさらに丸めて、その場にうずくまり続けた。

「おまえなんか、おまえなんか、おまえなんか……！」

ずんっずんっつと蹴り入れられる爪先。美雪は低く呻きながら、痛みを黙って耐えた。父の所業を非難するよりも、間近に仕えてくれ

ていた女性の恨みに気づかなかった自分の無神経さが許せなかった。

「今は、それくらいで堪忍してなんやんし」  
征子が怪訝そうに加奈恵を振り返った。

潮時と見てとったか、林分隊長がすっと立ち上がった。

「メシの時間に、なにを騒いでおる。軍隊内で私的鬭争は許さん。全員、起立ッ！」

なんだかわからないけれど叱られそうだ。怯えた表情で娘たちは命令に従った。美雪も脇腹を押さえて身体を起こした。

「食卓を挟んで向かい合え。よーし、それでいい。廊下側の者、正面の者にビンタを張れ」  
きよとんとしている娘たち。

「騒ぎを起こした者、見ているだけで止めなかった者。連帯責任だ。互いにビンタを張って反省しろ」

いきなり言われても。止める間もあらばこそその出来事だった。それに、班長も分隊長も黙って見ていたじゃないですか——と、反論する娘はいない。

数秒、気詰まりな沈黙が続く。

「ごめんね……」

ひとりが手を上げて、正面の娘の頬をペチンと叩いた。

「なんだ、それは。本気でビンタを張れッ！」

気圧されて、何人かの手が動いた。バシン……バシッ……。

美雪は窓に向かって座っていたから、最初に叩く側だった。自分が原因で起きた騒ぎに巻き込まれた相手を叩く気には、どうしてもなれない。

「柴野、何をしている。残っているのは貴様だけだぞ」

仕方がない。美雪は思い切って右手を振り上げた。

「ごめんなさいっ……」

小さく叫びながら、右手を相手の頬に叩きつけた。

ベシッ……右手が焼けるように熱く感じられた。

「よーし。窓側の者、ビンタを張れ！」

美雪に頬を叩かれた娘は、ためらうことなく右手を大きく振りかぶった。

バッシン！

耳がキインと鳴って、目の前に星が飛んだ。

「貴様ら、反省した顔ではないな。交互に往復ビンタを張れ」

一度でも叩いてしまえば、二度も三度も同じことと考えたのか。それとも。分隊長が納得してくれるように本気で叩こうと決心したのか。

バシ、バシッ……パチン、パチン……ひとしきり乾いた音が部屋に響いた。

「もう一度……手加減するな、やり直しッ！」

五回の往復ビンタで、娘たちの頬は真っ赤に腫れあがった。

——午後からは、昨日と同じ行軍訓練。二十人の娘たちの腫れた顔を見て、小隊長の渡辺少尉は満足そうにうなずいた。

「うむ。第一分隊は気合がはいっておるな」

敵前逃亡した者をその場で射殺する権利が認められている軍隊だが、私的制裁は明文で禁止されている。事が公になれば、手を下した下士官は軍事裁判にかけられるし、その上官である将校も処罰されたうえに、出世の道を絶たれる。

しかし、初年兵が自分たちの不甲斐なさを反省して相互に気合を入れるのは、私的制裁

ではない。そういう理屈で、娘たちの腫れた顔は問題にされないのだった。

第二分隊も、明日は我が身と気を引き締めて。その日の行軍訓練は最後まで足並みがそろっていた。

難癖をつけられないよう、まわりの早さに合わせて夕飯を胃袋へ流し込んで。替えの下着を持って、美雪はひとりで入浴場へ行った。

通りすがりに物干場を見ると、下着だけでなく軍衣も何着か干されていた。替えは支給されていないのだから、軍衣を洗った娘は寝巻姿で営舎へ戻って、翌朝は四時くらいに起きて取り込んで、大急ぎで火熨斗を掛けなければならない。

(雨が降ったら、どうするのかしら?)

そういった事柄を気にかけるくらいには、美雪は立ち直っていた。巻き添えを食った人には申しわけないけれど、ビンタをもらったことで、それなりに気持ちの整理がついたように思っていた。

営庭を挟んで営舎と向かい合う場所に建てられた二棟の小屋が、入浴場だった。右の小

さなほうは、軍医を含めて十九人だけの将校専用。左が五百人以上いる兵・下士官の入浴場だった。

脱いだ衣袴は名札が上に見えるように脱衣籠へ入れて、美雪は浴室へはいった。瞬間、立ちすくんだ。洗い場では二十人ほどが、早さを競い合うように身体を洗っている。浴槽の中では十数人が、ひとかたまりになって湯に浸かっていた――のも、道理。浴槽の奥には三人の男性が陣取っている。

裸だから階級はわからないけれど、とにかく上官だ。いくら女子兵の数が多いからといっても、出て行ってくださいと頼むわけにはいかない。とはいえ、姿を見るなり回れ右では、後難が怖い。

(お風呂なんだから、裸でいるのが当然なのよ！)

美雪は手拭で前を隠しながら、洗い場へ座った。

これからも、混浴は覚悟しておかなければ――美雪は内心で溜め息をついた。女子新兵教育大隊とはいっても、男性も少なくない。将校は入浴場が別だから数に入れずとして

も、班長と分隊長だけでなく、将校付きの従兵もいるし、四十人ほどの支援小隊という独特の制度もあった。

新兵では手に負えない軍務は古参兵が担当しながら新兵を教育していくが、女子に古参兵はいないのだから、当面は男子兵を使うことになる。結果として、男性の兵・下士官は百三十名を超える。つまり、四人にひとり男性ということになる。

その男性の視線は意識の外へ追い出して。掛け湯をしてすぐに身体を洗い、浴槽には浸からず鳥の行水さながらに、美雪は浴室を飛び出した。そして、途方に暮れた。

自分の衣袴が見当たらなかった。置いたはずの場所はもとより、浴室の隅から隅まで探しても、自分の名前を記した軍衣を入れた脱衣籠はなかった。

誰かが取り違えたのではないか。まず、そう疑った。美雪は手拭を腰に巻いた姿で更衣室の隅に身を寄せて、取り違えた相手が戻ってくるのを待った。同時に、残っている脱衣籠を見張った。

十五分経ち三十分が過ぎても、あわてて駆

け込んでくる娘など現われなかった。美雪が風呂から出たときに残っていた脱衣籠はすべて、空になるか他の娘の衣類に替わっていた。「さっきからそこにうずくまっているが、どうかしたのか？」

小太りの男が声をかけてきた。美雪は男の階級章と名札にすばやく目を走らせた。

「誰かが衣袴を取り違えたようで、自分のが見当たりません。このような姿ですので失礼をお許してください、半田伍長殿」

「それはかまわんが……なんとしてでも探し出せよ。万一にも軍衣を紛失したりすると、大変なことになるぞ」

「……はい、必ず探し出します」

どう大変なことになるのかはピンとこなかったけれど、美雪は兄から聞かされた事例を思い出してしまった。渡河訓練中に銃剣を落として、小隊全員で川浚えをした部隊があったとか。急流に足を取られて、銃剣を落とした本人を含めて三人が溺れ死んだという。

入浴場で、まさかそんなことが起きるはずもないけれど……ふと、美雪の脳裡に本田加奈恵の顔が浮かんだ。美雪に恨みの丈をぶつ

けておきながら、佐東征子とは違って暴力は振るわなかった彼女。

(無闇に他人を疑ってはいけない……)

でも、そういえば。彼女も入浴場へ行く支度をしていなかっただろうか？

やがて更衣室にも浴室にも、人影が少なくなってきた。壁掛計は二〇〇〇（午後八時）を過ぎている。まもなく点呼の時刻だ。

もしかしたら、更衣室のどこかに隠しているのかもしれないと、あらためて部屋中を探してみたが、やはり見つからなかった。犯人が誰かはともかくとして、美雪を困らせようとして持ち帰ったのだろう。

点呼に遅れたら、また罰直を食らう。自分ひとりならともかく、連帯責任なんてことになったら、皆に申し訳が立たない。

(わたしに恥を搔かせて、それで気が済むんだったら……そうするわよ！)

美雪は手拭を腰に巻いただけの姿で浴室を出ようとして、また途方に暮れた。営内靴までなくなっていた。素裸の上に素足。不意にこみ上げてくる涙を、美雪は唇を噛んでこらえた。

左手で胸を隠して、右手は後ろに回して手拭で隠せない尻に当てて。物陰に隠れながら、美雪はぐるりと営庭に沿って営舎へ向かった。「あなた、その格好はどうしたの？」

当然だが、玄関口で立哨に見咎められた。事情を説明すると上官が出てきて、敷布を貸してくれた。それで肌を隠して部屋まで戻れたが、あとは分隊内で処置をしろと取り上げられた。

分隊長は点呼前の打ち合わせで不在だったが、二人の班長が部屋で目を光らせていた。美雪は両手で前を隠しながら、おそるおそる所属班長――横田上等兵の前へ行った。

「入浴場で、誰かが間違えて持っていったらしくて、衣袴が見当たりません」

「間違えて……？」

横田班長が首をかしげた。普通に考えれば、名前入りの軍衣を取り違えるとは思えない。

「みんな、聞け」

すでに十九対の視線が、こちらに向けられている。

「柴野三等兵の軍衣が行方不明になった。点呼後の三十分で、手分けして探してやれ」

「はい」

「わかりました」

気乗り薄な返事が、ぱらぱら返ってくる。

すでに敷かれている布団の間をとおって部屋の奥へ行き、美雪は自分の行李を開けた。

「ええーっ!？」

ほとんど悲鳴だった。

「どうした? びっくりするぞ」

「……中身がありません」

行李の中は空っぽだった。替えの下着も筆記具も軍隊手帳も、何もかもなくなっていた。自由時間でも部屋には常に半数くらいは残っている。分隊ぐるみで美雪を虐めにかかっているとしたか考えられなかった。

「おまえたち……」

二班長の清水上等兵が何か言いかけたとき。

「点呼準備ッ！」

廊下から号令が聞こえた。

「この件は後回しだ。各員、整列」

娘たちは廊下に出て一列に並んだ。

「お前は、布団にはいっている」

横田班長の気遣いは無駄だった。林分隊長が点呼前の確認に来て、寝ている美雪に気づ

いた。

「柴野はどうした？」

横田班長に事情を説明されると、整列させろと命じた。

「病気でもないのに、寝かせておくわけにはいかん」

上等兵といえども、下士官の伍長には逆らえない。分隊長の言葉を、命令の形でそのまま美雪に伝えた。

理不尽だとは思ったけれど、盗まれたに決まっているけれど、美雪には上官に逆らう勇氣はなかった。それに、また自分が原因で対向ビンタなんてことになったら、分隊員に申し訳ない。分隊ぐるみの仕業かもしれないと疑ってはいたが、それとこれとは頭の中でひとつになっていなかった。

廊下に整列して、直立不動。小ぶりの乳房が剥き出しになる。

渡辺小隊長が、小隊付下士官の野間軍曹を従えて、悠然と登場。全裸の娘が混じっているのに気づいて、目を丸くした。

「貴様、その格好は何事だ？」

「入浴場で脱衣籠が行方不明になりました」

「なぜか、行李に入れてあった着替えも行方不明です」

下着を着けていない理由を、横田班長が補足する。

「それは……」

口を開きかけて、小隊長は何事かを考えるふうだった。

「たるんでおるから、そういうことになるのだ」

数秒の間をおいてから、きめつけた。

「分隊長、この兵卒に気合を入れてやれ」

「はいッ！」

打てば響くように返事をしたものの、林分隊長はきな臭い表情をしていた。建前としては禁じられている私的制裁を、将校である小隊長みずから命じるというのは、きわめて異例だった。しかも、見て見ぬ振りをするどころか、教壇の横にどっかりと胡坐を搔いて、成り行きを見守っている。

点呼から消灯までの三十分は原則として部屋から出てはいけないのだが、分隊長は一斑の九人に軍衣の搜索を命じた。

「柴野は部屋に残れ。気合を入れてやる」

体罰を加えるという意味だった。美雪の心臓が、きゅっと縮み上がった。しかし、こういう場合に許されている返事はひとつだけだった。

「はい、お願いします」

「そこへ四つん這いになれ」

(え……?)

てっきりビンタだと思っていた。不安を募らせながら、美雪は床に両手と両膝をついた。腰に巻きつけていた手拭が垂れて、尻が丸出しになった。

分隊長はとっくに、軍衣紛失が同年兵同士の虐めだと勘付いている。美雪は被害者だ。しかし小隊長直々に気合を入れろと命じられ、しかも検分されているのでは、なまなかな罰では済ませられない。

分隊長は、入り口の脇にある銃架から竹刀を引き抜いた。二人を遠巻きにしている娘たちが、かすかにどよめいた。

(あれで叩かれるんだ)

不安は激しい恐怖に変わった。

「歯を食いしばれ」

言葉の直後に、竹刀が美雪の尻に叩きつけ

られた。

パッシイン……！

「きゃあっ……」

美雪は反射的に腰を引いて、その反動で横ざまに倒れた。灼けるような痛みが尻に広がった。

「大袈裟な声を出すな。姿勢を直せ」

身体を起こした美雪に、乙女にとっては実行不可能な命令が飛ぶ。

「お上品に脚を閉じているから倒れるんだ。脚を開け」

そんなことをすれば、もっとも恥ずかしい箇所が男の目に晒される。ためらっていると、太腿の間に竹刀を突き入れられた。

「きゃあっ……やめて！」

「貴様、上官に命令するつもりか？」

竹刀が左右にこじられながら、にじり上がってくる。

「ごめんなさい。おっしゃるとおりにしますから……」

やめてくださいとお願いするのも命令だろうか？

恐怖が羞恥をねじ伏せて、美雪の腿を左右

に開かせた。無防備になった股間に竹刀が押しつけられ、前後にゆっくりと動く。秘裂に竹刀が食い込み、ごつごつした竹の節が柔らかな内側をえぐった。

「くうう……んん」

唇を噛んで耐える苦痛の中に、痺れるような感覚が忍び込む。腰の奥がもどかしく疼いた。

分隊長は、そのかすかな反応に気づいたかどうか。ぐいと竹刀を引き抜いて、片手で右斜め上に振りかぶった。

バシン！

竹刀が斜めに走って、美雪の尻をひしゃげさせた。

「ぐううっ……」

激痛をこらえて食いしばった奥歯が、ギリッと軋んだ。白い隆起に真っ赤な線條が浮かび上がる。

分隊長がすばやく竹刀を引き戻して、今度は左袈裟斬りに振り下ろす。

バシン！　バシン！　バシン！

左、右、左と立て続けに美雪の尻を打ち据えた。

「ぐっ……うう……ぐうう……」

押し殺した呻きが、美雪の食いしばった歯の間から漏れた。

十発も打ち据えてから。分隊長は竹刀を野球のバットののように両手で水平かまえた。腰の回転まで利かせて、双丘をぶちのめす。

バッシイン……！

「ぎひい……！」

美雪の背中が反りかえって、そのまま床に崩れ落ちた。

「どうだ。少しは気合がはいったか？」

「はいっ、ありがとうございます！」

気力を振り絞って大声で返事をする美雪。

分隊長はうなずいて、竹刀を銃架へ戻した。寂として静まりかえっていた部屋に、かすかなざわめきが甦った。

床に突っ伏している美雪を助け起こそうとする娘はいない。へたに関わって自分が睨まれてはかなわないとでも思っているのだろう。

五分ほどして、ようやく美雪は身体を起こした。そして、また泣きそうな表情になった。かろうじて秘所を隠していた手拭。それまでが、なくなっていた。あたりを見回して、横

田班長と目が合った。

「あの……手拭をご存知ないですか？」

「俺が預かった」

小隊長の声。まだ部屋に居座っていた。

「軍衣を見失うような兵に、官給品を預けるわけにはいかん。紛失物が出てきたら、報告に来い。返してやる」

ひっく……美雪はしゃくりあげた。見上げる班長の顔が涙でぼやけた。

仲間の同年兵だけでなく、上官からも意地悪をされている。心細いとか悲しいとかではない。美雪は絶望にとらわれた。

やがて。軍衣の捜索に出ていた九人が、ぼつぼつと戻ってきた。

「みつきりませんでしたあ」

あつけらかんと報告して、美雪の絶望をさらに深くさせた。

「貴様ら……」

「出てこぬものは、仕方がない。朝になっても見つからぬようなら、素っ裸で勤務させろ」

気色ばむ分隊長をとりなして、とんでもないことをサラリと言う小隊長。

「官給品を見失った罰だ。今夜はぶっ通しで

立哨しろ」

ひと晩じゅう、裸で廊下に立たされるという  
ことだ。絶望と屈辱で胸がつぶれそうになる  
思いをこらえて、美雪は復唱した。

「はいっ。柴野三等兵、徹夜で立哨いたします  
す」

美雪は立ち上がると、よろめくように部屋  
を出て入り口の横に立った。隣の部屋で立哨  
に就いている娘が、ぽかんと美雪を見ている。

やがて、支援小隊員が吹き鳴らす消灯喇叭。  
各部屋の電灯が一斉に消されて、窓から廊下  
に差し込む月明かりに、白い裸身がぼうっと  
浮かび上がる。

美雪は痙攣するように息を吸っては、溜め  
息を吐き出していた。そうすることで、かろ  
うじて慟哭をおさえていた。竹刀で叩かれた  
尻が熱を帯びて、疼くように痛かった。

(なぜ、わたしだけが……)

こんな目にあわされるのだろう。小隊長も  
柴野石炭商会に恨みがあるのだろうか。

「宮田三等兵、立哨を引き継ぎます」

「二二〇〇、異常なし」

交替の声がひとしきり続く。美雪だけが声

に取り残される。

まさか温情……なのだろうか。突飛な考えが頭に浮かんだ。

官給品一式を紛失したなんて、軍事裁判にかけられたら重罪に問われるだろう。でも、小隊長も分隊長も、そんなことはおくびにも出さない。

犯人が見つかってその子が処罰されても、風当たりがいっそう強くなるだけかもしれない。加奈恵さんや征子さんでも同情してくれるほど厳しくわたしを罰して、それで過去のわだかまりを帳消しにさせようと……

それとも、これくらいの私的制裁は、軍隊ではふつうのことなんだろうか。厳しいビンタで難聴になったり、当たりどころが悪くて死んでしまったとか。そういう噂も、耳にしたことがある。

——美雪の思考には、重大な欠落があった。美雪は若い女性であり、絶対的な支配権を持つ上官は二十代の男性だった。制裁に性的な色合いが混ざらなければ、むしろ不思議といえた。

軍隊生活三日目の朝が明けた。

夜気に身体を冷やされて尿意の限界に達していた美雪は、起床喇叭と同時に厠へ走った。裸を恥ずかしがっている場合ではなかった。

部屋へ戻って。一縷の期待をこめて行李を覗いてみた。しかし、空のままだった。

点呼の時刻が迫っていた。美雪は奇異の目に囲まれて営庭へ出た。ただひとつ紛失をまぬがれていた軍靴を履くと、かえって全裸を意識してしまう。

「貴様、その格好は何事だ」

中隊長の皆川大尉に直々の問責を受けて、美雪は直立不動の姿勢で事情を申告した。

「入営早々、とんだへマをしでかしたものだ。部隊内処分で済むよう大隊長殿に上申してやるが、このままだと二週間の重営倉だぞ」

牢屋に閉じ込められるだけの営倉とは違って、重営倉は身体を横たえる広さもない独房だった。食事も、塩味の雑炊が椀に一杯だけ。と、脅されて。健康への影響を考慮して、重営倉は三日以内という規定がある——ことまでは、教えてもらえなかった。

「分隊全員で発見に努めよ。発見できなけれ

ば連帯責任で、それなりの処罰を受けるもの  
と思え——わかったな」

「はい、わかりました」

十九人があわてて返事をする。

点呼の後の課業を、美雪は免除された。その時間を利用して軍衣を搜索せよと言われても、途方に暮れるばかりだった。

尻の痛みに追い立てられて入浴場へ向かう美雪を追いかけてきた娘がいた。

「一緒に探してあげるよ」

加奈恵が男みtainな仕草で美雪の肩を叩いた。軍衣を隠した張本人に違いない相手からの申し出。美雪は救われた思いになった。

「風に飛ばされて、あそこらに引っかかっているような気がするんだけど？」

加奈恵が、十本ばかりかたまっている桜を指差した。

駆け足の邪魔をしないよう、裸身をすこしでも隠すためにも、美雪は植え込みの外側をまわって桜の樹の下へ行った。七分咲きの花が視界を妨げていた。

「上まで登らないと、見つからないんじゃないかな」

美雪は幹に抱きつくようにして手を伸ばして、いちばん下の枝をつかんだ。肌が樹皮に擦れるのも厭わず、身体を引き上げる。頭を葉の中に突っ込むと、目の前に毛虫がいた。

「きゃあっ……！」

のけぞった美雪は、そのまま地面に落下した。

「きゃはははは」

尻餅をついている美雪を、加奈恵は手を叩いて笑った。

「軍衣だって、毛虫は嫌いだと思うよ。きっと、あっちの松じゃないかな」

営庭の反対側を指差す加奈恵。

からかわれているのだと気づいて、美雪は相手を恨めしげに見上げた。が、正面から凄むように睨まれて、目を伏せた。

たとえからかわれているにしても、加奈恵がほのめかす場所を探さないわけにはいかない。美雪は立ち上がって、また植え込みに裸身を隠しながら営庭を半周した。

こちらの松、あちらの銀杏と引き回されて。軍衣どころか禪一本出てこない。いつの間にか営庭から人影が消えていた。営舎の外を歩

いているのは、角張ったバケツをかかえた炊事当番だけだった。

その姿も営舎に吸い込まれてしばらくしてから。征子が急ぎ足でやって来た。

「本田はメシに行きなさいよ。探すのは、あたしが引き受けるから」

柴野は軍衣が見つかるまでメシ抜きだと分隊長が決めた。そう告げられて、美雪はかえって希望を持った。短期決戦。そんな言葉が頭に浮かんだ。それに……父の妾にされて辛酸をなめてきた征子だが、何年も一緒に暮らしてきた仲だ。もう赦してもらえるのではないか。骨髓の恨みというものを知らない美雪は、そんな甘いことを考えていた。

「誰かが取り違えたに決まってる。叱られるのが怖くなって、床下にでも捨てたんだと思うな」

征子は営舎の裏手へ美雪をいざなった。その床下換気窓は金網が破れていた。

美雪は怖気をふるった。換気窓の奥にはミミズやゲジゲジがうようよしている。そこに素裸で潜り込むなんて、正気の沙汰ではない。重営倉のほうが、ましなくらいだ。でも、軍

衣を取り返さないと無関係の分隊員にまで迷惑をかける。

美雪は意を決して腹這いになり、換気窓に上体を突っ込んだ。

「うわっ……ぷ！」

蜘蛛の巣が顔に張り付いた。それを引き剥がして、奥まで覗き込んだ。薄暗がりでは茶褐色の軍衣は見えにくいはずだと気づいて、慎重に手で探ってみた。さいわいに地面は乾いていたので、ニュルツとした『何か』が手に触れたりしなかった。けれど、布らしい手触りも感じられなかった。

「見つからないの？ 床下に潜れるのは、ここだけのはずなんだけどな」

美雪はさらに奥まで這って行って、あたりを探った。結果は同じだった。

「じきに訓練が始まる。もう諦めなさいよ。夜になったら、また探してあげるから」

つまり——少なくとも今日は裸でいるということだった。黙って征子の言葉に従う美雪の頬に、涙が伝った。

「うっわー、汚れたね」

全身が土にまみれて頭に蜘蛛の巣をかぶっ

た美雪の惨めな姿を見ると、征子は同情を装ってあざ嗤った。

「洗ってあげるよ」

美雪を洗濯場へ引っ張って行った。

「時間がないから、我慢してね」

蛇口をいっぱいひねって、ホースの水を美雪の顔に叩きつけた。

「きゃ……」

美雪は顔をそむけかけたが、思い直して正面を向いた。征子の機嫌を損ねるのが怖かった。激しい水流に頭を突っ込むようにして、全身の泥を洗い流した。

「これで身体を拭きなさいよ」

渡された手拭の端には『柴野美雪』と書かれていた。が、美雪が身体を拭き終わると、征子は当然のように手拭を取り上げた。

(あ……！)

征子が自分の手拭を持っていたことで、美雪は軍衣の隠し場所を知った。木の葉を隠すなら森の中。たぶん、加奈恵か征子、あるいは虐めに加担した何人かの行李の中だ。けれど、他人の行李を勝手に開けるわけにはいかない。班長に訴えても……戦友を疑うのかと

かなんとか、取り合ってもらえない予感があった。

「申し訳ありませんっ。軍衣の搜索に手間取って、遅刻してしまいました」

〇八〇〇の演習開始時刻に五分ほど遅れて部屋へ戻ってきて、征子は悪びれたふうもなく申告した。

「柴野は、どこまでも皆に迷惑をかける奴だな」

分隊長は美雪を睨みつけて、征子には着席するよう手振り以示した。

「たまには、皆の模範になってみろ。その場で軍人勅諭を暗誦せよ」

美雪は、しめたと思った。昨日の座学のあいだに、完璧に暗記している。

「はい」

美雪は背筋をぴんと伸ばした。

「我が国の軍隊は……」

いきなり、つかえた。つぎの言葉が出てこない。

一、軍人は忠節を尽くすを本分とすべし。

一、軍人は礼儀を正しくすべし。

頭の中では本文の活字が躍っているのに、

前文を思い出せない。つぎの言葉さえ思い出せば……あとはすらすら続くような気がするのに。

「どうした？ 一行も覚えておらんのか？」

「あの……申し訳ありませんっ！」

美雪は腰を直角に折って詫びた。途中からは覚えているなんて言っても、言訳無用と叱られるだけだ。覚えているところを暗誦しろとなっても、そこで間違えるのが怖かった。

「女学校まで卒業しておきながら、頭の中は空っぽか」

くすくす笑いが湧き起こった。美雪は上体を折った姿勢のまま、悔しさに耐えていた。昨夜からの騒動さえなければ、すこしでも復習する時間があったら、こんな恥はかかなくてすんだのに。

「貴様は後ろに立っておれ」

分隊長が部屋の隅を指差した。それで遅刻の一件は打ち切り。分隊長は一人ずつ指名して、軍人勅諭を暗誦させていった。

たいていは最初の数行でつかえる。本文までたどり着けたのは、第二分隊の森本花江だけだった。さらに、言葉遣いを間違えたり

抜かしたりしながらでも、五ヶ条のうち三つ目までは暗誦してみせた。抽象的な内容ばかりの前文よりも『軍人は何々すべし』と、それに続く具体的な説明のほうが覚えやすいのだ。

退屈な座学が続くうちに、美雪は猛烈な睡魔に襲われた。徹夜どころか、そのあいだ立ちづくめだった。もし座っていたら居眠りをしていただろう。美雪は、立たされていることに感謝さえした。それに――ほかの娘たちに裸を見られないのもありがたかった。教壇に立っている分隊長には正面を晒しているが、じっと眺められているわけでもない。二人の班長は、所要で席を外している。

正午から昼飯。食事を抜かれている美雪は軍衣を探すふりをして入浴場へこもり、頃合を見計らって部屋へ戻った。

午後からの行軍訓練にも、美雪は裸で参加しなければならなかった。巻絆も巻かずに軍靴を履いて、戦闘帽をかぶって。十キログラム余の背囊を肌を剥き出しの肩で背負って木銃を担いで。乳房も尻も淡い淫毛も女性器も、何もかもさらけ出した珍妙な姿。

四百八十人の同年兵と、訓練を指導している百名ちかい上官（男性）。その中で、美雪ひとりだけが全裸だった。ただひとり晒し者にされているという屈辱に、美雪の身体は小刻みに震えていた。顔を上げていても、何も見えていなかった。

今日も行軍は分隊単位だった。慣れるにしたがって小隊単位、中隊単位へと進み、背囊も実戦の重量に近づいていく。

「第一中隊第二小隊第一分隊。まいえー、進めッ！」

ざんっ……二十人の左足が一斉に踏み出される。美雪も羞恥を殺して機械的に歩調を合わせた。

ざん、ざん、ざん……二十四に分かれた二列縦隊が輪になって宮庭を行軍する。

「第三小隊第二分隊。縦隊半ば左へー、進めッ！」

ときおり、分列行進の号令がかかる。歩調を合わせながら号令を聞き逃すまいと、娘たちは神経をぴりぴりさせている。美雪の惨めな姿を見て嘲笑したり同情したりする余裕はなかった。木陰から訓練を監視している小隊

長たちは、全裸で行軍している美雪に遠慮のない視線を向けるが、同僚の手前、真面目くさった顔つきは崩さない。意志の力だろうか、軍袴の前を突っ張らかす不謹慎な将校は皆無だった。

訓練が始まって三十分ほど経ったときだった。背囊の背負い帯が肩に擦れる痛みに、美雪は悩まされていた。無意識のうちに内股になっているせいだろうか、足を踏み出すたびに大淫唇が擦れ合って、股間に微妙な刺激が生まれる。行軍しながら背負い帯の位置をずらしているとき――踏み出そうとした足を横から払われた。

「きゃっ……」

つんのめって、どぎあっと前へ倒れた。

「うわっ……と！」

後ろを歩いていた娘が、美雪の背中を蹴りながら跨ぎ越えた。

「分隊、止まれッ！　そこ、何をやっておる」

横田班長が号令と叱責を続けざまに発した。

美雪は木銃を杖にして立ち上がった。とっさに突いた左腕が擦り剥けて、ひりひり痛んだ。

「申し訳ありません。つまずきました」

美雪の横を歩いていたのは、加奈恵でもなく征子でもなく、野田友子だった。いったい、何人から目の敵にされているのか見当もつかない。足を掛けられたなんてほんとうのことを言って、分隊全員を敵にまわす勇氣は、美雪にはなかった。

「いつもいつも足を引っ張ってくれる奴だな。分隊長、こいつに気合を入れてやれ」

小隊長も飛んで来て、美雪を震え上がらせる。

「待ってください、小隊長殿」

意外なことに、加奈恵が美雪をかぼうそぶりを見せた。

「わちきは、花も恥らう乙女でありんすえ。素っ裸で外を歩かされて、そりゃ気もそぞろになりんす」

わざと廓言葉を使う加奈恵を、小隊長は咎めなかった。うろんそうに、言葉のつづきを待つ。

「せめてオマ●コくらいは隠してあげたいと思いますが、許可していただけますでしょうか？」

女性器を示す俗称を、加奈恵はさらりと口にした。

「う、うむ……しかし、官給品の貸し借りは許可できんぞ」

「はい、不用品を利用いたします」

「ふうむ……よかろう。手早く済ませろ」

加奈恵が親切心から申し出ているのではないことくらい、青年将校でも推察できただろう。しかし、申し出を却下する理由もなかった。海千山千の娼婦あがりは何を企んでいるのか、興味もあったのだろう。

「小隊長殿のお許しが出たわよ。あなただって、いつまでも素っ裸を晒していただくはないわよね？」

軍衣を隠した張本人かもしれない相手の善意を装った言葉に、美雪は疑念を抱かないでもなかった。けれど、このまま裸でいることを思えば、どんな格好でも今よりはましだった。

「……お願いします」

美雪は藁にもすがりつく思いで頭を下げた。

加奈恵が背囊をおろして縄束を取り出した。荷駄の梱包に使う荒縄だった。小学校の建物

にブラック建築を継ぎ足して、一個大隊六百人以上が寝泊りする設備を大わらわで運び込んだのだ。木箱や荒縄は、まだ処分されずに営庭の片隅に打ち捨てられている。まさしく不用品だった。

それをわざわざ背囊に詰め込んでいたのだから、加奈恵が野田友子をけしかけたのかもしれない。

美雪にも背囊をおろさせてから、加奈恵は荒縄を二本に重ねて美雪の腰に巻いた。

「あの……？」

「禪を締めてあげてるんだよ。黙って任せときな」

加奈恵は腰の縄をきつく絞ってから前で結んだ。垂れた縄尻が性器に当たる部分を指でつまんで、そこに大きな結び瘤を作った。

「すこし脚を開いて」

加奈恵の意図は察しながら、それでも素直に美雪は脚を広げた。たしかに、結び瘤で股間は隠れる。

加奈恵は美雪の背後から抱きつくようにして、左手で美雪の花卉をくつろげながら縄を股間にくぐらせた。

「うわあ……」

「へええ？」

「やだあ……」

いつの間にか三人のまわりに集まっていた分隊員たちが嬌声をあげた。

美雪は、いきなりのことに言葉もない。まさか、股間に埋め込まれるとは思っていなかった。縄尻が後ろに引き上げられると、結び瘤が花芯に食い込んだ。

「あ……痛い」

美雪はようやく、加奈恵の悪だくみに気づいた。加奈恵の手から逃れようとして身をよじったが、いつの間にか正面に立ちはだかっていた征子に肩を押さえられた。

「じっとしてなさいよ。恥ずかしい所を隠してもらってるんでしょ」

その間にも縦縄が引き絞られて、後ろで腰縄に結ばれる。

「やめて……ちっとも隠れてない。痛いだけです」

「じきに気持ちよくなりんす。経験者のあちきが保証しんす」

縛り好きの変態役人に縄の味を教えられ、

ついでに縛り方も体得したのだろう。加奈恵は縄を折り返してふたたび股間をくぐらせた。今度は左右に分けて、花卉を外側から挟み込んでいる。

「いやあ……」

敏感な部分を内外から締め付けられて、苦痛の中に甘い悪寒が生じた。

「さあ、できあがったよ。オマ●コは隠れたでしょ」

オマ●コというのが女性器の割れ目を指すのなら、たしかに見えなくなっていた。そのかわり、縄の間から大淫唇がくびり出されて丸見えになっている。

「素っ裸よりは、ずっとましだぞ。柴野、二人に礼を言っておけよ」

意外な展開に驚きながらも、小隊長が威厳を取り繕う。

「あ……ありがとう」

自分への虐めはまだまだ続くのだと絶望しながら、美雪は心とは反対の言葉を口にした。

美雪たちを取り巻いていた人垣がサッと散って、二列縦隊を形作った。入営三日目ともなると、新兵たちもこのあたりの要領はつか

んでいた。

自分の位置へ戻ろうとして歩きかけ、美雪はびくんと腰を引いた。小淫唇を割って食い込んでいる結び瘤のささくれが、粘膜を刺激したのだ。ぴりっと焼けつくような痛みだった。

「あう……」

美雪は歩幅を小さくして、摺り足で列に就いた。これでは、七十五センチの歩幅で一分間百四十歩なんて、とても無理だと思った。でも、歩かなければならない。

「第二小隊第一分隊。まいえー、進めッ！」

ざん。美雪は息を止めて、最初の一步を踏み出した。ぐりんと結び瘤が股間をえぐる。焼けつくような痛みは、なんとか我慢できた。

ざん、ぐりん。ざん、ぐりん。自分で自分を虐めながら、美雪は歯を食いしばって歩き続ける。そのうちに……快感というにはあまりに荒々しい感覚が、股間にわだかまる。

「くう……」

刺激を少しでも軽くしようと、美雪は左手で腰縄の結び目を下へ引っ張った。それがいけなかった。縄で圧迫されていた淫核が、に

ゆるんと動いた。

「ああっ……」

苦痛の中に炸裂した純粹な快感。美雪の足が止まり、そこへ後続がぶつかった。

「うわわ……」

「きゃあ……」

美雪と後続の二列が折り重なって倒れた。

「分隊、止まれッ！」

分隊長がすっ飛んでくる。すぐには雷を落さず、木陰に立っている小隊長を振り返った。小隊長は営舎に視線を向けた。視線の先には執務室（元は教員室）から行軍訓練の様子を眺めている第一中隊長・皆川大尉の姿があった。大尉はじっと見つめ返していたが、おもむろに小隊長を指差した。『おまえがやれ』という意味だ。

小隊長はうなずいて、分隊のところへ駆けて行った。

「柴野を隊列からはずせ。俺が直々に鍛えてやる」

すでに立ち上がっていた五人のうち、軍衣を着用している四人は隊列へ復帰した。

「第二小隊第一分隊。まいえー、進めッ！」

ざん、ざん、ざん。縦隊は裸の娘を置き去りにして行軍を再開した。

「貴様は、こっちへ来い」

美雪は宮庭の真ん中へ連れ出された。

「気お一付けッ」

反射的に、美雪は銃を担いだ直立不動の姿勢をとった。

「足を高く上げて歩かぬから、つまづくのだ」

見当外れな指摘だったが、兵卒に抗弁する権利はない。

「柴野三等兵。まいえー、進めッ」

わけが分からないまま、美雪は命令に従った。

ざん、ぐりん。ざん、ぐりん。焼けつくような股間の痛みも、腰の奥ですこしずつ膨れていく奇妙なわだかまりも、意識の外に追いやろうと努めた。

「回れ右まいえー、進めッ」

左足を踏み出してから、両足のかかとを軸にして体の向きを変え、後ろになった左足を踏み出す。

「足を引きずっている。もっと高く上げろ」

美雪は膝を蹴り上げて、うっと呻いた。ぐ

りりっと、奥深くまで結び瘤が食い込んできた。

「まだ低い。もっと高く」

ざんっ、ぐりりっ……痛みは、それほど増さない。股間から腰の奥まで、はっきり快感とわかる感覚が突き抜けた。

「あっ、あっ、あっ……」

足を踏み出すごとに、美雪の唇から切ない吐息が漏れ始めた。

ざんっ、ぐりりん。ざんっ、ぐりりん。股間の痛みは、いつの間にか気にならなくなっていた。俗説では、性的な快感が女は男の百倍にも達するという。その快感に直撃されて、美雪はなにも考えられなくなっていた。

水平ちかくまで上げていた腿を、美雪は命令もされないのにいっそう高く跳ね上げて歩を踏み出した。

「ああっ……あん！」

吐息が甘い悲鳴に変わったのを、美雪は自覚していない。膝を高く蹴り上げて、八十センチを越える歩幅で歩いた。一步ごとに暴力的な快感が股間をえぐり、脳天に突き抜けた。

「回れ右まいえー、進めッ」

くるっと身体を回すと同時に、結び瘤がそれまでとは違う部分を刺激した。

「うああっ……」

美雪は快感を追いかけて、無心に行軍を続けた。全身が、汗でてらてら光っている。美雪は貪欲に快感を求めて、一步ごとに腰を前後に揺すった。

「ふらついておる。姿勢を正せ」

小隊長は指揮杖がわりの軍刀を抜いて、側面で美雪の尻を叩いた。

ビシッ……！

普通なら激しい痛みとして感じるはずの刺激が、美雪の中に蓄積されていた快感を解き放った。

「きゃああああっ……！」

美雪は腰を突き出して硬直して。ふらっと倒れかけた。ところを、後ろから小隊長に抱きとめられた。

「しっかり立て！」

役得とばかりに乳房をつかんで美雪の身体を引き起こし、ついでに握りつぶすように強く揉んだ。

逝った余韻でぼうっとしている美雪だった

が、その乱暴な愛撫でだんだん正気づいてきた。

「まだ一時間と経っておらんのだぞ。しゃきっとしろ」

「はいッ」

反射的に答えて、美雪は直立不動の姿勢に戻った。

「柴野三等兵。左向けまいえー、進めッ」

左足の踵と右足の爪先を軸にして左へ向き、後ろになった右足を踏み出す。

ざん、ぐりん……美雪の腰がびくっと震えた。絶頂後の無反応期にはいつている今は、結び瘤が与える刺激はただ苦痛なだけだった。

それなのに。痛みをこらえて十分ほども行軍していると、じわじわと奇妙な感覚が甦ってきて、それが快感に変化し始める。ふたたび、美雪は何も考えられなくなってきた。最初の五十分が過ぎ、全員が小休止をとっている——美雪の淫靡な行軍を見物していることにも気づかなかった。

股縄の刺激を、ただ不快としか感じない女も少なくはない。まして、荒縄のささくれに刺激されながらも感じてしまうのだから、美

雪には『素質』があるのだとしか考えようがない。そしてまた――屋外で何百人もに全裸を見られながら、生まれて初めて知った快感に没頭してしまうというのも、そういう『素質』があるのだろうか。それとも、性に関する知識も体験も乏しい処女ゆえの無防備さなのだろうか。

美雪はさらに三十分ほども行軍を続け、今度は尻を叩かれなくても絶頂に達した。分隊長が抱きとめて乳房を強く揉んでも、頬を叩いても、美雪は意識を取り戻さなかった。美雪は兵舎へ運び込まれて、部屋の隅にうっちゃられた。

徹夜明けの寝不足に加えての疲労と心労。失神した美雪は、そのまま深い眠りに墜ちていった。

――美雪の目を覚ましたのは、部屋のざわめきよりも食事の匂いだった。二列の長机に群がった分隊員たちは、黙々と夕飯を平らげている。軍隊の荒っぽい生活に順応したのか、女だてらに胡坐で座っている者もいた。

「あら、お目覚めのようね」

身体を起こした美雪に気づいて、とっくに

食事を終えていた阿倍房江が声をかけた。

「柴野のメシは、あたいが食べてあげたよ。どうせ、お口に合わないでしょうからね」

くすくす笑いが起こった。それは同時に、美雪に向けられた敵意でもあった。

「それとね。あんた、眼鏡を作ったほうがいいんじゃない？」

「え……？」

「行李が空っぽだって騒いでたけど、よく考えたら、行李の中をあんた以外は見てなかったのね。念のために開けてみたら、ちゃんと全部あるじゃない」

(そんな馬鹿な……)

と思ったのは、一瞬のこと。あちこちに隠してあった美雪の衣袴を返してくれたということなのだろう。美雪は立ち上がって——股間の違和感が消失していることに気づいた。繩禪は、美雪が寝ている間に取り去られていた。

行李の蓋を開けてみると、はたして、何かから何まできちんと積み重ねられていた。

ほうっと、美雪はへたり込んだ。

「柴野、皆に謝らんか」

横田班長に言われて、美雪は困惑した。一方的に意地悪をされたのに謝らなければならない不合理的に、ではない。どんな謝り方をすれば、自分に向けられている憎しみをやわらげられるか。とっさにそれを考えた。

自分には落ち度がない。しいて言えば、軍隊の食事が不味いという思いが態度に出てしまうことだが、それは牽強付会というものだ。美雪の父によって悲惨な境遇に墮とされた恨みが、自分に向けられている。自分の態度をどうあらためても、父への恨みは晴れないにきまっている。

「ごめんなさい！」

加奈恵と征子に糾弾されたときと同様、美雪には土下座しかできなかった。

「わたしの勘違いで皆さんに迷惑をかけて、ほんとうにごめんなさい」

美雪がそうするだろうことくらい予測はしていたのだろうが、それでもバツの悪い空気が流れる。

「顔を上げなんし。今日のところは、これで勘弁してあげんす」

ぞっとした思いを隠して、美雪は身体を起

こした。昨日も加奈恵はそんなことを言って、その直後に軍衣の紛失が起きた。これからも、まだまだ虐められるのだろうか。

美雪は行李から黒猫禪を取り出してから、分隊員たちを振り返った。

「あの……服装を整えていいですか？」

勝手に着替えたら難癖をつけられるかもしれない。

「裸を見せびらかすのが趣味なら、そのままでもいいわよ」

征子がそう言うと、小さな笑いの渦が生まれた。

「やだ……柴野って露出趣味？」

「じゃなきゃ、素っ裸で行軍なんかできないわよね」

「自分だったら、首くくってる」

美雪は嘲笑に背を向けて、黒猫禪に足をとおした。今日いちにち何も食べていなかったが、これからのことを思うと不安で胸がつぶれそうで、空腹を感じている余裕などなかった。

### 3章 従兵見習（三穴の処女蹂躪）

精神の動揺と股間への異常な刺激が引き金となったのか、美雪は予定よりも早く生理を迎えた。もともと生理は軽いほうだった。生理休を申し出て、分隊員から怠けていると思われたくはなかった。当て布を股間に押し込んで黒の丁字帯を締めて、美雪は朝の点呼を受けた。

点呼後の体操と駆け足は免除してもらって、美雪は診療所へ行った。昨夜から今朝にかけて生理の始まった娘が、十人ほど集まっていた。激しく身体を動かせば当て布がずれて、軍袴を血で汚すおそれがある。その予防処置を教わるためだった。

「机にならべてある蒲の穂を取りなさい」

年配の看護婦が娘たちに指示した。ふだんから診療所に詰めている軍属だ。女性に特有の生理現象に関しては、軍医の出る幕はない。

美雪は蒲の穂を手にとった。こげ茶色の綿毛を固めて棒にしたようなものが、滅菌紗でくるまれている。ウイナーソーセージそっ

くりだと美雪は思ったが、そんな高級な食材を知っている娘がほかにいたかどうか。

「これを膣に挿入しなさい。蒲の穂には吸血作用があります」

じゅうぶんに軟らかいから、処女膜を傷つける恐れもない。現代でいう生理用タンポンである。

娘たちは軍医と衛生兵の目の前で（さすがに背を向けて）軍袴を下ろした。丁字帯の脇から蒲の穂を差し込んで、体内に挿れようと、あれこれ試み始めた。美雪も足を開いて腰を突き出して――しかし処女の硬い膣口は、ふにゃふにゃした蒲の穂を受け付けない。

ひとりの娘が丁字帯を外してしゃがむと、するりと蒲の穂を股間に埋没させた。それを見ていた三人が、同じようにして挿入した。この四人は、男性経験があるらしい。

「挿入が難しい人は、蒲の穂を握って根元からしごいて細くしなさい」

直径一センチほどに絞っても、綿毛が折れたりしなかった。美雪は先の四人にならってしゃがみ込んだ。細く硬くなった穂の先端を秘裂に差し込んで前後に探ると、挿入すべ

き場所は手ごたえでわかった。

「うん……！」

痛みを予感しながら指先に力を入れると、簡単に根元まで押し込めた。引き攣るような違和感があったけれど、痛くはなかった。

それでもうまく挿入できない娘には、看護婦が手を添えて指導した。

「ひとりあたり十本を支給します。経血の多寡にもよりますが、朝晩には交換しなさい」

近日中に酒保が開かれるので、つぎからはそこで購入するようにと軍医が付け足した。精算には後日の給与が充てられる。

——午前中の座学で、美雪は軍人勅諭を完璧に暗誦してみせて、分隊長から褒められた。午後の行軍訓練は股間にわずかな違和感があったが、昨日の凄絶な荒縄禪にくらべれば、取るに足りないものだった。

美雪に盛られた食事の量は半分くらいしかなかったが、それには文句を言わずに。未体験の者へのお手本という名目で、分隊員の面前で蒲の穂を交換しなければならなかったけれど。それ以上の虐めは受けずに、美雪は一日を終えた。

生理を迎えて四日目。美雪は従兵見習を命じられた。

実戦部隊で、女子兵が従兵に指名される可能性は高い。前もって従兵の心構えを教えておくと同時に、生理中の激しい訓練を減免させる配慮でもあった。すでに出血もほとんど治まっている美雪が今さらながらに従兵見習を命じられるのは不自然だったが、誰もそこまでは気をまわさなかった。

美雪が命じられたのは、第一中隊長付だった。朝の点呼と食事をすませてから、兵舎からはなれて建てられた棟割長屋のひとつ、第一中隊長の官舎に出頭した。

「柴野三等兵。従兵見習に参りました」

直立不動で申告する美雪に対して、皆川大尉は椅子にすわったまま軽くうなずいて答礼に代えた。粘りつくような視線で、頭のとっぺんから爪先まで眺める。胸と腰のあたりで視線が数秒ずつ止まっていたように、美雪は感じた。

「国家危急存亡の秋、俺との縁談を蹴ってまで入営して……さぞ本望だろうな？」

厭味たっぷりと言われて。

「はいッ。御国の期待に応えるべく、頑張っております」

美雪は、やけくそ気味で返事をした。

「そのようだな。素っ裸で行軍など、男でも出来るものではないからな」

皆川大尉は逆さ下駄のような顔に薄嗤いを浮かべた。

「しかし、感極まって気絶するようでは、まだまだ心構えがなっとらん。この五日間で、俺が大和魂を貴様の身体にたっぷり注ぎ込んでやる」

「はいッ。お願いします」

部屋の隅に控えていた従兵の中川一等兵が、ぴくりと眉を動かした。この男は前の任地から大尉の従兵を務めていて、上官の気質を熟知しているし、性癖の一端も垣間見ている。大尉の言葉にひそむ意味を察知したのだろう。

「トメ、この兵隊に従兵の仕事を教えてやれ。俺は勤務に出る」

大尉は立ち上がると、姿勢を崩さずにいる美雪を無視して部屋を出て行った。

「いつまでもしゃっちょこぼってないで、そ

この盆を持ってついて来いよ」

中川留吉一等兵が、小卓の上の盆を顎で指し示した。大尉の朝飯だった。何が出ていたのかわからないくらい、きれいに平らげてあった。

「従兵なんて、コマネズミが世話女房になったようなもんだ」

食事の上げ下げ、着替えや入浴の手伝い、部屋の掃除。そのうえで自分の始末もつけて、一般兵卒と同じ課業をこなさなければならない。若干の遅刻や早退は大目に見てもらえるし、上官のお供で外出することもある。要領よく立ち回れば余禄もあるし、上官が目をかけてくれれば出世も早い。しかし、それは古兵になってからの実戦部隊での話。朝から晩まで訓練でしごかれている新兵には、迷惑なだけの従兵勤務だった。

教室を改造した将校専用の炊事所に食器を返却するついでに面通しをしてもらって。大尉の居室へ戻ると、中川一等兵は五分ほどで部屋を片付けた。鉛筆一本にいたるまで所定の場所に戻されていないと従兵を叱る将校もいるが、皆川大尉は些事にこだわらないほう

だった。むしろ、抽斗を勝手に開けて文具を整理したりすると、雷が落ちるとか。

演習開始五分前に兵舎へ飛んで帰って、美雪は座学の端につらなった。一一四五には中川一等兵が迎えに来てくれて、炊事所へ大尉の食事を取りに行った。

給食の兵・下士官とはちがって、将校は自分の給料で食事を購う。大尉ともなると、家族を養うだけでなく別邸に妾を蓄えられるくらいの額をもらっている。ぺえぺえの少尉より貧しい食事にするわけにもいかない。鯨の塩漬燻製肉と炒り卵、玉菜とモヤシの油炒め。ご飯は混ぜ物なしの銀シャリ。美雪が家で食べていた食事よりずっと豪華だった。

一二一五から兵舎へ戻って自分の昼飯。従兵勤務で遅れる者の食事をくすねたりはしないという意味か、たっぷり一人前半はあった。そのありがた迷惑な分量を大急ぎで詰め込んで、今度は大尉の食事を下げに行く。

午後からの行軍訓練は皆川大尉の命令で早退して、一六二〇に官舎へ出頭した。中川一等兵は、まだ来ていなかった。

「入浴場へ行くぞ。そこの風呂敷と洗い桶を

持って、ついて来い」

美雪の顔を見るなり、皆川大尉は言いつけて先に立った。

(こんな時刻からお風呂にはいるんだ)

将校の勝手気儘にあきれて、従兵の役目である入浴の準備がすでに調べていたことに、美雪は不自然さを感じている暇がなかった。

入浴場の入口で美雪が洗い桶と洗面器を差し出すと、大尉は怪訝そうな顔をこしらえた。「任務を解いた覚えはないぞ？」

衣袴の着脱を手伝うのも従兵の仕事だった。美雪はいっしょに更衣室へはいり、大尉が脱ぎ捨てた軍衣をきちんとたたんで脱衣籠へ収めた。

「なにをぐずぐずしている。着衣のまま浴室へはいるつもりか？」

言われて、美雪はぎよっとなった。新兵が古兵や下士官の背中を流すという話は、聞いたことがある。従兵なら、上官の世話をそこまで焼くのが当然かもしれない。けれど、自分は若い娘で、相手は倍も年上の男性だ。恥ずかしいという思いよりも、他人の目が気になった。

大尉も同じことを考えて、だから勤務時間中に入浴するのだろうか。それなら、中川一等兵にお供させればいいのに。

「先にはいってるぞ。言っておくが、禪もちゃんと脱いで来い」

大尉は洗い桶と手拭を持って、浴室へ消えた。

いつまでも迷ってはいられない。ここは軍隊だ。地方（民間）とは違うぞ——ことあるごとに、分隊長や班長が口にしてしている言葉だった。美雪は自分を叱咤して、軍衣を脱いだ。丁字帯をほどいて。ちょっと考えてから、股間から垂れている滅菌紗の端を引っ張って蒲の穂も取り出した。湯を吸って膨れるとどうなるか、試してみる勇氣はない。

滅菌紗には黒ずんだ血がすこし付いているだけだった。それを、わずかに下り物が沁みているだけのボロ布にくるんで脱衣籠のいちばん下に押し込んだ。

「失礼します」

美雪は両手で胸と腰を隠して、浴槽へ近寄った。掛け湯をしようと、入浴場に備え付けの洗い桶に手を伸ばしかけたとき。

「気お一付けッ！」

さして広くない浴室に胴間声がとどろいた。条件反射で直立不動の姿勢をとる美雪。

「整列、休めっ」

美雪は足を三十センチほど開いて、両手を腰の後ろで組んだ。熱い湯に浸かったかのように、全身が桜色に染まった。

美雪の立っている正面のずっと低いところ——浴槽の中に、皆川大尉の顔があった。

「なるほど、たしかに毛は薄いな」

美雪の股間を見上げて、将校の威厳などかけられない好色そうな薄嗤いを浮かべている。

「花びらが薄いわりに豆が発育しているというのも、ほんとうだな」

自分の性器を品評されながら、美雪は股間を隠したい衝動を抑えつけていた。軍隊の中では、上官の命令は絶対だった。新兵にとって、大尉は神様以上の存在だった。屈辱に耐えて姿勢を保っているうちに、大尉があらかじめ美雪の性器について詳しく知っていたらしい口ぶりが気になってきた。加奈恵が告げ口をしたのだろうか。荒縄で股間を縛ったとき、経験豊富な娼妓ならそれくらいは気づく

だろう。

「姿勢を崩してよし」

大尉が浴槽から上がって、洗い場に腰を落した。しゃがみ込んで背中を丸めている美雪をほったらかして頭を洗い、髭を剃ってから。

「身体を洗ってくれ」

それが当然という口調。

「あ……はい」

美雪は戸惑いながら、洗い桶に湯を汲んで大尉の背後にまわった。

「背中はあとだ。前へ来い」

つきからつきへと投げつけられる理不尽な命令に、美雪は打ちのめされた。これが軍隊という世界なのだと観念して。大きく股を広げている男の前に、命じられるままにひざまずいた。

(きゃあ……)

こんなに間近で見るのは初めての、男性にしかない器官。それが水平ちかくまで持ち上がって、ぴくぴくと脈動していた。青年期を脱して男盛りにさしかかった男が、処女の裸身を前にしてその状態で踏みとどまるのに、どれほど意志の力が要求されるかなど、美雪

はちらとも思いおよばない。

ただ。自分でも最初に洗うのは排泄器官なのだから——やはり、ここも洗わなければならぬのだろうか。上目づかいに大尉の顔をうかがった。

「手拭は使うな。貴様だって、自分の股ぐらは手で洗うだろう」

「はい……失礼します」

美雪は洗い桶の湯を男の股間にすこしずつ掛けながら、震える指で肉棒を握ってそっとしごいた。垢を落とすのなら当然の仕種だが、それがまったく別の意味を持つことに気づけなかった。

たちまち肉棒は鉄のように硬くなって天を衝く。その反応の意味は、美雪にも理解できたが——勃起を隠そうともせず腰に手を当てて堂々としている上官を前にして、抗議どころか恥らう風情も見せられなかった。

「金玉も洗え」

恥じらいをかなぐり捨てて、股間に垂れ下がった陰囊を唯々諾々と握って。

「痛うっ……握りつぶす気か！」

「ごめんなさい！」

あわてて手を引きながら。そうか、話に聞いていた男の弱点とはこういうことなのかと、わずかに溜飲を下げる美雪だった。

股間を手で洗わされたあとは手拭に石鹼を塗りたいくって、首から下をすべて力いっぱいこすった。

「しかし、なんだな……うちの第二小隊が大隊随一の成績をあげておるのは、貴様のおかげかも知れんな」

妻になっていたかもしれない生娘にかしずかれて鼻の下を伸ばした大尉は、問わず語りに心情を吐露した。それとも、美雪を自家薬籠中の物にする深謀遠慮だったか。

「貴様を虐めるという一点で、分隊が団結している。そのくせ、貴様の巻き添えを食らってはたまらんと、軍務には精励恪勤だ。敵性用語だが、スケープゴートというやつかな」  
(そうだったんだ……)

分隊長たちが自分への虐めを見て見ぬふりをしている理由が、やっとわかった。父への恨みが自分に向けられるのは、父の庇護で世間並み以上の暮らしをしてきたのだから、自業自得と我慢することもできる。けれど、分

隊をまとめるために自分を利用するなんて、  
それでは上官としての任務を果たしていない  
のではないか。美雪は初めて、怒りを覚えた。

「これからも憎まれ役を務めてもらうぞ」

つまり、自分を虐めている黒幕は目の前に  
いる男だった。

「わたしが……」

美雪の声は震えていた。

「お見合いを蹴ったことを、恨んでいるので  
すか？」

「まさか」

大尉は美雪を押しつけて立ち上がった。掛  
け湯で石鹸を洗い流して浴槽に浸かる。

「柴野三等兵、前へ」

浴槽の縁に立たせて、屈辱的な号令をかけ  
る。

「整列、休めッ」

美雪はふたたび全身を桜色に染めながら、  
無防備な正面を大尉に向けて足を開いた。

「こんな命令に、嫁さんは従ってくれんから  
なあ」

なにひとつ遮る物のない股間の奥底まで覗  
き込んでうそぶく大尉。

美雪は奥歯を噛み締めて、惨めな思いに耐えなければならなかった。腰の後ろで組んだ手をほどいて、前を隠したかった。足を閉じたかった。できるものなら、この場から逃げ出したかった。それなのに、美雪はぴくりとも動けない。上官の命令に逆らったらどんな罰を受けるか、それが怖かった。

気が遠くなるほど長い時間が経過して。ガラッと扉の開く音がした。ざばっと大尉が立ち上がる。

「出るぞ。身体を拭け」

湯で緊張のほぐれた逸物を垂らして、美雪の前に仁王立ち。その裸身を拭き終わらないうちに、三人がどやどやっと浴室へ雪崩れこんできた。素っ裸の美雪に一瞬瞠目して、それから何事もなかったかのように裸の二人が大尉に目礼する。後ろに控えていた越中禪姿の若い男は、上体を三十度に折る無帽の敬礼。

「え……？」

驚きの声を発したのは、後からはいつてきた従兵見習中の女子兵だった。美雪とは違って、袖なしの丸首襦袢と黒の丁字帯を身に着けていた。

従兵は浴槽に浸からないのだから、下着を身に着けていても不自然ではない。四人の反応を見ると、美雪が全裸でいることのほうが普通ではないらしかった。

戸惑っている四人を尻目に大尉が出て行くのをさいわい、美雪は両手で前を隠しながら浴室を飛び出した。

大尉の着替えを手伝って。居室に戻ったところで、待っていた中川一等兵に任務を引き継いでもらった。

「点呼が終わったら戻ってこい。特別教育を施してやる」

「はいッ、よろしく願いいたします」

さすがに美雪も、大尉が良からぬことを考えているのではないかと疑った。しかし、まさかという思いのほうが強かった。誰もいない浴室でも『整列休め』よりひどいことは命令されなかったのだから――男の征服欲について無知な美雪は、どこまでも楽天的だった。

夕飯の時刻には間に合って。皆の食べる早さに合わせて食事を終えて。洗濯と繕い物を済ませて。二〇三〇の点呼が終わってから。

班長に従兵勤務に就くことを申告して、美雪は兵舎を出た。

バラック棟に向かう足取りは、さすがに重い。それでも、兵舎に隣接した将校官舎まで五分とかからない。

大尉の居室に中川一等兵の姿はなかった。美雪は不安を募らせながらも、裸で入浴場に二人きりよりはましだと、自分を安心させる。しかし、気休めは三十秒と続かない。

「衣袴をすべて取れ」

まだ敬礼から直ってもいない美雪に、いきなりの命令。入浴場で裸になるのは当然かもしれないが、この場で服を脱ぐ謂われはない。

「それでは軍務に支障が出ます」

とっさの抗弁は大尉の怒声を招いただけだった。

「そんなことは、俺が判断する。抗命罪で軍刑務所にぶち込まれたいのか」

「……………」

さすがに美雪も――服を脱いで、それだけで済むとは思わない。辱めを受けるくらいなら、監獄に入れられたほうがましかもしれない。けれど、前科者の烙印は生涯消えない。

美雪はのろのろと手を上げて、軍服の釦をはずしにかかった。

早くしろとは、大尉は言わない。壁際の椅子に腰掛けて片足を組み、美雪が肌をあらわにしていく様を鑑賞している。

軍衣をたたんで床に置き、横に営内靴をならべて。軍袴、軍足、襦袢も軍衣の上に重ねて。最後一枚。美雪は指をわずかに震わせながら丁字帯の紐をほどいた。

「寝台に寝て股を開け」

耳にただけで顔が赤くなる、むきつけの言葉。

「いやです。なぜ、そんなことをしなくちゃならないんですか！」

一週間のうちに叩き込まれた服従の習慣に逆らって、美雪ははっきりと拒絶した。

「俺の大和魂を貴様の身体に注ぎ込んでやると言ったはずだぞ。貴様も、承知したではないか」

「こんな意味だとは思いませんでした」

「こんな意味だったのだ」

大尉が立ち上がって、美雪を寝台へ追いやろうとした。

「近寄らないで！ 変なことをしたら……自害します！」

美雪は剥き出しにした上下の歯に舌を挟んで、顎に力をいれた。

「舌を噛み切ったくらいでは、人は死なん」

大尉は動きを止めたが、慌てた様子はなかった。

「舌を噛み切ると、残った部分が丸まって喉をふさぐ。窒息と失血とで死ぬわけだが……貴様が気を失ってから顎をこじ開ければ窒息は防げる。しかも、軍医がすっ飛んで来る」

決死の覚悟を嘲われて、美雪は逆上した。身を翻して寝台に駆け上がり、枕元の軍刀をひつつかんだ。それで自害するつもりか、大尉に斬りかかるつもりか、自分にもわからなかった。しかし、軍刀を抜けなかった。

「くっ……」

右手に握った柄を渾身の力で引っ張っても、びくともしない。

「こうするのだ」

大尉が美雪の手から軍刀をもぎ取って、すらりと抜き放った。軍刀は不用意に抜けないよう、鯉口のところに留め金が設けてある。

美雪は、それを知らなかったのだ。

「俺に処女を捧げるのが、そんなに厭なのか？」

虚脱している美雪に、大尉がやさしげな口調で問いかけた。

「誰にだって、厭です。お嫁に行けなくなります」

「馬鹿者！！」

不意打ちの大音声。美雪はすくみあがった。「新兵教育を終えたら戦地へ行くのだぞ。この危急存亡の秋、貴様は生きて還るつもりか。死を鴻毛の軽きに比すべき軍人が、そのような心構えで務まるとでも思っておるのか」

いくつもの思いが、美雪の胸を掠めた。入営したときから予感があったが、やはり第一線で戦うのだと、運命が決した思い。戦争に行くことと死とが別の事柄のように思っていたのに、今やひとつになったという（それでも、まだ漠然とした）恐怖。それ以上に。美雪の発言を逆手にとって責めかかる皆川大尉のやり口に腹が立った。

「貴様の根性を叩き直してやる。寝台から下りろ」

寝転がれと言われるよりは従いやすい命令だった。

「整列、休めッ」

いつものような反射的な動作ではなく、屈辱を意志で克服しながら、美雪は命じられた姿勢を取った。

「俺とても、厭がる女を権柄づくで犯すほど外道ではない。貴様が根性を見せるなら赦してやる」

ホッとしながらも、美雪は男の言葉を疑っていた。

「わかったな？」

しかし、美雪に選択の自由はない。

「わかりました……ありがとうございます」

新兵の卑屈さが感謝の言葉を付け加えさせる。

「うむ」

大尉は軍袴を引き上げながら、腰の帯革(ベルト)を抜いた。体形に合わせて仕立てられた軍袴は、帯革がなくてもずり下がったりはしなかった。

「こいつで三十発ほど気合を入れてやる。根性があるなら、最後まで立っている」

細身で柔軟な帯革は、竹刀に比べればずいぶん華奢に見えた。

「……はい」

大尉は美雪の正面に立ったまま、帯革を握った右腕を後ろへ引いた。

(え……?)

尻を叩かれるのだと思い込んでいた美雪が訝しんでいるうちに。

ヒュンッ……パッシン!

帯革の全長の半分ほどが、乳房を水平に薙いだ。

「きゃあああっ……！」

切り裂かれるような鋭い痛みに、美雪は胸を両手でかばってうずくまった。

「たった一発で音をあげるのか？ 立っているのが無理なら、寝台へ行け」

「だ、だいじょうぶです。立ちます」

三十発なんて、とても耐えられないと思った。けれど、純潔を守るためには耐えなければならぬ。美雪は立ち上がって、叩いてくださいといわんばかりに胸を晒した『整列休め』の姿勢に戻った。ゆっくりと後ろへ引かれていく大尉の右腕を、美雪はおびえながら

凝視していた。

ヒュンッ……美雪は反射的に目を閉じた。

パッシン！ 暗黒の中に真っ赤な稲妻が奔る。

叩きつけられた帯革が乳房をひしゃげさせ、乳首を強くこすって通り過ぎる。小ぶりの乳房がぷるると弾んだ。

「ぎ……」

激痛をこらえて、奥歯がギリッと軋んだ。美雪がふたたび目を開けたとき、すでに大尉はつぎの鞭を放つ寸前だった。

ヒュンッ……先の二発より低く飛んだ帯革の先端が、急激に跳ね上がったのを美雪は見えていない。

「ぎゃはあああああっ！！」

少女の喉から迸ったとは思えない野獣の咆哮にも似た叫びが、部屋を満たした。美雪は股間をおさえて膝から崩れ落ち、身体をふたつに追って悶えた。

ドン、ドン。隣室との仕切壁が強く叩かれた。

「大尉殿、もうすこし静かにお願いできますか」

「おお……すまん、すまん」

大声で返事をしてから。大尉は軍袴に手を突っ込んで、穿いていた禪を引き出した。美雪のお下げをつかんで頭を起こさせ、丸めた禪を口元に押しつけた。

「口を開けろ」

入浴後に替えたばかりだが、すでに布は男の体臭を発していた。美雪は口を固くとざし、髪の毛が引っ張られる痛みにさからって顔をそむけた。

大尉は片膝をついて左手で禪を美雪の口に押しつけたまま、右手を美雪の髪からはなして、二条の赤い筋が刻まれた乳房をつかんだ。口を開けると、二度は言わず。無言で膨らみに指を食い込ませて。そのまま左右にひねる。

「んん、ん……」

美雪の鼻から苦悶の呻きが漏れる。両手で大尉の手首をつかんで引き剥がそうとしても、五本の指に穿たれた乳房が前に引っ張られて、苦痛が増すだけだった。

大尉の右腕に抱きかかえられる形で背中も膝で押されて、美雪は身動きがとれない。

「ん……んんっ！」

左の乳房の基底部に、さらに指が食い込んでくる。もぎ取られるような痛みを負けて、ついに美雪は口を開けた。

ぐぼっと布が口中に突っ込まれた。大尉の指が舌を押さえながら、喉の奥まで布を押し込んでいく。三尺の晒しを詰められて膨らんだ頬を、禪の細紐がくびった。あまりの屈辱に、美雪は涙をこぼした。

美雪はお下げを引っ張られて、無理やりに立ち上がらされた。

「整列、休め」

美雪に鞭を受ける姿勢をとらせて、しかし大尉は、すぐには帯革を握らなかった。

「三発のあいだに二回も倒れたな。あと二十七発、倒れないでいられるのか？」

それまでとは違って、優しささえ感じさせる声だった。美雪は、うっかりと首を横に振ってしまった。

「では、倒れないですむようにしてやろう」

大尉は机の抽斗を開けて、縄束を取り出した。全体に薄汚れていて、どす黒く変色している部分もあった。その縄が、これまでに何人もの女の涙と汗と愛液を吸ってきたなどと

は、美雪には想像の埒外だった。しかし、自分が縛られようとしているくらいは見当がつく。

天井のないバラック小屋。大尉は剥き出しの梁に縄を巻きつけた。

「これで、貴様を吊るしてやる。そうすれば、いやでも立っていられるぞ」

梁から吊るされて裸身を滅多打ちにされている図が、美雪の脳裡にぱあっと広がった。おもわず、ぶるっと震えていた。

「吊るしてほしければ、両手を真上にあげて手首を重ねろ」

ぎゅうっと心臓をつぶされる思いだった。吊るされるか、このまま立っているか、自分で選べと言われているのだ。整列休めの姿勢で、また股間を鞭打たれたら……絶対に立ってられない。けれど、手を縛られたら……大尉がその気になれば、簡単に犯されてしまう。

(でも、このままだって……)

たいした抵抗はできない。助けを呼ぶにも声を封じられている。

それに。大尉は美雪を縛る気にいる。拒絶

したら、いっそうひどく虐められるだけだと、美雪は判断した。葛藤と戦いながら、おずおずと両手を高く上げて重ねた。

「吊るしてほしいのだな？」

大尉は美雪がうなずくまで待ってから、縄尻を手にした。

重ねた手首に縄が巻きつけられ、さらに上へ引かれた。縄が手首を擦って、美雪を呻かせた。踵が浮く寸前で止められて、さらに手首を縄が十文字に巻いた。

「では、あらためて根性を叩きなおしてやるぞ。後ろを向け」

美雪は、唯々諾々と命令に従った。お尻を打たれるのなら、我慢できると思った。

「脚は開いている。ふらつくなよ」

言葉が終わると同時に、風音とともに帯革が尻に炸裂した。

バッシイイン！

「むぶっ……」

くぐもった悲鳴が、猿轡から押し出される。それまでの三発とは、肉を打つ音が違っていた。力いっぱい叩きつけられた細い革は、竹刀とはまるで違う鋭い痛みを美雪に与えた。

バッシイイン！　バッシイイン！

打たれるたびに、美雪は腰を突き出し脛脛を痙攣させて痛みにのたうった。のけぞった顔に涙が散った。けっして耐えられないほどの激痛ではなかった。しかし、縛られて吊るされている惨めさが、美雪の心を弱くしていた。

「むぶう……んんっ！」

他人に声を聞かれる心配がないために、奇妙な言い方かもしれないが安心して悲鳴を猿轡の中に吐き出していた。

鞭打ちが再開されて五発目だったろうか。うなだれていた美雪の視界の隅を黒い影が奔った。つぎの瞬間、黒い影が跳ね上がって美雪の秘裂をえぐった。

「ぶばあっ……！」

片足を蹴り上げるようにして股間をかばう美雪。膝が砕けて踵が宙に浮き、一糸まとわぬ裸身が半回転した。ぐきっと肩の鳴る音を、美雪は苦悶の中で聞いた。

「ふう、ふう、ふう……」

荒い息を吐きながら、体勢を立て直す美雪。右手で縄をつかんで、両脚をぴったり閉じた。

「足を開け」

美雪は弱々しくかぶりを振った。この命令にだけは、どうしても従えない。

大尉は命令を繰り返さなかった。ぴったり閉じ合わされた太腿の間に帯革の先をねじ入れると、両端を握ってぐいと引き上げた。

帯革の縁が秘裂を割って食い込む。大尉は帯革を前後にしごきながら、さらに引き上げる。爪先立ちになる美雪を、帯革はどこまでも追いかけていく。秘裂に埋没した帯革が、ずしゅっずしゅっと粘膜を掻き筆る。

「むう……うう……」

股間をまっふたつに切り裂かれるような鋭い痛み、美雪は呻いた。摩擦のせいか、焼けるように熱い。

猿轡を噛まされたときと同じだった。美雪はおのれの意志に反して、大尉が望む姿勢をとらざるを得なかった。

「素直に命令に服しておれば、余分な痛みはなかったものをな」

大尉は美雪の背後から左手で乳房を（愛撫と責めの境目くらいの強さで）揉みながら、右手を股間に挿し入れた。

「んん……」

肉壺を指で穿たれて、美雪はかすかに苦痛の呻きを漏らした。すこし奥のあたりに引き攣れるような鈍痛が生じた。

「ふむ。これが処女膜らしいな」

唇を引っ張られているような痛みだった。

びくん。美雪の腰がかすかに跳ねた。大尉の親指が肉芽を撫であげたのだ。

「ん……むうう」

二度目に漏らした呻きは、鼻にかかっていた。

「なるほど。感度は鋭敏だな」

(え……?)

同じ言い回しを、どこかで聞いた記憶があった。しかし、親指の腹で肉芽を転がされて、何も考えられなくなった。

「んんん……んっ！」

女に苦痛と恥辱を与えるだけでなく、快楽を与える手管にも大尉は長けているらしかった。ひとしきり淫核を弄ぶと、鞭打たれ傷ついた秘裂に蜜がにじんだ。

「すこしは気合がはいってきたな」

じゅぶっと音を立てて指を引き抜くと、そ

れを美雪の腹でぬぐってから帯革を握った。

「今度は正面攻撃だぞ」

美雪の前に立ちはだかって、大尉が帯革をかまえる。美雪は右手に縄をつかんだまま両脚を踏ん張って、帯革の動きから目がはなせない。

ぶんっと唸って襲いかかる帯革。無意識に身体が逃げていたのだろう。先端の十センチほどが乳房を掠めた。

ビシイッ……！

「ぶむうっ……う、うう……」

乳房全体に叩きつけられるべき衝撃が帯革の先端に集中して、皮膚が破れた。たちまち血がにじんで、乳房から腹へ伝い落ち始めた。傷口には刺すような激痛がいつまでも残った。

つぎに大尉が帯革を振りかぶったとき、美雪は全身の筋肉を緊張させて、ぎゅっと目をつむった。

ぶんっ……バッシイイン！

「ぶばあっ……」

乳房を根元から切り飛ばされたような痛み、美雪はたたらを踏んでいた。その動きが止まったところへ。

ヒュン……パシイン！

秘裂を斬り上げられる。

「むぐうっ……」

太腿を擦り合わせて悶える美雪。嗜虐癖のない男の目にも、それは凄艶な舞踏に見えたことだろう。

急所ばかりを鞭打つのはかわいそうと思ったのか、まだ傷ついていない柔肌を求めてか。大尉は美雪の腹に斜め十文字の模様を刻んだ。

「ぶべ……」

痛みよりも吐き気が美雪を苦しめた。

「後ろを向け」

ホッとした思いで向きを変えると、背中と腰を続けざまに打たれた。肉の薄い部分への鞭は、骨の髄まで痛みが伝わった。さらに、背後からの股間打ち。跳ね上がった先端が淫核を直撃して、美雪を悶絶直前に追い込む。

（もう……厭だ！）

哀願すら封じられて、美雪は全身を虚しくくねらせながら。ふっと美雪は、恐ろしい考えにとりつかれた。

三十発とは言われているが、大尉はきちんと数えてくれているのだろうか。もう一時間

以上も鞭打たれているような気がしていた。  
まさか、夜が明けるまで続くのではないだろ  
うか。

もちろん、それは現実にはあり得ない妄想  
だった。

「……三十」

大尉が声に出して数えて。最後の一撃が尻  
に叩きつけられた。

「気を失わずに、最後まで耐えきったな。さ  
すがは……」

ふっと言いよどんで。大尉は、梁に巻き掛  
けている縄を緩めた。

「約束どおり、貴様の処女は残しておいてや  
る」

手首の縄をほどかれると、美雪は床にへた  
り込んだ。

安堵なのだろうか。屈辱に震えながら恥ず  
かしい命令に従い、生まれて初めての凄まじ  
い体罰にさらされながら、たとえ涙をこぼし  
ても気丈に嗚咽をこらえていた美雪だったが。  
唾液でぐしょ濡れになった布が口から引き出  
されると。

「わああああっ……」

床に突っ伏して大声で泣いた。

泣きじゃくる美雪の前に、軍袴を脱いだ皆川大尉が傲然と立ちはだかった。すでに逸物は軍衣の裾を割って天を衝いていた。

「処女は残しておいてやるが、こいつの始末はつけてもらうぞ」

(え……?)

上げた顔をあわててそむける美雪。

大尉はまたしてもお下げをつかんで美雪の上体を引き起こして、怒張をぴたぴたと頬に打ちつけた。

「口を開けろ」

猿轡を噛まされたときと同じ命令。これ以上の痛い思いはしたくないので、美雪は大尉の意図を詮索することもなく口を半開きにした。

そこへ突きつけられる逸物。

(あ……!?)

そんな行為が存在するなど夢にも思ったことのない美雪だが、現実が目の前にあった。あわてて閉じた唇に、熱い鉄のような亀頭が押しつけられた。

「下の口で男を咥えたくないのだろう？ だ

ったら、上の口で啜えろ」

美雪は髪をつかまれたまま硬直していた。いやいやをすれば、男の排泄器官が唇をこする。汗が饅えたような男の臭いが目に沁みて、息もできない。

「どうしても厭なら、あと三十発ほど根性を見せてもらおうか？」

そうすれば、上の口も諦めてやろうと大尉が猫撫で声で持ちかける。それで、美雪は屈服した。帯革での鞭打ちがこんなに痛いとわかっていたら、言われるままに寝台に仰臥していたかもしれない。あと三十発なんて、とても無理だ。それに……もっと厳しく急所ばかりを打たれるだろうくらいは想像がつく。

美雪は目を閉じて、息を止めたままわずかに紅唇を開いた。

そこをこじ開けるように、肉棒が突っ込まれた。

「歯を立てるな。噛んだりしたら、上官への傷害罪で銃殺ものだぞ」

「むぶぶ……うぶう！」

喉の奥を突かれて、美雪は吐き気を催した。止めていた息を吸って、濃厚な男の体臭にむ

せた。

「こういうときはな。男の欲望を一刻も早く吐き出させるように努めるのだ。そうすれば、貴様も楽になる」

自分で頭を前後に動かして刺激しると、男の生理に無知な生娘に教え込む。

「雁首、わかるな？ 鰓の張った部分の裏側だ。そこを舌で舐めろ。それから鈴口、魔羅の先っぽの小便の出る孔だ。そこを、舌の先でくすぐるようにしてみろ。そんなに大口を開けるんじゃない。唇で魔羅を包んで……歯を立てるな！」

ひざまずいている美雪の股間を足の甲で軽く蹴り上げたり、足の親指で秘裂をくじりながら、娼婦も恥ずかしがるような性技を生娘に仕込んでいく大尉。羞恥と屈辱に全身を火照らせながら、言われるままに破廉恥な要求に応じる無知な美雪。

（こんなことをさせられるくらいなら……）

あと三十発叩かれていたほうがよかったと、美雪は（喉に加えられる刺激で）涙を流しながら後悔していた。しかし、美雪の選択は間違っていなかった。たとえ追加の三十発に耐

えたところで——下の口も上の口も駄目なら、後ろの穴を使ってやると宣告される場所だったのだ。

精を放つとはどういうことかを知らない生娘が、初体験の口淫で男を満足させられるはずがない。じきに大尉は焦れてきて——両手で美雪の頭をつかんだ。

「そのまま続けている」

荒腰を使いながら、美雪の頭を前後に揺すり始めた。

「うぶ……むむむ……」

喉の奥まで突き挿れられる剛直に吐き気を覚えながら、それでも美雪は教えられたとおりに舌を蠢かす。

「出すぞ。吐き出すなよ！」

口中の肉棒がぐんと膨れあがって小さく痙攣すると同時に、青臭い滾りが喉の奥に叩きつけられた。

「うええ……！」

とっさに吐き出そうとしても、頭を押さえつけられていて——呑み込まなければ息ができなかった。

「もうすこしでお仕舞いだ。中に残っている

精を吸い出せ」

涎を垂らしながら咳き込んでいる美雪に、いまだ萎えきっていない肉棒が突きつけられる。思考能力を失った美雪は、それをふたたび口に咥えて頬をすぼめながら、ずぞぞーっと啜った。たちまち口の中に広がる、いがらっぽい粘っこい味覚。

(これを……これを呑み込んでさえしまえば)

屈辱の夜は終わる。牝としての本能が、美雪に教えていた。ごくんと。本来ならひとりの赤子として育てていたかもしれない子種をわずかな罪悪感とともに呑み下して。美雪は、すがりつくような目で男を見上げた。

「よく頑張ったな、柴野三等兵。これで今夜の従兵勤務を解く」

蹠踉として立ち上がって。美雪は床に散らばっている衣袴を拾い集めた。が、それを身に着けるより早く。

「そろそろ、よろしいかな？」

軍医が救急箱を抱えて部屋へはいつてきた。

「うむ。手当てを頼む」

衣袴を抱えて立ちすくんでいる美雪の前で、軍医が救急箱を開けた。

「傷を放置すると、化膿するおそれがある。  
応急処置だけは施しておく」

「整列、休め」

大尉の号令に気圧されて、美雪は衣袴を床に放り出して姿勢をただした。

軍医が濃い黄褐色の液体のはいった壘を開けて滅菌紗に振りかけ、それを鑷子（ピンセット）でつまんだ。

「ちょっと沁みるぞ」

乳房の傷をぬぐう。

「ひぐっ……！」

鞭打たれたときよりも激しい、焼けるような痛み。万能の殺菌薬として重宝されているヨードチンキ。ヨウ素をエタノールで希釈した薬品だった。アルコールを傷口に擦り込まれるのだから、言語を絶する痛さだった。しかし、傷口を放置すれば化膿する危険が大きい。これも加虐のひとつだとは気づかず、むしろ美雪は大尉の配慮に感謝しながら痛みを耐えた。

軍医は鞭跡に満遍なくヨードチンキを塗りたくり、最後に股間を襲った。

「あ……ひいいっ……」

粘膜への塗布が禁じられている薬品だと知らない美雪は、たかが傷口の消毒に悲鳴をあげる自分を恥じながら、治療に仮託された責めを必死に耐えた。それどころか。

「ありがとうございましたッ」

美雪の全身を黄色く染めて退出する軍医に、本心からの感謝を述べた。

軍衣を汚すなと厳命されて、美雪は襦袢と丁字帯だけを身に着けた半裸で兵舎へ戻った。立哨の分隊員には、怪我をして消毒中なので衣服を着用できないのだと、事実ではないが嘘でもない言い訳をした。

部屋の隅には分隊員の手で美雪の布団が敷かれていた。敷布を汚すと叱られるかもしれないと、美雪は悩んで。着ていた襦袢を脱いで敷布の上に広げた。寝巻は着ずに、あまり傷ついていない体側を下にして横たわった。

その様子を、そっと観察していた者がいた。経験豊富な加奈恵は、その歩き方を見ただけで、美雪がまだ生娘のままであることを察した。と同時に、その身体に刻まれた加虐の跡を月明かりに透かし見て、およその事情を察したようだった。

「ふうん？」

小さくつぶやいて、わざとらしく寝返りを打った。

美雪は、それに気づくどころではなかった。夕刻から夜半にかけてのわずかな時間に、これほどの激烈な体験をしたなんて、信じられない思いだった。けれど――鞭跡の疼き、男性の指で淫核を舐められた火照りの残照、まだ口中に残っている精液のいがらっぽい味。すべては、現実にした事柄なのだった。

これが軍隊生活というものだとは、けっして思わない。お見合いで恥をかかせた報復なのだと、口惜し涙をこぼしながら――しかし、泣き寝入りをするしかなかった。相手は、分隊長の上官の小隊長の、そのまた上官だった。皆川大尉がその気になれば、重営倉や軍刑務所どころか、三等兵のひとりやふたり、銃殺にだってできるだろう。

傷跡に塗られたヨードチンキの刺激は治まってきたが、股間は熱を帯びて、絶え間ない痛みを全身に送りつけてくる。美雪は胎児のように丸まった姿勢で痛みを耐えながら、それでもいつしか眠りに落ちていった。

起床喇叭で飛び起きて。美雪は下着姿で診療所へ行った。ヨードチンキをアルコールで拭き取ってもらってから、その場で衣袴を身に着けた。

「貴様は月経が終わったはずだな。平常の袴下を着用せい」

美雪としては、丁字帯よりも露出度の高い黒猫褌を皆川大尉に見られるのは気が進まなかった。

(でも……同じことかしら)

どうせ全裸にされるのだから。今日も辱められるのだと、美雪は諦めていた。

兵舎へ戻った美雪に、好奇の目が向けられる。しかし、どうしたのかと訊ねる者はいなかった。竹刀で尻を叩かれるよりずっと酷い罰直を受けたことは、誰の目にも明らかだった。しかし建前としては、私的制裁はあってならないことだった。中隊長が末端の兵卒に直接手を下したなど、口にするのもはばかられるのだった。

午前中の従兵勤務は免除されて、夕飯後の一九〇〇（午後七時）から、入浴のお供。浴

室には四人の将校と、袴下を着用した三人の従兵。全裸の女子従兵は美雪だけだった。四人の将校は、みな大尉よりも若い。見覚えている少尉の顔もあった。

美雪は蚯蚓腫れの背中と尻を男たちに晒して、大尉の身体を洗った。先客たちは上官に遠慮して平静を装ってはいるが、ちらちらと美雪の裸身に視線を走らせている。

身体を洗い終わると大尉は浴槽に浸かって、一日分の無精ひげを撫でながら、とんでもないことを言い出した。

「上官の髭を剃るのも従兵の役目だ。しかし……」

腕前の不確かな者にさせるわけにはいかない。まずは自分で剃ってみせろと、大尉は言う。

「髭は生えておらんから……そうだな、腋毛を剃り落としてみろ」

(……！？)

この時代、腋毛を剃る習慣はなかった。誰もが生やしているものが自分にだけ無いというのは、ひどく恥ずかしいことだと美雪は思う。しかし、三十発の鞭打ちで刻まれた痣や

傷が、美雪の身体を無残に飾っていた。激痛の記憶も生々しい。

美雪は男たちの視線に全身を刺されながら洗い場に座って、剃刀を手に持った。

「背中を向けられては様子がわからん。こっちを向け」

美雪は腿を固く閉じ合わせて、浴槽に向き直った。

「先に石鹸を付けておくのだ」

手拭を泡立てて、腋の下に塗った。

「最初は刃を立てて、毛が生えている向きに剃刀を動かせ」

「あらかた剃り終わったらいったん湯で流せ」

「刃先を寝かせて肌に押しつけながら、逆方向へ剃れ。刃を横に動かすと怪我をするぞ」

大尉の指図どおりに剃刀を操って。十分もしないうちに、両腋とも剥き出しになった。生まれて初めての剃毛。あちこちに小さな切り傷を作って、洗い流す湯が肌に沁みた。

いつしか静まり返っていた浴室に水音が立って、二人の将校が湯から上がった。

「片手では難しいようだな。髭を剃るときは両手を使うのだから……」

浴槽の中で、大尉が考え込んだ。それが演技らしいと、美雪も気づき始めている。美雪を辱める手順は、あらかじめ決めてあるのだろう。そうでなければ昨夜だって——あんなに都合よく縄が準備されているはずがない。「そうだ、下の毛を剃ってみろ。両手が使える」

身体を拭いていた二人が、しまったという顔で大尉を振り返った。しかし、またぞろ浴槽へ戻るのは、魂胆が見え見えになってしまう。未練たっぷりに美雪の裸身を盗み見ながら、浴室を出て行った。

見物客は減ったが、だからといって美雪の恥ずかしさは変わらない。

(気の済むまで、わたしを虐めればいいですよ)

そんなふうに関き直るしかなかった。従兵見習は、せいぜい三日か四日。それさえ辛抱すれば……また、同年兵から虐められる日々が待っている。けれど、鞭跡や剃毛のように、誰の目にも明らかな虐待が続けば、もしかすると同情してもらえはしないだろうか。そんな卑屈な打算が、ちらっと頭に浮かんだ。

ますます突き刺さってくる視線を感じながら、わずかに脚を開いて手拭の石鹸を下腹部になすり付けた。

「椅子に座っているのは、股の奥まで剃りにくかろう。こっちに向いてしゃがめ」

どうせ『整列休め』で、奥の奥まで覗かれてしまった身だ。そうは思っても、恥ずかしさは薄れない。すこしでも羞恥の中心を男たちの目に晒すまいとして、美雪は膝を床につけてしゃがんだ。

右手で剃刀を握って、左手で隠すようにしながら、上から下へ滑らす。それだけで、薄い淫毛のほとんどが消え去った。

「深剃りをするときには、左手の指で肌を張って、そこに刃を当てろ」

言われたようにすると毛が立ち上がって、ザリッザリッと根元の奥まで刈り取られていく。指をはなすと、剃り跡がわからないほど滑らかな地肌になっていた。

剃っている途中から、入浴者が増えてきた。先に上がった者が、面白い見世物が始まっていると吹聴したのかもしれない。股間を剃っているあいだに将校が五人と従兵が三人。従

兵のひとりには女子だった。入営の日に顔を合わせた記憶があった。相手のほうは——というより、女子新兵の全員が、縄禪だけで行軍訓練をさせられた美雪の顔を知悉している。

美雪は、ぽかんと口を開けている娘から顔をそむけて。恥ずかしい作業に集中しようとした。一分でも早く、この場から逃げ出したかった。

しかし。剃り終えましたと報告する美雪に、大尉は『整列休め』の号令をかけた。

「足の開きが小さい。もっとだ……もっと開け」

一メートルほども開脚させられて、剃り残しを調べられた。大淫唇が盛り上がっている際から肛門のまわりまで、産毛一本残さず剃り落とすよう厳しく命じられて、やり直し。美雪は嗚咽を呑み込んで、洗い場へ戻った。

美雪を辱めるのはもちろんだが、この男は無毛の女体に執着しているのではないか。美雪にさえそう思わせるような徹底ぶりだった。

三度目の点検でやっと大尉を満足させるまで、たっぷり三十分はかかった。

更衣室では、さらに恥の上塗りをしなければ

ばならなかった。大尉の着替えを手伝う前に、せめて股間だけでも隠そうとしたのがいけなかった。脱いだときには大急ぎで脱衣籠の奥へ隠したから気づかなかったのだが――白い禪の中央に、薄赤い縦染みが浮かんでいた。経血ではない。昨夜の鞭打ちで傷ついた部分からの出血だった。

血のにじんだ下着を他人（しかも男性）に見られるなんて、生殖器そのものを見られる以上に恥ずかしい。しかし、上官より先に従兵が衣袴を調えるわけにはいかない。しかも大尉は、床のゴミを捨てて来いとか余分の脱衣籠を持って来いとか、無意味な用事を言いつけては、脱衣室にいる男たちに美雪が正面を晒すように仕向けた。

下級将校たちにたっぷり目の保養をさせてから官舎へ引き揚げて、大尉はそのまま美雪に従兵勤務を続けさせた。といっても、軍服への火熨斗掛けや寝具の準備などという本来の仕事は、中川一等兵が済ませて――大尉が戻ってくるまでに姿を消そうとして、すこし慌てたのだろうか。机の端に夕食の小皿が一枚だけ残っている。

「用事があるまで、そこで待機しておれ」

美雪を部屋の隅に立たせて、あとは知らん顔。書類の束を机に積んで、ぱっぱっと読み飛ばして——いるわけでもなかった。ときおり、書類の隅に何事か書き付けたり、自分の帳面に書き写したり。

(そうか、軍人でも書類仕事はあるんだ)

美雪は、今さらながらに気づいた。中隊長としては指揮下にある四個小隊の訓練の進捗状況を把握しておかなければならないし、それを大隊長に報告する仕事もあるはずだ。

消灯間際まで熱心に仕事をしているところを見てしまうと、個人的な嫌悪と怨嗟はともかく、軍人としては立派な人物なのかもしれないと、大尉を見直した美雪だった。

しかしそんな感慨は、大尉がいちばん下の抽斗を開けたとたんに消し飛んだ。昨夜美雪を縛った縄を取り出すと、濡れ手拭で磨くように拭いて、開け放した窓際に干した。さらに。医療器具のような物や、明らかに男根を模した器具やら南京錠のついた鎖やらを机にならべて、美術品を鑑賞するような趣きで煙草をくゆらせ始める。

(この男と結婚しなくてよかった……)

美雪は、つくづくと思った。こんな妖しげな器具で毎晩虐められるなんて、考えただけで身の毛がよだった。それとも、『嫁さんにこんな真似はできない』とか言っていたのだから。家庭にはこういう変態趣味は持ち込まず、加奈恵のような娼婦を相手にするのだろうか。けれど、それはそれで――夫に騙され続ける生涯を送ることになる。

そんなことを考えているうちに、消灯喇叭が鳴った。

「さて……」

机の上にわざとらしく小道具を出しっ放しにして、大尉が美雪に向き直った。

「実戦部隊に配属されれば、まわりは男ばかりだぞ。厭がる女を力づくでどうこうしようとする不心得者がいないとは限らん」

犬の群に肉を投げ込んで『食べるな』と言うのは無理というものだ。襲われたとき、貴様はどうするつもりだと尋ねる大尉。

「……………」

美雪には答えようがなかった。口をふさがれば、助けをもとめることもできない。そ

れは昨夜の体験で身に染みている。上官に申告して強姦犯を処罰してもらったところで、文字通りに後の祭りだ。

「相手が一人なら、口で埒を明けてやればおとなしくなる」

二人でも、順番待ちをさせればよかろう。しかし四人五人となると、待ってはくれんぞ。口淫をしている背後から襲われる。前門の虎、後門の狼というやつだ。絶体絶命の危難をかわす方法を伝授してやろうか？

「……………」

美雪の沈黙に迷いの色が差した。純潔を守るためなら、たいていのことは耐え忍ぶ覚悟がある。けれど大尉が昨夜以上の破廉恥な行為を目論んでいることくらい、美雪にも察しがついた。とはいえ……拒絶したところで、手ひどく気合を入れられて、そのうえで『危難をかわす方法を伝授』されるに決まっていた。そんな方法があるのなら教えてほしいという気持ちも、すこしはあった。

「……お願いいたします」

さんざんに迷って、被害が少ないと思われるほうの返事を選んだ。

「では、軍袴を脱いで四つん這いになれ」

裸になれと言われなかったのもホッとして、美雪は命令に従った。男の目の前に裸の尻を突き出すだけでもじゅうぶんに卑猥で恥ずかしい行為だと頭ではわかっていたが、動作をためらわせるほどではなかった。

美雪の目の前で、大尉は抽斗から小さな箱を取り出した。

(それって……?)

便秘だけでなく子供の発熱にも効くと信じられているイチヂク浣腸は、家庭の常備薬だった。

肌色の丸っこいセルロイド容器を手に、大尉が美雪の背後に片膝をついた。

「大尉殿、自分は便秘などしていません」

「浣腸が厭なら入浴場へ連れて行って、水を一升ほども注入してやるぞ」

美雪の返事を待たずに黒猫禪の紐を引っ張って肛門を露出させ、そこへ嘴管を突き刺す。

「あっ……くう」

腹の中に薬液が押し込まれる、かすかな違和感。それは一回では終わらなかった。四個のイチヂク浣腸が、続けざまに美雪の肛門を

犯した。

そんなに大量の浣腸を施されたのは、もちろんこれが初めてだった。

注入が終わると、黒猫禪を晒したままで直立不動。たちまち激しい便意に襲われた。四個も使われたせいなのか、医療目的の行為ではなさそうだという背徳感のせいなのか、便意は急迫して我慢できそうになかった。

「大尉殿。廁へ行かせてください」

大尉はそ知らぬ顔で、机の上の小道具をひとつずつついでいねいに抽斗へ片付けている。

美雪は重ねて訴える愚は冒さなかった。それよりも。縄とか張形とかを使われるのではなさそうだと知って、すこしだけ不安が小さくなった。

机の上に最後まで残ったのは、直系が一センチ半ほどの細長い棒。大尉はそれに滅菌紗を何重にも巻きつけている。純潔は守ると約束してくれたのだから、それを美雪に使うはずはない。

(では、何に……?)

肛門を引き締めて両脚の筋肉を突っ張りながら、美雪の中でふたたび不安が大きく膨れ

あがっていく。

五分もすると便意が遠のいたが、その先が厳しくなるのを美雪は体験から知っていた。母親に浣腸をされたときは、このあたりで便所の前まで行っておいて、つぎに便意が迫ったときは大急ぎで駆け込んだものだった。

（厠まで五十メートルほど。間に合うだろうか……ううん、間に合わさなくちゃ）

はたして。おなか全体が圧迫されるような大波が襲ってきた。

「大尉殿お……」

決壊の恐怖に直面して、泣き声になっていた。

大尉は腕時計を眺めて、おもむろにうなずいた。

「中座を許可する。たっぷりひり出してこい」

軍袴を穿くのももどかしく、美雪は官舎を飛び出した。走れば、それだけで粗相をしそうだった。五十メートル先に見える厠まで営庭を突っ切りたいところだが、立哨に誰何されたらとんでもないことになる。建物の裏手へまわって、すり足で急いだ。

間一髪。禪をはずすいとまも惜しんで紐を

ずらし腰を落すと同時に。こらえにこらえていた欲求をぶしゃあああっと放出した。

「はああ……」

開放感に、しばし恍惚。それから。

「あっ……！」

大失態に気づいた。落とし紙は酒保で買い置きしておいて、自前の物を持参する。それを忘れていた。覚えていたとしても。兵舎へ取りに戻る余裕はなかつただろうけれど。

（どうしよう……？）

あたりを見回しても、置き忘れられた紙などなかった。手で始末して、洗い場へまわって……などと考えめぐねているとき。不意に扉が開け放たれた。

「きゃ……はいつてます」

厠の扉に門は付いていないが、下から三十センチほどが素通しだから、間違っただけで開けることはないはずだ。

そこに立っている人物が皆川大尉だと知って、美雪はさらにうろたえた。

「紙を忘れたのだろう。そそっかしいやつだな。これを使え」

落とし紙の束を差し出されて、美雪は自分を

窮地に追いやった男に本気で感謝した。

「ありがとうございます」

「うんと力んで全部ひり出しておけ」

乙女の排泄姿を鑑賞する趣味まではないのか、大尉はあっさりと厠から出て行った。

美雪は——大尉の言葉に従ったわけではないが、下腹部に力をこめて浣腸液の最後の一滴まで絞り出すように努めた。大尉のところへ戻ってから何をされるにしても、便意がぶり返すとろくなことにならない。

大尉が置いていってくれた紙は、一回分の分量には多すぎるほどだった。美雪はそれを使い切って、丹念に跡始末をした。禪に縦染みを作った箇所もぬぐってみたが、もう出血は止まっていた。

足取りも重く、往路の倍ほども時間をかけて大尉の部屋へ戻る美雪。

「衣袴をすべて取れ」

昨夜と寸分違わぬ命令。そんなことだろうと覚悟していた美雪は暗い顔に羞恥の彩を散らして、昨夜の手順を繰り返した。

「四つん這いになれ」

滅菌紗を巻いた細長い棒を手にして、大尉

が美雪の体側へ後ろ向きにしゃがんだ。左手で尻たぶを割り開いて、その中心に棒をあてがった。

「な、なにを……なさるんですか？」

「紙だけでは中まで届くまい。この棒で、ケツ穴の奥まで掃除してやる」

「なぜ……！？」

「ごちゃごちゃ言うな。兵は黙って上官の命に服しておればよい」

緊張してこわばった肛門に、棒の先端が強い力で押しつけられた。何重にも巻かれた滅菌紗の厚みが加わって、棒の直径は二センチにもなるだろうか。閉ざされた肉孔をこじ開けるには太すぎる。

「痛い……無理です」

「無理なものか。これより太い糞だってひり出すはずだぞ」

肛門を体内に押し込まれるような鈍痛。

「もっと力を抜け。口を開けて深呼吸せい」

一刻も早く辱めから解放されたい思いで、美雪は大尉の言葉に従った。

「ふう……はあ……ふう……」

二度目に息を吐き出しかけたとき。それま

で以上の力で棒が押しつけられた。

「は、ああっ……！」

ずぐっと肛門を裏返されるような感覚をともなって、異物が侵入してきた。痛みはあったが、美雪が予想していたよりは軽かった。

棒は左右にくねりながら、美雪の腸の奥までじわじわと押し入ってきた。滅菌紗の縁が肛門を引っ搔いて、快感とはいえないまでも苦痛とも違う感触を美雪に与えた。

直腸の奥に突き当たった棒が、今度は一方向に回転を保ちながら、いっそうゆっくりと引き抜かれていく。

「ふう……はあ……ん」

深呼吸を続ける美雪の息づかいに、微妙な艶が紛れ込んだ。

「ふむ、これくらいならよかろう」

大尉は抜き取った棒を一瞥してつぶやいた。滅菌紗は薄茶色に染まっていたが、固形物は付着していなかった。

カチャカチャと帯革の金具を外す音。美雪が四つん這いのまま首をねじ曲げると、軍袴を脱ぎかけている大尉の姿が見えた。その股間は、すでに怒張しきっている。

(まさか……！？)

男女の交合とは男性器を女性器に挿入することだということしか知らない美雪は、たった今までそんなことを想像したことすらなかった。しかし、肛門に棒を挿入されたことで、その可能性に思っていたのだった。

「そのままの姿勢でおれ」

立ち上がろうとした美雪に、低いが迫力のある叱声が浴びせられた。

軍衣も脱いで襦袢一枚になった大尉は、机の上の小皿から中身を指に掬い取って、浣腸をしたときと同じ位置についた。

美雪の肛門に大尉の指が触れた。

「え……？」

ねちゃっとした感触に、美雪は戸惑いの声をあげた。

「安心しろ、ヨードチンキなんかじゃない。医療用馬油(ワセリン)だ。前の孔と違って、こちらは自分で濡れてはくれんからな」

性的な刺激で膣が濡れるのは男性器の挿入を容易にするための動物的な反応だということくらいは、美雪でも知っている。

「大尉殿……勘弁してください」

美雪は泣き声で訴えた。

「なにをだ？」

空っとぼけながら、大尉は美雪の肛門を揉みほぐしにかかる。

「大尉殿は、お尻を女性器の代用にされるつもりですよ？ とても無理……ひゃ！」

小さな悲鳴は、肛門の中に侵入した指のせいだった。

「最初から白旗を掲げるとは、貴様、それでも軍人か」

指を根元まで挿入してもう一度美雪に悲鳴をあげさせてから、大尉は抜いた指の汚れをぬぐった。

「軍隊で生活するのなら、鶏姦には馴れておけ」

男色行為は厳しく禁じられているにもかかわらず、後を絶たない。とくに年少の志願兵が狙われやすい。性欲盛りの男の集団に『ほんものの女』が放り込まれて、身を守りたければ口とケツを差し出すくらいは覚悟しておくと、大尉はうそぶいた。

それは、あと二三日の辛抱と思っていた美雪の心を挫く言葉だった。兵役期間は四年。

そのあいだずっと、身の危険に直面し続ける  
とすれば――いずれは、どこの馬の骨とも知  
れぬ男に純潔を散らされることになるだろう。

「よし、挿れてやるぞ」

大尉は左手で美雪の肩をつかみ、逸り立つ  
魔羅を右手で押し下げて、美雪の肛門にあて  
がった。

「口を大きく開けて、できるだけゆっくり深  
呼吸せい」

絶望に打ちのめされて、美雪は深呼吸を始  
めた。

「ふうう……はああ……」

弾力性のある熱い塊が、肛門をぐんっと突  
いた。滅菌紗にくるまれた棒を受け容れて、  
すこしは要領がわかっている。美雪は肺の中  
の空気を少しずつ吐き出しながら、できるだ  
け全身を弛緩させた。

肛門を無理やりに拡張される重い痛みと、  
凄まじい圧迫感。

「痛いっ……！」

思わず声に出したとき。ずにゆっ……弾力  
のある熱い塊が、一気に侵入してきた。

「くううう……」

痛いというよりは、局部が灼かれているように熱かった。美雪の背中に脂汗が噴き出た。

腸がぐんぐん中へ押し込まれていくような錯覚。大尉の腰が双丘に突き当たって。

「ひい……」

昨夜叩かれた跡に剛毛がぞりっと押しつけられて、美雪はくすぐったいような鋭い痛みを感じた。

「腰の動かし方を教えてやる」

大きな手で、がっしと細腰をつかまれた。腰が前へ押されると同時に、ずぬっと腸が引きずり出されるような錯覚。魔羅が引き抜かれて、太い部分が肛門の裏側を圧迫した。

「く、苦しい……許してください」

「まだ始まったばかりだ」

腰を後ろへ引かれて、ぐんっと魔羅が突き込まれる。

ずぬっ……ぐん、ずぬっ……ぐん。動きがだんだん早くなっていく。美雪の背中も、激しく揺すられる。

ぱんぱん、ぱんぱん……肉と肉がぶつかる乾いた音が、部屋に響きはじめた。

「あうっ、ぐう……くっ、ううっ……」

美雪の苦鳴が乾いた音に彩りを添える。

「くう……ひゃあ！」

股間をまさぐられて、美雪は悲鳴をあげた。指に秘裂をえぐられて、さらに羞恥と苦痛の悲鳴が喉からこぼれる。

「淫乱な貴様も、ケツ穴で感じるのは、まだ無理か」

美雪の中が乾いているのをたしかめて、大尉がからかうように言う。いつのまにか、腰の動きをほとんど止めていた。

「ひゃん……！」

肉芽をこすられて、美雪は鼻にかかった悲鳴をもらした。

「なるほど、敏感だな。さっそく濡れてきたぞ」

じわあっと腰の奥に熱い潤いが広がっていくのが、自分でもわかった。

「もっと感じさせてやろう」

大尉は膣から指を抜くと、親指と中指で淫核を剥き出しにして、人差し指の腹で転がした。

「ひゃあ……あん……虐めないでください」

「虐めてなんかおらんぞ。ケツ穴の痛みを紛

らせてやっとするだけだ」

大尉は右の人差し指を小刻みに動かしながら、抽挿を再開した。

「あん……ひいいい……あうう……ん」

下腹部で蠢く生々しい快感と、肛門を責められる圧倒的な苦痛。相反する感覚の板ばさみに、美雪は艶やかな悲鳴を迸らせた。

ぱんぱんぱんぱん……ひとしきり、乾いた音が続いて。

「うむっ……」

大尉がぐんと腰を突き挿れた。

びくびくっと肛門がいつそう拡張される痛みとともに、腸の奥深くに熱い滾りが叩きつけられるのを、美雪は感じ取っていた。

大尉は美雪から身体をはなすと、三つ編みをつかんで美雪の向きを変えさせた。

上体を起こした美雪の前に突きつけられる、湯気の立っている怒張。

「昨夜のように、綺麗にせい」

反射的に、美雪は顔をそむけた。それから、意志の力で正面に向き直った。自分の排泄孔に挿入されていた異物を口に含むなど、ふつうでは絶対にできない行為だった。けれど、

命令を果たすまでは解放してもらえない。美雪は口を半開きにして、まだ水平より上向いている肉棒におそろおそろ顔を近づけた。両目から涙があふれて、視界がにじんでいた。

昨夜とは明らかに違う腐臭と、わずかに辛いようなえぐい味覚。それが自分の体内に潜んでいたものだと思うと、ますます涙があふれた。

厠へ寄ってお尻のまわりの汚れをぬぐって。消灯時刻から一時間以上も遅れて、美雪は兵舎へ戻った。袴下を穿き替えてから襦袢を脱いで寝巻に着替える。もう泣いてはいなかったが、緩慢で投げやりな動作だった。

「大尉さんも、いい趣味してるわねえ……？」

加奈恵の小さなつぶやきが、美雪には聞こえていたかどうか。

従兵教育の三日目の朝。

「柴野、夕べは何があったの？」

顔を洗っている美雪の背後から声をかける者がいた。最初の行軍訓練で転んで、下半身を露出させられた鈴木登代だった。全裸で行軍訓練をさせられた美雪に同情するどころか、

自分より恥ずかしい目に合わせられた者がいることで、屈辱の埋め合わせをしている節があった。

「大尉殿は、深夜まで事務仕事をなさるので……そのお手伝いをしていました」

言い訳はあらかじめ考えてあったが、それを口にするのは後ろめたかった。

「どうだかね？」

朝の支度に分秒をあらそっているときに、登代もそれ以上の追及はしてこなかった。そして、美雪への関心など吹っ飛ぶ事件が、朝の点呼で勃発したのだった。

「第三小隊第二分隊、総員二十三名、病欠一名、所在不明一名、現在員二十一名」

点呼の声が錯綜する中、下士官たちの顔がさっとこわばった。

「第二中隊だな。誰が不明だ？」

「立哨からの報告は聞いておらんのか？」

「分隊員、何か知っておるか？」

新兵たちは所在不明の意味すらよくわからず、上官の慌てぶりに戸惑っている。

点呼はすぐに再開されたが、早朝の訓練は取りやめ。行方不明になった田辺明子を全員

で捜索することになった。第二中隊は朝食返上で営内をくまなく探して、あとの二個中隊は朝食後から小隊単位で山狩り。美雪たちは後で知っただが、鉄道の駅にはただちに憲兵が張り付いた。

兵卒が行方不明になるのは、自殺か脱走のどちらかだ。夜遊びが過ぎて朝帰りということは、新兵にかぎっては（女子なら、なおさらのこと）考えられない。

分隊長の説明を聞いて、新兵たちもようやく事の重大さを理解した。家出や無断欠勤とはわけが違う。脱走しても訓練部隊だから、まさか銃殺まではないにしても、懲役は免れない。

（分隊のみんなを恨んでいたのかな？）

まず美雪が考えたのは、そのことだった。分隊長のしごきがきつくても、慰めてくれる仲間がいれば辛抱できるはずだと思う。分隊で孤立して、戦友のはずの同年兵に虐められて、連帯責任で巻き添えにしてやれと、そこまで恨みがついたのであるか。

自殺だか脱走だかをしでかした娘を、美雪はすこしだけ羨ましく思った。自分は虐めら

れて当然だという自覚が、美雪にはあった。父の身代わりにされているのだ。佐東さんや本田さんを恨む資格が、自分にはないのだ。

もちろん、皆川大尉は別だ。お見合いで振られた腹いせに破廉恥きわまりない行為を強要するなんて。けれど、仕返しはできない。一昨夜は軍刀に手をかけたけれど。もし抜いていれば上官への反逆で自分が罰せられるところだった。

臨時に貸与されたゴボウ剣で林を切り開いて進みながら、美雪はそんなことを考えていた。

「田辺三等兵、おらんか。自発的に姿を現わせば、穏便な処分で済ませてやるぞ」

小隊長がたまに声を張り上げるが、熱心なふうではない。脱走兵のほとんどは、後先を考えず故郷へ帰ろうとする。山へ逃げ込むのは、死に場所を探す者が多い。木の枝からぶら下がっている人間に呼びかけるのは無駄というものだ。

所在不明騒動は、昼前にあっさりとは片がついた。若い娘が軍服を着て街中をうろついていけば、いやでも人目にとまる。通報で駆け

つけた警官に捕まって、憲兵隊の手で大隊へ連れ戻された。

手首を前で縛られて泣きじゃくっている娘が憲兵隊の自動車から降ろされて、正門の前で最高指揮官の高橋少佐に引き渡された。

山狩りから戻った女子兵たちが、営庭に集まって成り行きを見守っている。小隊長たちが解散を命じないのは、見せしめにするつもりがあるのだろう。

「我が隊に所属する田辺明子三等兵の身柄を引き取る。ご苦勞であった」

重々しい言葉とは裏腹に、少佐の顔は茹蛸さながらに真っ赤だった。カイズル髭が、ぴくぴく震えている。

「あらためて、脱走兵を憲兵隊へ引き渡す。そちらの留置場へ拘留していただきたい」

少尉の階級章を付けた憲兵隊長が、わずかに表情を動かした。

「ただちに起訴の手続をすると理解してよろしいですね」

「無論」

憲兵隊の少尉が敬礼をして、明子の腕をつかんだとき。

「とりあえず、こちらの営倉へ収容してはいかがでしょうか？」

皆川大尉が、世間話でもするかのように少佐の横へならんだ。

「その必要はない」

「この者は、いささか精神を病んでおったと聞いております。そうですね、下村大尉？」

「え……？ いや、それは……たしかに……そういうことを、近藤が言っていたと……」

不意打ちを食らった第二中隊長が、しどろもどろに皆川大尉の言葉を肯定した。前任の皆川大尉に下駄を預けるべきだと判断したのだろう。

「精神を病んでおれば、徴集したこと自体が間違いでありますから、大隊長殿に責任はありません。とりあえず重営倉にして、精神状態を観察すべきだと上申いたします。如何でしょうか？」

皆川大尉の冷静な言葉に、髭の震えが止まって茹蛸がだんだん青白くなっていく。高橋少佐が何を考えているか、もちろん余人には知りえぬところではあるが。

史上初の女子兵だからこそ、厳正な軍規で

律すべしという近視眼的な思考。一億国民の期待を担った女子兵から早々に脱走兵を出しては、国家の動員計画に齟齬をきたしかねないという大所高所からの思惑。管区ごとに設けられた教育大隊の先陣を切って脱走者を出すという不名誉。女子新兵指導の最高責任者である自分の将来への暗雲。

「よかろう。処分を決めるまで無期限の重営倉とする」

えええーっという悲鳴のようなどよめきと、ほうっと吐き出される安堵の息が営庭に交錯した。大の男でも三日が限度とされる重営倉に無期限とは、懲役よりも苛酷な刑罰かもしれない。しかし、軍事裁判にかけられる不名誉は免れる。

新米の兵卒にとっては驚天動地の事件も、午後にはたいした余波も引かず。美雪は三日目の従兵勤務に就いた。

一六四〇から入浴のお供。課業終了前なので貸切だった。とりあえずは他人に裸を見られない安心感が、美雪の緊張をすこしだけほぐしていた。

「わたしも……中隊長殿を怒らせたら、無期

限の重営倉なんですか？」

大尉の背中を流しながら、反応をうかがった。狭い意味での男女の仲ではない。それ以上に卑猥で屈辱的な行為を強制された男を、美雪は激しく憎んでいる。けれど、夫婦さえもしないような破廉恥な行為を許した男に、馴れのような感情を抱いてしまうのは、女としてやむをえないことなのかもしれない。

「貴様は、田辺のように優しくは扱ってやらん」

「重営倉が、優しいんですか？」

なんだか自分が特別扱いされているような、奇妙なくすぐったさがあった。特別に憎まれているとは、なぜか感じられなかった。

「無期限とはいうが、せいぜい二週間だな。ろくに食事も与えられずに、身体を横たえることもできない。衰弱するのが先か、ほんとうに頭がおかしくなるのが先か」

そうなれば、軍事裁判どころではなくなる。健康上の不都合により早期除隊。

「親元で半年も静養すれば、健康を取り戻すだろう」

しかし、軍事裁判で懲役刑に付されれば。

軍刑務所に女子房はない。凶悪な男どもがうようよしている刑務所に入れられて、無事に出所できるわけがない。ずっと独房に監禁すれば不祥事は避けられるかもしれないが。重営倉に何週間かぶち込まれるのと、貴様はどちらを選ぶのか。

つまり。田辺三等兵の将来をおもんばかつての処置だと、大尉は言っているのだ。

(いったい……この人は、どういう人物なのだろう?)

私怨を晴らすために美雪の身体も心も踏みこむかと思えば、自分の部下でもない脱走兵を腹芸でかばったりする。人間は善悪の二面性を持つというから、そういうことなのだろうか。

ともあれ、美雪は大尉をすこしだけ見直した。これからの四年間、純潔を守り通せるとは思えない。どうせいずれは手籠めにされるのなら、ここまで肌を許してしまったこの男に奪われたほうがましかもしれない。そうなれば、恨みをこの男ひとりに集中できる。馴れと憎しみが渾然一体となって、美雪の心を惑わせた。

入浴が終わっても、今日は従兵勤務が継続された。将校用炊事所から夕飯を運んで、大尉が食べているあいだに美雪は洗濯を言いつかつた。皆川大尉は、夜干しを気にするような神経質な男ではない。中川一等兵は火熨斗掛け。食事中にそばでごちゃごちゃされても、平気なようだった。

それとも。一刻も早く中川一等兵の従兵任務を解きたかったのか。大尉の食事は茶碗に半分ほどの玄米と山芋、臍物と牛蒡の煮込みだった。どれも精のつく食べ物だったし、腹八分どころか五分にも満たない分量だった。戦闘機だって、燃料満載では動きが鈍る。

「はあ……」

知らず、美雪は溜め息をついた。一昨日は口、昨夜は肛門。拠点がつぎつぎに陥落して、いよいよ本隊が攻められるという予感が濃厚だった。なのに、恐怖はそれほどでもない。三十発も帯革で叩かれた痕は、今も痣があちこちに残っている。どころか、内出血が広がって、どす黒く腫れている。けれど——喉元過ぎればということか。あれは美雪の体力を無視した容赦のない拷問とかではなく、『気合

を入れる』範囲だったのではないかとさえ思えるのだった。馴致という言葉も、美雪は知らなかった。

（また……寝台に寝て股を開けなんて、命令されるんだろうか？）

無期限の重営倉よりも酷い罰を受けようと、自分から身体を開くつもりなんか美雪には毛頭なかった。

実際のところ。自分から身体を開く必要は、まったくなかったのだ。

「貴様はこの先も処女を貫けると、本気で思っておるのか？」

中川一等兵を追い出して、美雪に全裸で直立不動の姿勢をとらせる大尉。

「大尉殿に教えていただいた方法で、そのように努力します」

男の前に全裸を晒す恥ずかしさは変わらないが、営庭で衆人環視というわけでもなし、皮肉を言うくらいには馴れてしまった美雪。

「どうしても前に突っ込ませろと、ふたり三人に襲われたら、防ぎようもなからう」

「……最後まで抵抗します」

自害するという選択肢は、美雪の心から消

えている。

「抵抗を封じられたら？」

「それは……」

大尉が話を都合の良い（美雪にとっては都合の悪い）方へ誘導しようとしているのに気づいて、美雪は口ごもった。

「どうしようもできまい。諦めて犯されることだな」

大尉が勝手に結論を出したが、上官云々ではなく理屈としても美雪は反論できない。

「気お一付けッ」

不意打ちの号令。反射的に美雪の筋肉がこわばった。

「回れー右ッ。整列休め」

大尉に背中を向けて、腰の上で手を組んだ。その姿が後ろ手に縛られた形に酷似していることに、美雪は気づかない。

大尉が抽斗から麻縄を取り出して、美雪の背後に立った。左腕で喉を抱えこんで、縄尻を素早く手首に絡める。

「あっ……何をなさるんですか！？」

「貴様の抵抗を封じているのだ」

処女を奪うという宣告だった。

「やめてください……人を呼びます」

美雪は逃れようとして身をよじったが、自分で自分の首を絞めるだけだった。

「俺の袴下を味わいたくなかったのか？」

猿轡を噛ませると脅しながら、大尉は手首を縛った縄をぎりぎり引き上げた。

「い、痛い……！」

肩甲骨のあたりまで手首をねじ上げられて、肩が盛り上がった。ゴキッと関節が鳴って、今にも肩がはずれそうな痛みが走る。

「おとなしくせい。縄に余計な力が加われば、痛い思いをするのは貴様だぞ」

大尉は肩を押して美雪をひざまずかせ、縄を乳房の上に掛けた。胴を巻いて、手首から斜め上へ引っ張られている縄の付根で引き絞った。

「くうう……」

胸を圧迫されて、自然と声が漏れた。息をするたびに、縄が乳房に食い込んでくる。

(……………?)

美雪は戸惑いの表情を浮かべた。こんなときだというのに……乳房への刺激のせいだろうか。腰の芯に埋火のような熱がこもってい

く。

まだ余っていた縄尻が、乳房の下にまわされた。小ぶりの乳房か上下からくびられて、いびつに搾り出された、そのとき。きゅううっと腰の芯がよじれるような感覚が生じた。埋火が、一気に燃え盛った。

「あ……ああ、あ」

美雪の身体から力が抜けた。ふらっと横へ倒れかけて、大尉に抱きとめられる。

「どうした？ 縄を締めつけすぎたか？」

うなずいていれば、貞操は守れたのかもしれない。しかし、そこまで考えがまわらなかった。美雪は馬鹿正直に首を横に振った。

「もう、これで……なにをされても……抵抗できない」

とろんとした目で、美雪がつぶやいた。縛られていなくても、抵抗など実際にはできない。しかしそれは、物理的に抵抗が不可能なのではなく、みずから行動を封じているからだった。縛られたことで美雪は、おのれの意志に反して抵抗を放棄しなければならない葛藤から解放された。と同時に、運命が決してしまったという絶望とも安堵ともつかない思

いに、深く沈んでしまったのだった。牝の思うがままに翻られる。それは、本質的に受身である牝にとって自然な姿のように、美雪には思われるのだった。

大尉は、美雪の反応を別の観点から眺めていた。

「最初から縄に酔うとは……天性の素質だな。見られて濡らすどころの話ではない」

その独り言は美雪にも聞こえていたはずだが、意味を理解している様子はなかった。大尉に肩を支えられて、美雪は両脚を投げ出す形で床に座っている。

その足首をつかんで、大尉は美雪に胡坐を組ませた。足の甲を太腿の上に乗せる座禅の座り方——結跏趺坐だった。足首と膝を新しい縄で縛って、首に引き回す。海老縛りの形だが、上体は深く曲げていない。

美雪はそのまま前へ押し倒されて、臀部を高く突き上げた姿勢になった。開いた両膝と頭の三点で支えられているので、倒れる心配はない。

「ほう……」

美雪の股間を後ろから眺めて、大尉が嘆声

を発した。開脚しているせいもあるのだろうが、大淫唇がぱっくりと開いていた。その割れ目から、徴兵検査で女医が『未発達』と評した小淫唇が鮮やかな赤に染まってぼつと突出している。粘っこい汁があふれて、勃起した淫核から糸を引いて垂れていた。

美雪が性的に興奮していることに、疑問の余地はなかった。

「山岸女史もいい加減だな。いや、平常時は隠れているのだから……所見は間違っておらんか」

机に積んだ書類の下から取り出した帳面をぱらぱらとめくって、ひとりごつ大尉。それは、徴兵検査で女医が看護婦に付けさせていた覚え書きだった。皆川大尉に美雪との縁談が持ち込まれたのは十二月。徴兵検査を利用して未来の花嫁の道具の良し悪しを調べさせる裏工作をする時間は、じゅうぶんにあったわけだ。

数分の時間を置いて興奮を鎮めてから。やおら大尉は軍衣を脱いだ。職業軍人らしく引き締まった筋肉と、高射砲なみの太さと硬さと仰角を誇る逸物。

高く掲げられた美雪の尻の前に両膝をついて、大尉は砲身の先端を濡れそぼった肉孔に軽く挿れた。

「貴様は縛られて抵抗を封じられたのだ。観念して、俺に処女をささげろ」

その言葉と股間への刺激とが、美雪を正気づかせた。

「え……？ ああっ……だめ！ やだ、やめて！ 挿れないでえ！」

相手が雲の上の存在にも等しい（階級でいえば十以上も隔たった）大尉であることは忘れて、美雪は叫んだ。いわば、本能の叫びだった。しかしその声は、隣室から壁を叩かれない程度の大きさだったのだから――牝の本能は牡を受け容れていたのかもしれない。

「ぎひいいいっ……！」

熱い異物がずぬうっと押し入ってきて、ブチッと何かを引き裂く鮮烈な痛みが、腰の奥まで突き抜けた。しかし、その一瞬を除けば――肛門を犯されたときよりも苦痛は少なかった。縄に酔ったのかどうかはともかく、美雪の肉体が男を受け容れる準備をじゅうぶんにととのえていた証だった。

「なんという柔らかさだ。貴様、ほんとうに……」

処女だったのかという問いを、さすがに押しとどめた皆川大尉。徴兵検査で処女膜が確認されているのだから、疑う余地はない。破瓜の苦痛は少ないだろうという女医の所見が正しかったというだけのことだ。

「はあ、はあ、はあ、はあ……」

美雪は苦しそうに喘いでいる。喘ぐたびに、ぴくぴくと美雪の中が小刻みに収縮して。

「くそ！ 締め付けるな。口を大きく開けて深呼吸せい」

大尉は美雪の腰をつかんで動かない。それなのに、切羽詰った表情だ。美雪を命令に従わせるのが無理と見てとると。

「ええい。引導を渡してやる」

雁首のあたりまで引き抜いて、ずんっと根元まで打ち込む。

「痛い……！」

傷ついた粘膜をこすられて、美雪は苦痛を訴えた。が、悲鳴というほどではない。

ずんっずんっずんっつと四五回も打ち込んだところで、大尉が息を漏らす。

「うむっ……！」

あっけなく射精してしまった。

抜去して立ち上がると、美雪の身体を起こした。まだ傘を広げている亀頭を、当然のように美雪の唇に押し当てた。

美雪は虚脱した表情のまま、それを口に含んだ。しかし感情が死んでいるわけではない。口中に広がる鉄分の味。自分の破瓜の血を舐めさせられている屈辱とともに、生涯一度の喪失感が、美雪の胸に広がった。

美雪は悲しみの涙をこぼしながら、大尉に仕込まれたとおりに口を動かした。根元から先端に向かって、舌を絡ませながら唇で汚れを拭き取ってから。深く啜えなおして唇をすぼめて肉茎をしごき、中に残っている精を吸い取る。最後に、口中に溜まった汚物を、吐き気をこらえて呑み下す。美雪の白い喉が震えて、ゴキュッと鳴った。

大尉が衣服を整えるあいだ、美雪は後ろ手に緊縛された結跏趺坐のまま、じっとうなだれていた。純潔を奪われた悲しみに胸をふさがれながら、明日の夜は何をされるのだろうと、それに怯えていた。従兵教育は、あと二

日ある。初日に口腔を犯され、二日目に肛門を貫かれ、ついに今夜は大切にしてきたものを奪われた。奪われるものは、もう何も残っていない。情を通じた男女は、逢瀬のたびに交合を重ねると聞いた覚えがある。とすると、明日もこの男に抱かれるのだろうか。

そんなことを考えているうちに――肉壺の奥から、とろっと熱いものが滴るのを感じた。もちろん、それは大尉の放った精が垂れ落ちてきただけのはずだった。

縄をほどかれても、美雪の屈辱は終わらなかった。結跏趺坐で座らされていた床に、船形の赤い染みが着いていた。内腿に鮮血を伝わせながら、美雪は四つん這いになって雑巾で拭き取った。それからやっと、自分の後始末を許可された。

二〇時前に従兵勤務を解かれて、美雪は兵舎へ戻った。

「おや？ 女になったようでありんすねえ？」

いきなり加奈恵に指摘されて、美雪は棒立ちになった。自分では平静を装っていたつもりだったが、何百人もの男を経験している娼妓の目はごまかせなかった。いや……男でも

そうはお目にかかれないほどのがに股で歩いていけば、気づかれないほうがおかしいというものだった。

「え？ それ、どういうこと？」

「馬鹿ね。中隊長殿のオンナになったのよ、こいつ」

「そういえば、夕べも遅かったね？」

「ゆんべは別のところでお祭りをしんした。女だてらにお釜を掘らせたようでありんす。そうざんすね？」

「お釜……？」

首をかしげた娘が、その意味を耳にささやかかれて顔を赤く染める。

「つまりは、さっそく偉いサンに取り入ったんだ。蛙の子は蛙よね」

美雪を憎んでいる征子がきめつけて、美雪は被害者どころか分隊の裏切者という烙印を捺されてしまった。

二人の班長は部屋の隅で煙草盆を前にして、新兵たちの騒ぎに知らん顔。しかし聞き耳は立てて、美雪の腰のあたりを好色そうに横目でうかがっている。

「下のお口で満腹したんでしょうから、これ

はいらないね」

美雪のためにとってあった食事を持って、征子が立ち上がる。

「炊事所へ返却しておくわ」

「お手数をかけて、ごめんなさい」

他の娘にならともかく、征子と加奈恵には何をされても文句を言えないと、美雪は思い込んでいる。それに、今の場合にかぎっては。とても物を食べられる心境ではなかった。

点呼の時刻が迫っていた。美雪もみなと一緒に布団を敷いて、寝巻に着替える。薄桃色に染まった袴下を行李の奥に隠して、美雪は生理用の丁字帯に穿き替えた。

四日目も日中の従兵教育を免除されて、通常の訓練を受けることとなった。囲われ者とか夜戦勤務とかいった口さがない小声は聞こえないふりをして、美雪は訓練に没頭しようとした。

この日から本物の歩兵銃による教典が始まった。射撃の前に、分解・清掃・組立の手順を徹底的に叩きこまれる。射撃のあとで手入れを怠ると、火薬の燃え滓のせいで、銃は錆び

て使い物にならなくなる。複雑な作業中に、小さな螺子ひとつといえども、絶対に紛失してはならない。官給品を粗末にしないという精神論ではなく、実用上の問題だった。

小さな部品は、ひとつひとつが職人の手仕事で摺り合わされている。甲の銃の部品を乙に使おうとしても、きっちり噛み合わない。だから、予備の部品をあらかじめ準備しておけないのだった。

ミシン以外の精密器械に触れたことのない娘たちはおっかなびっくり、おぼつかない手つきで小銃と取り組む。遊底で指を挟むわ、発条を天井まで飛ばすわ、小さな螺子を隣の銃の部品に紛れ込ませるわの大騒ぎ。

指先の器用な娘や、次のつぎの手順まで考えて要領よく作業を進める娘も、すこしはいた。その筆頭は野田友子だった。美雪が全裸で行軍させられたとき、横合いから足を掛けた娘だ。友子は自転車屋の娘だと言っていたから、さもありなんといったところか。

午後からは、お決まりの行軍訓練。携行する荷物も実戦さながら。背囊のほかに雨外套や毛布も背負い、水筒や雑囊も腰に着け、弾

薬帯も肩に掛ける。しかも、三八式歩兵銃が四キログラムの重さ。まだ小隊単位の行軍だが、三十分もすると四十人の足並みがそろわなくなってくる。

足を掛けられたり後ろから突き飛ばされても転ばないように注意しながら歩くぶん、美雪の疲労は人一倍だった。しかし、中隊長に告げ口されるかもしれない危険を冒してまで、美雪に意地悪を仕掛けてくる娘はいなかった。

一七〇〇に訓練が終わると、足取りも重く将校官舎へ向かう美雪。入浴場へのお供はなく、いきなり全裸を命じられた。

「寝台に寝て股を開け」

初日と同じ命令だったが、美雪には拒む理由がなくなっていた。まっさらの敷布に汗臭い身体を横たえるのを（大尉にではなく、中川一等兵に）申し訳なく思いながら、美雪はのろのろと命令に従った。

「ふん、従順になったな」

皆川大尉も袴下ひとつの姿になって、寝台にあがった。

美雪は仰臥して、命令どおりに両脚を五十センチほども開いて、両手で顔をおおってい

る。その手を引き剥がして、大尉は美雪の唇を吸った。

「むぐ……」

大尉の舌が、歯をこじ開けて口腔に押し入ってきた。生暖かい軟体動物に這いずりまわられているようで、しかし、不思議と嫌悪の念はわかかなかった。

(肌を許した男のすることは、なんでも受け容れてしまうのだろうか……)

美雪は、女の悲しさをしみじみと感じていた。

大尉の舌が美雪の舌をとらえて、ほじくり起こすように絡めてきた。二匹の軟体動物が、美雪の口腔の中で蠢く。

ぴちょ、くちゃ……ちゅうちゅう。大尉が美雪をむさぼる音が、ひとしきり続いた。

大尉は美雪におおいかぶさって、左手で乳房を揉みしだき、右手は秘裂に這わせて中指で肉孔をくじりながら親指の腹で淫核を転がしている。

右手の動きに合わせて、美雪の身体がピクッピクッと痙攣する。刺激を受けて、膣の奥が熱く濡れていく。けれど、頭の芯は醒めて

いた。

男の舌を噛んでやったら、どうなるだろう。突き飛ばして寝台から落してやったら、脳震盪くらいは起こすかしら。そんなことをすれば、鞭打ち三十発どころではない厳しい制裁が待っている。だから、反抗するつもりはない。ないけれど……しようと思えばできる。美雪は、頭に浮かんだ行為を実行に移さないために理性をはたらかさねばならなかった。愛撫で性感を刺激されて股間を濡らしながら、美雪はしらけてさえいた。

大尉の唇が美雪の顔からはなれて、左の乳首へ移動した。

「あーっ！」

小さな声だったが、美雪がはっきりと叫んだ。それから。くくくっと、涙をこぼしながら笑う。

「どうした？」

大尉が、訝しげに身体を起こす。

「だって……」

美雪は仰臥したまま、裸身を隠そうともせず泣き笑いを続けている。

「順序が、まるっきり逆なもの」

何度か逢瀬を重ねてから唇を合わせ、身体を交えるのは、せめて婚約が決まってから。口にできないようは破廉恥な行為は、もし許すとしても、結婚して何年も経ってからというのが世間の常識というものだろう。それなのに、美雪の場合はわずか三晩ですべてが起きて、しかも最初の口づけが四晩目。笑いたくもなるし、泣きたくもなる。

「……常識がまかり通るなら、そもそも米国を相手に戦争などしとらん」

陸軍将校にもあるまじき暴言を吐いたのは、何人もの女を陥落させてきた三所責めが、美雪にまったく通用しなかった落胆のせいだったか。

「貴様の言う、口にできない破廉恥な行為を、口でしてもらおうか」

気を取り直して、大尉は上下を逆にして美雪にかぶさった。袴下も取り去って、まだ引力に負けて垂れ下がる逸物を美雪の唇にあてがった。

美雪は目を閉じて、それを口中に迎え挿れた。たちまち、はち切れんばかりの硬度を取り戻す、それ。

「んぶっ……」

秘裂を舌で割られて、美雪の身体がピクッと跳ねた。が、大尉の体重をまともにのし掛けられて、それ以上の身動きはできない。身体の芯で蠢く生暖かな軟体動物に気を散らされながら、美雪は初日に教えられたとおりに――竿を唇で咥え、雁首の舌先を這わせ、せわしなく首を振りたてた。両手は腰の横で敷布をつかんでいる。上下左右に逃げようとする肉棒の根元をつかんで固定するという（男の側からすれば陵辱感の薄まる）技法は、教えられていなかった。

大尉の舌は、昨夜貫通させたばかりの膣孔をえぐって、さらに奥へと侵入する。

ぴちょ……ぐじゅっ……内側を搔きまわされて、粘っこい潤いがあふれてくるが、美雪はそれに気づいていない。彼女の意識は、淫茎を満足させることに集中していた。

反応に乏しい美雪に焦れて、稚拙な口技にもどかしさを募らせ――いつしか大尉は、美雪の顔を押しつぶすほどに激しく、荒腰を使い始めるのだった。

最終日の従兵教育は、課業終了時刻前の入浴のお供から始まった。一番風呂を一日おきにする理由を美雪が訊ねて、大隊長と交替にしているからだと教えてもらった。

「つまり、大尉殿がこの部隊では二番目に偉いのですね」

そんなふうに相手を持ち上げる科白をすんなり口にできるのは、今夜をかぎりにも苦痛を伴う恥ずかしい行為から解放されるという思いが、美雪の心を軽くしていたからだった。それに……美雪の何もかもを奪った男が、たいして昇進の見込みもない下級将校では、自分があまりにも惨めだ。

入浴から戻ると、すぐに全裸での整列休めを命じられた。

「ええっ……！？」

部屋の隅では、中川一等兵が洗濯物をたたんでいる。けれど、何人もの眼前で大股を広げて下の毛を剃らされた恥辱を思えば、ひとりの見物人くらい、どうということはない。

美雪は衣服を脱ぎ、両手を後ろに回して腰の上で組み、足を三十センチほども横に開いた。すっかり馴染んでしまった、露出の基本

姿勢。中川一等兵にまで斜め後ろから見上げられているという意識が、腰の奥をかあっと熱くさせた。

美雪の眼前で大尉が抽斗を開けて、縄を取り出した。美雪の熱くなった部分が、きゅんっと痙攣した。

(縛られたら……どんなに恥ずかしいことをされたって、わたしのせいじゃない)

昨夜のように、自由な手足を自分の意志で動かさない——あるいは、男の命じるように動かすのは、みずから進んで恥ずかしい行為をしていることになる。縛られて男の好き勝手に躰られるのなら、偉いサンに取り入るものなにもあったものではない。美雪は、そんなふうに考えている。

縄が手首を絡め取って、肩甲骨まで引き上げられる。

「くう……」

胸乳の上に縄を回されて、美雪がちいさく喘ぐ。さらに縄を掛けられて乳房を上下から圧迫されると、一昨夜と同じように、美雪の身体から力が抜けていった。立っていられなくなって、その場に膝をつく。腰の奥がきゅ

ううっと収縮して、熱い蜜汁が絞り出される。ずきんずきんと、蕾が膨らんでいくのが自分でもわかった。

抵抗をしないのではなく、抵抗ができない。その思いが美雪の理性を打ち砕いて、無意識の深淵にひそんでいた被虐の<sup>さが</sup>性を加虐者の眼前に引きずり出してしまおう。

何人もの女を自身の性癖に馴致してきた皆川大尉も、これほどの『素質』に恵まれた娘に出会ったのは初めてのことだった。しかも、すべての処女孔をおのれの肉棒で奪い取った、ひとかけらも他人の垢で汚れていない少女。大尉は美雪の首に巻いた二本目の縄で上下の胸縄を絡めて、いとおしむように引き絞った。

「ああ……ん。虐めないで、ください」

「下の口は、もっと虐めてくれと言っておるぞ？」

大尉が、左右に開いたままの脚の付根を掌で揉む。

「ああっ……いやあ！」

充血してはち切れそうになっている小淫唇をぞりっと逆撫でされて、美雪は甘く叫んだ。

「厭ではなからう。正直になれ。貴様は、虐

められて悦ぶ女だ。もっと虐めてほしいと言ってみろ」

大尉は掌を股間に滑らせて、淫核をつまんだ。指先を軽く動かすと、くりっと包皮が剥けた。その根元を親指と中指でくびって、人差し指の爪で先端を虐める。

「ひいい……痛いっ！」

快感というにはあまりに暴力的な感覚が、美雪の股間から脳天まで突き抜けた。

もうすこしだけ爪を深く立てれば、玉羊羹のようにパチンと薄皮が弾けるのではないか。そう思わせるほどぷっくりと膨らんだ実核が、弾けるかわりにぐにんぐにんと、指先に馴染られて変形する。そのたびに、美雪は本気で苦痛を訴えた。しかし、大尉の胸に身体をあずけたまま、逃れようとはしなかった。

ボタン……遠慮がちに扉の閉まる音。二十三歳の中川一等兵には、刺激の強すぎる光景だった。

室内に大尉とふたりきりになるのを待ちわびていたかのように、美雪は甘い拷問に屈した。

「ああっ……痛い。もっと痛くしてください

……虐めてください」

口走って、美雪はがっくりと頭を垂れた。

大尉は二本目の縄を下へ垂らして恥丘の上で結び目を作ってから、二重にした縄を左右に分けて、大淫唇をくびり出すように股間へ通した。後ろへ引き上げて腋の下をくぐらせて、上下の胸縄をひとまとめに絞り留めた。

「く、苦しい……」

胸の圧迫感は、一昨夜の比ではなかった。うつむけた視界の中で乳房が、上下左右さらに真ん中でもくびられて、護謨鞠のように丸く搾り出されている。

(酷い……かわいそうな、おっぱい)

大尉に抱きかかえられて膝立ちを続けている美雪の股間から粘っこい蜜が垂れて、床まで糸を引いた。それを見て、美雪がうろたえる。股間が熱く滾るようだとは感じていたが、こんなにもなっているとは思っていなかった。

(なぜ？ 縛られて苦しいだけなのに……)

ただ——これでもう、どんなに破廉恥なことをされても、それは自分の意志ではないという安堵感があった。

美雪が戸惑っているあいだにも、大尉はさ

らに縄を掛けていく。首の後ろに結んだ三本目の縄を、尻の谷間から左右へYの字に分かれている縄に絡めてIの字に絞り、脇腹から前へまわして、美雪の胴を縦に走っている二重の縄を左右に引き広げる。

「んむむ……」

股間をくぐる縄が、ぐぐっと鼠蹊部に食い込んで、大淫唇を左右から圧迫する。加奈恵に締められた縄禪を、美雪は思い出した。花芯をえぐる結び瘤がないだけでしたが、縄の緊迫感は圧倒的に厳しい。

雁字搦めに縛りあげられて、美雪は寝台に仰臥させられた。背中の下敷きになっている手首が、縄の圧迫とは異なる純粹の苦痛に軋んだ。のも、つかの間。美雪の足首が持ち上げられて、身体をふたつに折りたたまれた。腰が浮いて、手首への圧迫が消えた。

美雪は足首を縛られて、その縄が寝台の脚につなぎ留められた。開脚した股間を天井に向けて突き上げた姿勢に、美雪は固定された。

あまりの恥ずかしさに目を閉じた美雪の耳に、大尉が衣服を脱ぐ衣擦れが聞こえた。

(あとすこしの辛抱よ……)

最後は口で埒を明けさせられるのか、それとも中に射精されるのか。どちらにしても、それまでの十分ほどを耐えれば今夜は解放される。従兵見習も今夜で終わる。

ぎしっと寝台が揺れて。いきなり、秘裂を太い物でえぐられた。淫茎とは明らかに異なっている。より太くて、より硬くて、暖かさがまったくなかった。

美雪は目を開けて股間を覗いた。そこには、太い木の棒が突き立っていた。大尉は美雪の横に腰掛けて、木の棒を握っている。

「いやあ……抜いてください。こんなのって、ひどすぎる」

「昨夜の貴様は、つまらなさそうにしていたからな。今夜は、たっぷりと満足させてやる」

「いやです！ 満足なんて……したくありません」

「そうだな。女は貪欲だから、どれだけよがり狂っても満足しないわな」

勝手なことをほざいて、大尉は張形を握る手を前後に動かした。単純に抽挿するだけでなく、手首の捻りを加えている。

ごりっごりっと、膣が抉られる。

「きひいっ……痛い、痛い！」

張形はただ太いだけでなく、何段にもくびれていて、太い部分には頭の丸い金属の鉾まで植えられていた。昨夜女にされたばかりの美雪には、残酷という形容では足りない凄絶な責め道具だった。

「ひいい……許して。もう虐めないでください」

涙声の哀訴も、大尉には通じない。

「もっと虐めてくれと言ったのは、貴様だぞ」

「あれは、無理やりに……ぎいいっ！」

鉾の部分でぐりっと膣口を搔きまわされて、美雪の言葉が途切れる。あとは、間断ない呻きと小さな悲鳴。それでも美雪は、大声で助けを呼んだりはしない。

大尉の禪は、二度と味わいたくないという——それだけの理由だった。このまま虐められていたいとは、微塵も考えていない。

「うう……きいっ……ふう、ふう……くうう……ひいいっ……」

くびれた部分で膣口がすこし閉じて、すぐに太い部分で拡張される。その緩急の差が、美雪を甚振る。

ずじゅう、ずじゅう、ずじゅう……美雪の拒絶を裏切って濡れそぼっている肉褌が、張形に搦みついて卑猥な音を立てた。

「きひい……もう、満足しましたあ……赦してください」

ずっぷ、ずっぷ、ずっぷ……張形の動きが、いっそう早く荒々しくなる。

「あがあっ……」

ぐんっと奥まで抉り挿れられた張形が膣の奥底を突いた。ごりっと肉の突起がひしゃげるような感覚。

「まだ、子宮の中までは突っ込めんか」

張形の先端が、ぐりぐりと子宮口をこねまわした。

「ひぎい……痛い。もう……いやあ……満足しましたあ」

「満足したのなら、きちんと逝ってみせろ」

美雪の支離滅裂な訴えを、無理無体な要求で退ける大尉。

ずんずんずん、ずぷう……浅く早く何度も突いてから、ゆっくりと奥底まで突き挿れられる張形。外側から縄で圧迫された大淫唇までが、裏側をこすられる。こちらのほうは、

無理に拡張される苦痛がない。むしろ、快感の萌芽とでもいうべき感覚が生じている。

「い……いく？」

美雪は、その感覚どころか言葉すら知らない。

「そうとも。マ●コも脳味噌も蕩けて、極楽へ逝ったような心地になることだ。知らないのなら、教えてやろう」

大尉は左腕で美雪の太腿をかかえるようにして、針先のような淫毛がまばらに散っている下腹部に掌を当てた。淫核の包皮をつまんで指先を前後に動かした。

指の動きにつれて淫核が、皮に包まれた小さな肉芽から開花寸前の肉蕾にまで変形する。そのたびに、つるんつるんと実核が刺激されて——小水を漏らしてしまいそうな激しい快感が生じた。

張形で与えられる耐えがたい苦痛と、指先で与えられる耐えがたい快感。そのふたつが渾然一体となって、美雪を惑乱させた。

「ひいい……あんっ……ううう……はあ、はあ、はあ、はあ」

苦痛に苛まれながら快感に翻弄される美雪。

悲鳴と嬌声とがひとつに溶け合い、荒々しい息づかいとなって喉からあふれた。

大尉が右手の動きに手心を加えたのか、美雪の肉体が張形に馴染んでいったのか。苦痛がだんだん薄れて、快感が腰に広がっていく。腰骨を疼かせ、背骨を痺れさせていく。

「はあ、はあ……はあん……ああん……あん、あん、あん」

無意識のうちに、美雪は腰を左右に揺すり、突き上げるような動きさえ始めていた。そうすることで張形の責めはいつそう厳しくなるのだけれど、それはもはや純粹の苦痛ではなくなっていた。痛みを快感に拮抗させることで、いつそう深い快樂が得られた。

淫核への刺激が、はたとやんだ。

「いやあ、やめないでえ……ひぎゃ！」

肛門にまで何かを突き立てられて、美雪は驚きの声をあげた。肛門に挿入されたのは、『危難をかわす方法を伝授』されたときに使われた清拭用の棒だった。股間全体が淫蜜まみれになっていたから、滅菌紗も巻かれていない直径一センチ半ほどの棒を挿入される痛みはほとんどなかった。前を張形で犯されな

がら肛門まで器具で犯されるという背徳感だけが凄絶だった。

淫核への刺激が戻ってきた。包皮の上からつまんだり揉んだりではなく、実核を剥き出しにされて、指の腹で転がされた。美雪は嬉々として、その暴力的な愛撫を受け容れた。

「ああああっ……ああん」

張形の抽挿も再開された。大尉が手首を返すように動かすと、二本の責め具はくねるような動きで交互に浅く出入りする。手首を固定して腕を前後させると、同時にまっすぐ深く貫く。

「ああん、あん、あん……あっ、あっ、あっ、ああっ、あっ……」

美雪の喘ぎが、甲高くせわしなくなっていく。

頃は良しと見て取ると、大尉は清拭棒を残して張形だけを抜去した。左手で淫核への刺激を続けながらのしかかり、すでに先走り汁を垂らしている逸物で一気に美雪を貫いた。

生身の挿入に肉体的な快感が伴ったわけではない。やっと大尉殿に犯してもらえたという充足感が、美雪の全身を包んだ。

「あああああ……ああん！」

美雪の足の指が反りかえった。太腿がぴいんと張り詰めて、脛脛がこむら返りでも起こしたかのようにふるふると震えた。数秒――すべての息を吐き出し終えて、美雪は意識を失った。処女喪失の翌日に、美雪は絶頂を教え込まれたのだった。

#### 4章 桃色訓練（全裸体罰の蔓延）

従兵の見習い期間を終えて通常の日課に復した美雪を待ち受けていたのは、同年兵からの虐めだった。衣袴を隠したり行軍で足を掛けたりという、露骨な行為は鳴りをひそめていた。そんなことをすれば自分たちにもとばかりが跳ね返ってくるという連帯責任の厳しさを、娘たちもじゅうぶんに理解していた。懲罰の見本が営庭の隅に展示されている影響も大きかった。

脱走をはかった田辺明子は、もう一週間の余も重営倉に監禁されている。小さな用具倉庫の表側をぶち抜いて、杉の角材で作った格子が嵌められている。板壁で仕切られた独房は、一畳分の広さもない。入浴はもちろん下着を替えることも許されず、垢まみれの身体で起床時刻から就寝時刻まで正座を義務付けられている。排泄は、見張りについている支援小隊の兵卒に申告してから、独房の奥に置かれた大きな甕を跨ぐ。寝るときは猫のように丸まるか、屎尿甕に背をもたせかけるしか

ない。絶対的に足りない栄養のせいよりも、監禁され晒し者にされている心労のせいで、すでに頬はげっそりこけている。あと一週間もしないうちに、心身ともに本物の病気に罹るのは確実だった。

彼女の境遇に比べれば、大尉に受けた仕打ちなどたいしたことではなかったとさえ、美雪は思ってしまう。一瞬たりとも我慢できないような激甚な苦痛と屈辱だったが、一日にせいぜい数時間、それも五日で終わってくれた。いや、ほんとうにあれは……苦痛と屈辱だったのだろうか。違うとは思わない。けれど。そのどん底を突き抜けた果てに味わった——快樂とはけっして認めたくない、あの感覚。わずか数日前の生々しい記憶を、懐かしい悪夢を思い出すように振り返る瞬間があった。

そういった美雪の心のありようは、おのずと態度に出てしまうのだろう。すくなくとも、強姦されてめそめそと泣き濡れている少女のそれではなかった。偉いサンに取り入ったという征子の讒言を本気で信じる娘も少なくなかった。

課業終了から就寝時刻までのあいだ、美雪に話しかける娘はいなかった。食事の盛り付けは、班長の見て見ぬ振りをたしかめながら日を追って減らされていった。征子、加奈恵、房江、登代の四人は、もっと直接的だった。繕い物をしているときに針で美雪の腕を刺したり、干してある洗濯物をわざと地面に落したり、ひどいときには兵舎の裏へ連れ出して（ビンタは跡が残るので）腹を殴ったり股間を蹴ったりもした。

同年兵だけではなく、上官にも目をつけられたというか、女性としての辱めを与えられた。数ミリに伸びた陰毛が袴下の生地から突き抜けるのは服装規定違反だと小隊長にきめつけられてしまい、週に一度は剃らなければならなかった。

そういったすべての事柄に、ほかの娘たちは知らん顔。そして美雪も、ただ黙って耐え続けた。

そうして再び、紛失騒ぎが起きた。いや、騒ぎにはならなかった。

演習の中心はあいかわらず行軍だったが、明日は営外へ出て昼飯を飯盒炊爨する予定に

なっていた。万が一を考えて、美雪は何度も携行品の員数確認を繰り返していた。それなのに。夕方になって、支給されたばかりの飯盒が忽然と消えているのに気づいた。

(お昼には、たしかにあったのに……)

美雪は今日の炊事当番だった。炊事所へ往復しているあいだに誰かが隠したのだとした考えられない。

簡単には見つけられない場所に隠してあるのだろうし、ひとりでうろうろと探しまわるのは、いくら美雪でも腹に据えかねる。

「班長殿。自分の飯盒が所在不明になりました」

堂々と申告してやった。全員で探せと命令が出るだろうし、それでも出てこなければ連帯責任だ。

しかし、美雪の思惑は肩透かしを食った。

「なにい？」

一班長の横田上等兵は一瞬だけ顔をしかめた。それから、わざとらしくぽんと手を打った。

「寝ぼけるな。貴様は飯盒に穴が開いているとか言って、修理に出していたじゃないか。」

今夜のうちに受け取っておかんと、明日に間に合わないぞ」

美雪を含めて二十名の分隊員たちが狐にままれたような顔をしている中、横田班長が立ち上がった。

「俺について来い、柴野。そうだ、清水もつきあわんか」

二班長の清水上等兵にも声をかけてから、美雪を外へ連れ出した。

美雪が連れて行かれたのは、将校官舎に隣接した倉庫だった。そこへ清水が、支援小隊の上等兵を引っ張って来て合流した。

「すまんな、青山。飯盒をひとつ、見繕ってくれんか」

店先の大根を買うような口調で、横田班長が倉庫を管理している上等兵に声をかけた。声をかけられた男は訝しげに横田を見たが、隣に立っている美雪に気づくと、唇の端をちよつとゆがめた。

青山が倉庫の鍵を開けて、三人を中へ招き入れる。豆電球だけを点け、倉庫の奥から年季のはいった飯盒を持ってきて横田に放って渡した。ぞんざいに扱われる、国民の血税で

購われた兵器。

「おいよ。これからか？」

「ああ。内鍵を掛けとけよ」

密室に男が三人と女がひとり。なにが始まるうとしているのか、悟れない美雪では（すでに）なかった。じりっと後じさって、積み上げられた木箱に背中が行き詰まる。

「これで貴様がおとなしくしてりゃ、八方まるく納まるってものさ」

「厭です……堪忍してください」

拒む声に力がなかった。悲鳴をあげれば将校官舎まで届くだろう。しかし、誰かが駆けつけてきて、それでどうなるのだろう。上等兵三人が口裏を合わせれば、三等兵の言い分なんか誰も耳を貸してくれない。それに……  
どういう心理か美雪自身にも説明できないのだが、こんな醜聞を皆川大尉に知られたくなかった。

横田班長の手が軍袴の縁にかかっても、美雪は背中を木箱にあずけたまま凝固していた。

「後ろを向いて、腰を突き出せ。いちいち言われんとわからんのか」

美雪は観念して軍袴を足元に絡めたまま木

箱に手を突き、男に向かって裸の尻を突き出した。とにかくこれで、明日の訓練を無事に過ごせる。だけでなく。これからも、突然の員数不足が起こったところで、同じように乗り切れることだろう。

どうせ、まともにお嫁にはいけなくされてしまった、この身体。それを使って軍隊生活が楽になるのなら、それはそれで構いはしないのではないかしら。加奈恵の悲しみの一端くらいは理解したと、美雪は感じていた。

「ちっ……まるで濡れてやしねえ」

「一週間前は生娘だったんじゃないか。これで濡れてりゃ、そのほうがおかしい」

ぺっと唾を吐く音。指が乾ききった秘孔を穿って、潤いを塗りこめる。

「い、痛い……」

美雪は苦痛を訴えた。

(なぜなんだろう……?)

皆川大尉に虐められたときは、もっとずっと痛かった。でも、痛みの奥に痺れるような感覚がうずくまっていた。それが、横田班長の行為からは感じられなかった。

貴様は虐められて悦ぶ女だと、皆川大尉は

言った。けれど今、これだけ虐められていても、美雪は快感も悦びも感じていない。

「あぐ……」

ずんっと挿入されて、その物理的な刺激に美雪はかすかな呻き声をあげた。人間の魔羅よりも太い張形に比べれば、痛みはたいしたものではなかった。しかし、犯されたという屈辱は——処女を奪われたという悔しさよりも、血の通わぬ道具で刺されたという恥辱よりも、はるかに強かった。

ずんずんずんっと腰を突き上げられて。男が膣内に欲望を吐き出すのを、美雪は感じ取った。

「おいおい……後に挿れる者のことも考えてくれ」

「孕ませると、ちと面倒だぜ」

二番手の清水が軍袴の懐囊から小さな紙包みを取り出した。大きな文字で『突撃一番』と印刷されている。膜を張った飴色の輪。それを逸物にかぶせて、くるくるっと巻き下げた。こんな物をあらかじめ準備していたのだから、美雪が紛失騒ぎを起こすのを待ち構えていたということだろう。

男の精液にまみれた膣孔は、乾いた護謨に包まれた怒張をするりと呑み込んだ。

清水が美雪の胸を揉みしだきながら、性急に腰を使い始める。しかし、三分ほど続けても射精する気配がなかった。横田を振り返って苦笑いする。

「貴様の後釜に突っ込んでいると思うと、どうもなあ。おい、もっと締めてみろ」

後半は美雪に向けた言葉。

「しめる……というのは？」

清水はちっと舌打ちして、ぱしんと尻を叩いた。

「糞を切るときに、ケツ穴を閉じるだろうが。あの要領だ。うんと強くな」

「……？」

わけがわからないまま、言われたとおりにする美雪。ぐんっと怒張が膨れあがる錯覚にとらわれた。

「うおお……食いちぎられそうだ」

それは、そうだろう。極太の張形を啞えこまされたとはいえ、秘孔を犯されるのはこれでわずかに五回目。締まり具合は処女孔と変わらない。しかも、連日の行軍訓練で鍛えら

れた下半身の筋肉を緊張させれば、南洋芭蕉（バナナ）どころか茹卵の殻だって割ってしまうかもしれない。

「……そのままにしとけよ」

ぱんぱんぱんと激しく腰を打ちつけて、あっさりと清水も埒を明けた。

「貴様も使うか？」

青山は手渡された『突撃一番』を装着するのももどかしく、美雪に背後からおおいかぶさる。

「うおっ……！」

突っ込んだ最初の刺激で暴発させてしまった。

「商売女とは勝手が違う」

照れ隠しにつぶやいて、青山は三人を倉庫から追い立てた。

「何度でも修理に出していいんだぞ」

そう言って、横田が飯盒を美雪の手に押しつけた。

「あ……」

美雪は飯盒を胸に抱いてしばらく歩き、それから言葉を継いだ。

「ありがとうございました」

時間にして三十分と経っていない。苦痛もなかった。ただ退屈なだけだった。けれど、人間として大切な何かを喪った気がしていた。

——兵舎へ戻ると、林分隊長が黒板の前で胡坐をかいていた。ぶすっとした表情で、三人を睨みつける。

「事情は聞いた。今後は勝手な真似をするな。必ず、俺に相談しろ」

「はいっ。つきからは分隊長殿と三人で対処いたします」

つぎに倉庫へ行くときは四人に犯されるんだ。たいして悲しくもなく、美雪はぼんやりと考えた。

「まあ、つきがあっては困るがな。皆にも言っておく」

分隊長の声が大きくなって。聞き耳を立てていた娘たちが居住まいをただした。

「官給品の紛失が重大な罪であることはもちろんだが、その逆はもっと罪が重いぞ」

支給された以上の員数を持っているとすれば、それは誰かから盗んだということだ。窃盗した者は、袴下ひとつでも重営倉。飯盒や水筒となると、軍法会議を覚悟しろ。

征子と加奈恵が、こわばった顔を見合わせる。隠してある飯盒が見つければ、それはそれで騒動になると気づいたのだ。

翌日の営外演習はつつがなく終わった。整然と行進する女子兵の一個大隊は、殺伐とした軍服に身を包んでいても、やはり艶やかな華があった。日の丸の小旗を打ち振りながら沿道に並んで見送る婦人と少国民たち。戦意高揚の面にも、女子兵の寄与は少なからぬものがあつた。もつとも、少女までも戦地に駆り出さねばならない時局を憂う良識人も、いないこともなかつたのだが。

街を抜けて小山に登り、燃料となる小枝や下生えはとつくに採取されつくしているので、持参の薪で飯盒炊爨をして、地形を利用した掩蔽の実地訓練などを受けてから帰営した。厳しい行軍ではあつたが、三週間ぶりの息抜きでもあつた。

しかし翌日からは、厳しくつらいだけの訓練が再開された。

そして。当初は初めての女子兵の扱いに戸惑い遠慮がちだった下士官たちが、いよいよ

本領を發揮し始めた。下士官にせよ古参兵にせよ、自分が新兵のときはさんざんにしごかれ虐められてきた。その仕返し——ではなく。軍隊の厳しさを新兵に叩き込んでこそ、無敵陸軍の伝統を保てるのだという大義名分があった。

そこに、相手が若い女性であるという特殊な条件が加われば、私的制裁に劣情が絡んでくるのは避けられなかった。

自転車漕ぎ。ふたつの机のあいだで腕を突っ張って身体を浮かせ、脚を回転させるという他愛のない遊びも、十分二十分と続けさせられれば陰湿な制裁になる。女子新兵で、これをやらされた者はいない。

そのかわり、暈水練をやらされた。袴下一本になって床に腹這い、平泳ぎの真似をさせられる。手足を動かすたびに、床につぶされた乳房がぷにぷに動いて、それを不快と感じるか性的な刺激にすり替えてしまうかは、制裁を受けている者次第だった。かといって、動作が小さかったりすると、仰向けで泳がされる。小さな布切れでかろうじて隠されているだけの股間を男の目の前で大きく開くのは、

全裸での整列休めを体験させられた美雪にとってさえも、恥辱以外のなにものでもなかった。

蝉の物真似。柱の途中にしがみつかせて、ミンミンと鳴き真似をさせる。体力のある若者なら、三十分でもつかまっていられるだろうが、蝉の物真似を同年兵にまで見物されるのは精神的につらいものがある。

これも、女子新兵向けに翻案された。悪いことに、ここは元小学校だった。宮庭の一面には砂場も残っているし、鉄棒や登攀棒もそのままだった。まず登攀棒につかまって、蝉の脱皮をさせられる。つまり袴下だけの、全裸にかぎりなく近い半裸になる。その姿で蝉の鳴き真似をしながら登攀棒を何度も登り降りさせられた。

細い棒にしがみつけば、どうしても股間を密着させてしまう。登攀棒で最初の性的快感を覚えたという女兒も少なくはない。第二次性徴も発現し終えた多感な娘が、薄い布地越しに性器をこすられて、平気でいられるわけもない。蝉の鳴き真似に甘い吐息が重なっても、やむをえないことだった。というより、

班長たちの思惑は最初からそこにあった。

途中で誰かが思いついて、登る手がかりをつけるという口実で、何箇所も棒に刻み目を掘って、そこに縄を巻きつけた。短い縄を一箇所に三本ずつ結んで、どちらを向いて登っても結び瘤が股間に当たるという芸の細かさだった。しかも、その作業は女子新兵がやらされた。自分を辱める細工を自分の手でさせられる。それも別の屈辱だった。

編隊飛行。何人かを並ばせて腕立て伏せをさせる。何十回もさせられれば、それだけでも肉体的なしごきだが、身体を上下させるたびにブーンブーンと飛行機の爆音の口真似をしなければならない。『急降下！』の号令がかかるとブウウウウンと速度を上げる。途中でへばろうものなら『被弾、撃墜』と竹刀の滅多打ち。

女子新兵も最初はこれをやらされていたが、疊水練の仰臥からの連想か、仰向けで身体を支える形に変わった。四点背中反らし——敵性語を使えばブリッジである。身体を動かす必要はなくなった。というより、動かしてはいけない。五分やそこら、四点背中反らしを

保つのは雑作もないことだった。竹刀で乳房をこじられたり、股間を叩かれたりしなければ……。

鉄棒はもちろん、乗馬練習に使われた。軍袴を脱いで――制裁の口実にされた罪の重さによっては袴下まで脱がされて――鉄棒に跨る。これだけでも厳しい股間責めなのに、手綱を持つ真似で腕を水平に上げていなければならない。全体重を股間で支えて、しかもパッカパッカと言いながら身体を上下に揺する。金玉を蹴られた痛みを女が理解できないと同じに、秘裂をえぐられる激痛が男にはわからない。平然と『五分で許してやる』などと男は言うが、それに耐えられる娘は少なかった。自分から飛び降りてうずくまっているところを竹刀で叩かれて、尻を真っ赤に晴らして泣きじゃくるのが、この練習の常だった。

登攀棒も鉄棒も営庭にある。袴下一枚、場合によっては全裸でしごかれている女子兵を、中隊長や大隊長が見咎めることはなかった。これはしごきや罰直ではなく、女子兵が自発的に体力を養っているのだという下士官の説明が、軍隊では通用するのだった。衣袴を脱

いでいるのは、演習でもないのに勝手に汚してはいけないからだ。黙認するどころか、ある中隊長などは、女には女の鍛え方があると放言したと聞こえてきた。それは皆川大尉だろうと、美雪は確信している。

美雪は、壘水練や四点背中反らしでは開脚した付根に視線を感じて袴下が透けてしまうほどに濡らし、登攀棒では蝉の鳴き声を甘く甲高く響かせ、乗馬練習でさえも秘唇を割り裂く激痛の中に甘美な痺れを自覚していた。けれど、どの罰直も厭でいやでたまらなかった。強制されてではあっても、自分の手足を動かして恥ずかしい姿勢を取ったり刺激を与えたりするのは不本意で恥ずかしかった。ふつうに五分間の乗馬練習をするのと、縛られて自分では降りられずに一時間放置されるのと、どちらかを選べと言われたら、むしろ後者を望んだかもしれなかった。

私的制裁が性的な色合いを濃くしたのと同様、訓練も男の集団ではありえない様相を呈してきた。その最たるものが格闘技だった。

野砲ないし山砲（場合によっては爆撃機）で敵陣地を破砕し、ついで重機関銃で敵前面

を制圧し、着剣した歩兵銃を構えて突撃して敵と斬り結び、最後の最後には対一の組み討ちになる。それが、当時の陸軍で想定されていた戦い方だった。

単純な体力では男でも敵兵に負ける。肉体の不利を克服するには格闘技に秀でるしかないというわけで、陸軍では柔道が演習の必須科目だった。

当時のこととて、女子といえども下着は許されない。生きるか死ぬかの瀬戸際に裸を恥ずかしがっている場合かと、胸に晒を巻くことさえ禁じられた。組めば、いやでも乳房はこぼれる。しかし、それだけではすまなかった。稽古に不熱心だったり負けてばかりいる者は半人前と罵られ、一人前の着衣を認められなかった。上衣は襟をつかむのに必要だから下を脱がされる。それでも態度が改まらなければ袴下まで剥ぎ取られる。

美雪はもともと筋力があつたし、運動神経も鈍くはない。上達は早かった。それでも、常に下半身を剥き出しにさせられていた。小隊長も二人の班長も、美雪を格好の鬪り者と考えているようだった。

しかし、分隊長と班長とでは思惑が異なっているのを、美雪は感じ取っていた。

飯盒の後は官給品の紛失は起きていなかったが、そんなことには関係なく、二人の班長は何かにつけて美雪に手伝いを命じていた。田辺明子が病院へ移送されて、営倉は無人になっている。その物陰で立ったまま犯されたり、青山上等兵の手引きで倉庫の奥で毛布の上に寝かされたり。美雪は彼らの慰み者にされていた。

だからといって、美雪を最賤にするつもりはないようだった。というよりも。皆川大尉がどのように美雪を扱ったかは、公然の秘密になっていた。美雪がお見合いで大尉を振ったことも知れ渡っている。美雪を虐めることを大尉殿がお望みだと、そんなふうを考える者がいてもおかしくはない。体力で劣り、しかも圧倒的に弱い立場にある者を虐める昏い悦びに、横田と清水は浸っている。

しかし林伍長は――飯盒騒ぎの翌日、不寝番に就いているはずの加奈恵に逆夜這いをかけられていた。昼間の疲れで泥のように眠っている十八人の娘（立哨の娘も広い意味では

加奈恵の共犯者だったし、二人の班長は気づいても狸寝入りだったろう)のすぐ横で交わされた、つかの間の情事。美雪から盗んだ飯盒の始末に困じはてたあげくの奇手だった。花街仕込みの寝技で蕩かされた分隊長は、何食わぬ顔で余分の飯盒を倉庫へ戻した。彼としては加奈恵の気を惹きたいがために、美雪を虐めているのだった。

抱かれようと拒もうと、味方につけても敵にまわしても、結局は虐められてしまう運命を、美雪はぼつぼつと悟りつつあった。その反動でもないだろうが。美雪は意地になってほかの娘たちを投げ、組み伏せた。夜がきたら兵舎の裏へ引きずり出されるのを覚悟で、加奈恵も容赦なく負かした。しかし、大柄な征子にはかなわなかった。たいがいは押し倒されて、そのまま組み敷かれる。『参った』は、軍隊では通用しない。ごちゃごちゃ言う暇があったら反撃しろ。叱咤されて相手を押し返そうとするが、襟で首を絞められたまま腹に膝を落されたりする。反則だと抗議しても、そんな文句が戦場で通用するかと一蹴されるだけ。

美雪への悪意ある攻撃は、征子ひとりにとどまらなかった。小隊の中で美雪より強い娘は四人。彼女たちに当たると、美雪は失神するまで甚振られるのだった。

入営して五週間が過ぎた頃、美雪はまた生理を迎えた。休ませてほしいと申し出たところで認めてもらえそうにないし、事実、生理痛もほとんどなかったので、蒲の穂と丁字帯で美雪は通常どおりの訓練を受けた。生理の間は柔道のときも、さすがに着衣を認めてもらえた。

生理が終わりかけてからの数日、また従兵見習を命じられるのではないかと、美雪は戦々恐々として過ごした。皆川大尉の行為は、日を追って過激になっていった。初日にいきなり口淫を強いられ、二日目は肛姦。三日目には縛られて処女を奪われた。四日目こそ、わりと優しく抱いてくれたけれど、最終日には恥ずかしい姿で寝台に縛りつけられて、人間の道具より大きな張形で前を犯され後ろも騎られた。しかも肉芽まで弄ばれて……逝かされてしまった。

あんなことをされるなんて、あんなふうに感じさせられるなんて——美雪の知らないことばかりだった。まして、今度は何をされるかなんて見当もつかない。ただ……ちょっとでもそのことを考えると。きゅううっと子宮が縮むような、妖しい恐怖が美雪を襲うのだった。

生理が明けて三日が過ぎて、従兵見習を命じられる恐れはなくなった。美雪はホッとすると同時に、肩透かしを食わされたような、大尉に見限られたような、空疎な思いにとらわれたのも事実だった。

この頃から、上官たちの美雪への虐めが減っていった。すくなくとも、罰直の都度にならず呼び出されるというほどではなくなった。

そろそろ、あいつも兵隊としてきちんと育ててやれ——皆川大尉が小隊長にそう言ったとは、女子兵にまでは聞こえてこない。しかし、空気の変化は敏感に察したようだった。中心になって美雪を虐めていた四人のうち、房江と登代は手を引いた。征子と加奈恵の運命に同情する女子兵たちの中にも、江戸の仇

を長崎で討つような行為に眉をひそめる者が増えていった。二人の非難になにひとつ反論せず、虐めにも耐えている美雪の態度を評価したという一面もある。

しかし一番の理由は、罰直に名を借りた女としての辱めを自分たちも頻繁に受けるようになったせいだったろう。美雪への虐めに加担すれば喧嘩両成敗、傍観してただけでも仲裁しなかった非を問われる。ケツ竹刀も畳水練も登攀棒も四点背中反らしも乗馬練習も乳ビンタも、連帯責任なんて真っ平だ。

こうなってくると、征子と加奈恵も皆の前では手控えざるをえなくなる。ふたりにとって、美雪と並んで同じ罰直を受けるのは屈辱以外のなにものでもなかった。美雪は逆に、このときばかりは厭でいやでたまらないはずの罰直に、後ろめたい慰めを（すこしだけ）見出さないでもなかった。

衆目に晒されて縄禪一本の行軍訓練をさせられ、整列休めで剥き出しになった股間を何人もの男性に覗きこまれ、全身が内出血と蚯蚓腫れに覆われるほど帯革でぶちのめされ、権力と縄で縛られてすべての処女孔を犯され

た美雪だ。みずからの意志で恥ずかしい姿を晒さねばならないという、美雪にとってはなによりもつらい行為も、そのことで加虐者を道連れにできるのなら、まだしも我慢できた。

上官という絶対の権力を利用した復讐。みずからも同じだけ傷つくとはいえ、それが卑劣な行為だという自覚が、美雪にはある。だから。表向きだけでも、虐められていることを隠そうとした。人目につかない場所へ連れ出される時、手を引っ張られるまでもなく、傍目にはいそいそといった態で征子たちについていき、ちょっと顎をしゃくられただけで全裸になって、殴られても蹴られても歯を食いしばって耐えているのだった。

その一方で。横田班長と清水班長とが美雪を性欲の捌け口に使うことに変わりはない。美雪の腹が赤くなっていたり乳房に引っ掻き傷を彼らが見つけることもあった。しかし、このときは加奈恵が分隊長と通じていることがものを言った。つまり、二人の班長は美雪の異変に気づかなかったことにするのだった。たいがいにしておくと、加奈恵が分隊長から釘を刺される場面くらいは、後であっ

たかもしれない。

入営前の生娘が聞いたら卒倒したかもしれないが、一か月以上もしごかれてきた新兵なら首を吊ろうとまでは考えない程度の、いうなれば『穏やかな地獄の生活』がゆっくりと流れて、美雪が入営して三度目の生理が近づいた頃。母と兄が面会に訪れた。父の姿はなかった。

さして広くない国民学校の敷地は、建て増しされたバラック棟で満杯。一部の施設は近所の民家を借り上げて使っている。面会所も、そのひとつだった。美雪は横田班長に引率されて面会所へ行った。ぶち抜きの人畳二間が衝立で幾つにも仕切られて、三組の先客がいた。美雪は、出入口からできるだけ離れた壁際へ家族を案内した。

「しばらく見ないうちに、ずいぶんと……」

まだ蕾だった花を無理無体に散らされて二か月。牝の色香が全身からにじみ出ているのを、母親は敏感に察したのかもしれない。

「毎日、男と変わらない訓練を受けているんだもの。ずいぶんと逞しくなったでしょ？」

美雪はできるだけ朗らかな声を出した。出入口のあたりには班長たちがたむろして、さり気なく聞き耳を立てている。滅多なことは言えないし、言ったところで家族を悲しませるだけだ。

「もう、完全装備の行軍もやっているのか？  
足なんか大根……いや、むにゃむにゃ」

兄のからかう口調が芝居めいていた。美雪が淫虐地獄にのたうっているとまでは想像できないだろうが、軍隊生活の体験者として、なにがしかの察しはついているのだろう。

「せっかく作ってきたんだから……」

母が出入口の下士官たちを横目でうかがいながら、座卓の下でそっと風呂敷をほどいた。重箱に、ぼた餅がぎっしり。面会で私物のやりとりや食物の提供は禁じられている。こっそりする分には見逃してもらえるのだけれど、美雪の場合はそれが罰直の口実になりかねなかった。

「兄さんなら、酒保があるのを知ってるでしょ？」

そうそう新兵が近寄れる場所ではないなどと、兄は余計なことまで言わないだろう。

「ぼた餅とかサイダーも売ってるな。酒保と言いながら、酒はご法度だが」

「地方——軍隊では、娑婆のことを言うんだけど。地方より、ずっと恵まれてるのよ」

こうして、短い面会は無事に終わった。せっかくの差し入れをなぜ持って来なかったのかと、夜になってから征子と加奈恵に兵舎の裏へ連れ出されて、目隠しをされたうえで（もちろん全裸で）樹から吊るされて二十発ほどぶちのめされたのは、事件のうちにはいない。

生理が終わりかけた四日目になって、美雪は二度目の従兵見習いを命じられた。ほかの娘たちは見習のたびに別の上官について特定の癖に染まらないよう配慮されているのだが、美雪が仕える相手はふたたび皆川大尉だった。

覚悟を決めた美雪は淫毛もきちんと剃って、蒲の穂は挿れたまま平時の袴下（黒猫禪）に置き替えて、大尉の下に出頭したのだが。入浴のお供を命じられたのは中川一等兵のほうだった。美雪は大尉の部屋を掃除してから夕飯の支度をととのえ、兵舎へ戻って大急ぎで自分も食事をした後は、書類仕事を手伝わさ

れた。中川一等兵よりも美雪のほうが字も綺麗で漢字も知っていたし、計算も早かった。

「おさんどんはともかく、秘書役は女学校出にかぎるな」

学歴のある兵卒は早々に幹部（下士官）候補生を志願するから、従兵にはならない。

それはともかく。気味が悪くなるほど、優しくて物分りのいい上官ぶりだった。肌を鞭打つ音や寝台の軋む音、押し殺した悲鳴や嬌声は、薄い壁越しに筒抜けなのだから、そうそう続けては、部隊で二番目に偉い大尉も具合が悪いのだろう。風評は昇進にも障る。消灯時刻には兵舎へ帰って、安堵しながらも拍子抜けした思いで眠りに就いた美雪だった。

二日目も無事に過ぎて、このまま何事もなく従兵見習期間が過ぎるのではないかと思うようになっていた美雪だったが。三日目に、戦局研究会へのお供を言いつかった。朝に出発して汽車で半日。夜は簡素ながら懇親会も催されるので、一泊することになる。その一泊のあいだになにをされるか、美雪は胸を締め付けられながらも股間が疼くのをとめられなかった。

一等車に乗るのは将校か課長級以上の役人。民間の会社なら役員くらいに限られている。席は三割も埋まっていない。運転が間引かれてからは通路にまで人があふれるのが常態になっている三等車とは別天地だった。座席は革張りの一人掛け。それが窓に沿って両側に一列ずつ、正面を斜め前に向けて並んでいる。

皆川大尉はいちばん後ろの座席に座って、横に美雪を立たせた。品定めよろしく振り返った乗客は、軍帽の両側に垂れたお下げを見て目を丸くする。が、座席におさまっているのは金筋三本に星三つ。いつまでもじろじろ眺めていては怒鳴られかねない。さり気なく視線を元に戻すのだった。

大尉は肘掛に置いた腕を伸ばして、美雪の尻をつかむように揉みしだいた。美雪にとっては屈辱の姿勢——整列休めで開いた内腿をぞろりて撫でて、股間にも指を這わせる。美雪はじっと立ったまま、誰かに振り向かれるのを恐れて、かすかな呻きも漏らせない。

汽車が停車駅にさしかかると、大尉の悪戯はやんだ。駅で一等車に乗り込んで来たのは二人。金筋四本に星一つの陸軍少佐と、その

従兵だった。

「おや、こんなところで奇遇——でもないか。  
貴様も研究会か？」

「おお。新兵教育部隊の指揮官に、島嶼防衛  
もなにもあったもんではなからうがな」

それには答えず。少佐は従兵に大きな風呂  
敷包みを網棚に置かせてから、客室の外へ追  
い出した。

「これが、噂の女子兵か？」

「男に見えるか？」

少佐は苦笑して、通路を隔てた隣の席に座  
った。

「貴様は従兵をずっと立たせておくのか？」

少佐の従兵は三等車両へ行かされたらしい。  
ぎゅう詰めでも御国のために生命をかける兵  
隊さんなら黙っていても席を空けてもらえる  
し、なにより上官からはなれて息抜きがで  
きる。

「従兵だからというわけではない」

(……！)

また尻を撫でられて、美雪はびっくりした。  
ふたりの話しぶりからすると親しい仲のよう  
だが、まさか上官の前で堂々と手を出してく

るとは、大尉の傍若無人な振る舞いが信じられなかった。

「……なるほど」

もう一度苦笑して、少佐は車窓に顔を向けた。

大尉も自分の好色をわざわざ親友に宣伝するつもりはないらしく、じきに手を引っ込めた。けれど、三等車へ行けとも言わない。必要もないのにいつまでも立たせておく。それは現代でいう放置プレイの一種なのだが、美雪にはそこまで感得する想像力はない。ただ、一等車の切符も持たない自分がその場において、ただひとり立っていることに、居心地の悪さを感じていた。

列車が目的の駅に着くと美雪は地図をもらい、書類とか筆記用具をまとめた風呂敷包みは大尉に渡して、大きな旅行鞆だけを持って先に旅館へ向かった。大尉も旅館で昼飯を食べるはずだったのだが、少佐と会って予定を変えたのだ。

卵焼きに刺身と牛肉の時雨煮。旅館としては簡素な献立だろうが、ひさしぶりに食べるまともな食事だった。

美雪は、ふたりの荷物の大きさの違いが気にかかっていた。風呂敷包みは、少佐のほうはずっと分厚かった。独自の研究資料とか参考書類とかが、ぎっしりなのだろう。それに比べて少佐の鞆は小さかった。一泊だけなのだから、身の回り品と替えの下着はそれくらいの分量だろう。けれど大尉の旅行鞆は、これから戦地に赴くと言われても信じてしまいそうな大きさだった。

(いったい、何をこんなに詰め込んでいるんだろう?)

好奇心に負けて、鞆を開けてみた。どきり、とはしなかった。ああ、やっぱりという諦めの感情。この品々が自分の身体に使われるのだという、切なさの混じった悲しみ。麻縄、何本もの張形、肛門清拭棒、イチヂク浣腸、洗濯バサミ、細い竹の筥、大小の針をおさめた箱……抽斗の中身がそっくり詰められていたのだった。

美雪は鞆を元に戻して、厠へ立った。たとえ浣腸をされても、固形物を撒き散らしたくはなかった。二十分ほども粘って腸の中身を出し終わると、鞆の中にあった剃刀を持って

浴場へ行った。三日前の夜に剃った下腹部は、胡麻粒をぱらぱらと撒いた景觀を呈していた。大尉殿のために身体を綺麗にするのではない。見苦しいところを見られたくはないという、せめてもの女の意地だった。

午後二時をまわって早々に、美雪はすることがなくなった。散歩に出るのも億劫だった。まさか旅館の浴衣で出歩くわけにもいかないし、女の身で軍服を着用していれば注目を浴びることおびたしい。この旅館に来る途中だけで三度も巡査の職務質問を受けた。官姓名を名乗って軍隊手帳を見せると、それまでの横柄な態度を翻してしゃっちょこぼった敬礼をしながら、御国のために頑張ってくださいとお座なりの決まり文句。

庭園の中に建てられた離れ屋だから、座敷からの眺めは悪くない。鹿威しのカコーンという音を合いの手に、美雪はぼんやりと時をやり過ごした。

大尉といえば、帝国陸軍という大会社の課長くらいだろうか。特等室に泊まるのは分不相応ではないかしらと、美雪は思う。しかも、師団本部に近い宿をとらずに、街の反対側を

選ぶなんて。それもこれも……そこまで考えて、美雪は頭をぶるんと振った。その先を考えると妖しい恐怖が甦ってきて、また意思に反して股間が熱を帯びてくる。

大尉に犯されてから、もう二か月。そのあいだ、週に一度か二度は横田班長たちに呼び出されて輪姦されてきた。最近は青山上等兵だけでなく、よその班長や支援小隊の何人かも加わっている。その全員と同時にというのではなく、多いときでもせいぜい五人までだった。深夜に連れ出されたこともあったけれど、たいていは夕飯から夜間点呼までの短い時間。犯されながら口淫を強いられることも珍しくなかった。屈辱感はひとしおだったが、それでも、どんな罰直よりも肉体的には楽だった。

ただ……大尉との最後の晩に教えられた『逝く』という凄絶な感覚。それにわずかでも似た快感は訪れなかった。ご機嫌取りのつもりか、新兵には近寄りがたい酒保で仕入れた大福餅とかアンパンをもらうこともあったけれど、自分の行為が売春じみて感じられ、ますます惨めになるだけだった。

(加奈恵さんは、どうなんだろう?)

彼女は不寝番の目も耳も気にせず、分隊員が寝ている(ふりをしている)横で、林分隊長と乳繰り合っている。よがり声というのだろうか、苦しそうな甘ったるい喘ぎを――さすがに抑えようとして、みずから口に手拭を押し込んだりしていた。

最近では両隣の部屋からも、似たような気配が伝わってくることもある。が、それはともかく。加奈恵の漏らす嬌声は、野蛮で屈辱的な行為を悦んでいるとしか美雪には聞こえなかった。行為の見返りとして何かを恵んでもらっても、元々が商売女なのだから後ろめたくも思わないのだろう。

庭園に影が動いて。はっと気がつくのと、皆川大尉がこちらへ歩いてくるのが見えた。美雪は立ち上がって玄関口へ行き、(無帽だったので)上体を折った敬礼で大尉を迎えた。

「素っ裸になって、整列休め」

大尉は軍装も解かずに、連続命令を出した。

命令の性急さに圧されて、脱いだ衣袴をきちんとたたむことで覚悟を決めるいとまもないまま、美雪は恥辱の姿勢をとった。二か月

前と違って、午後六時過ぎは夕暮れにもなっていない。陽の光のある場所で、みずからの手で着衣を剥ぎ取るのは、初めてのことだった。全裸で行軍訓練をさせられたときよりも、むしろ恥ずかしさが募るのは、これから何をされるのかがわかっているからだろうか。征子と加奈恵に虐められてできた痣が消えてくれていることが、せめてもの慰め——だと思ってしまう不可解な心の動きに、美雪は気づかない。

美雪が予想していたとおり、たちまち後ろ手に縛られた。二か月前に比べて、縄の掛け方が緩く感じられた。乳房を上下から圧迫されても、立ってられないほどの無力感が襲ってこなかった。

美雪は縦縄も通されて、秘裂に大きな結び瘤を埋め込まれた。

(ええっ……?)

そこをふさぐということは——大尉には今すぐ美雪を犯したり張形で鬨ったりする意図がないのだろう。美雪は安堵するどころか、未知の責めへの恐怖に怯えた。怯えながら、熱く滾るのをとめられない。

美雪は結跏趺坐を組まされ、重ねた足首と首とを縄でつながれた。美雪の上半体は三十度ほど前に倒れて、起こせなくなった。

大尉が旅行鞆から洗濯バサミを取り出した。予告も威しもなく、パチンパチンと乳房に噛み付かせる。

「んぎいい……」

目の前で星が飛び交ったほどの鋭い痛みだった。けれど美雪は苦悶を訴えるのも忘れて、三つ目の洗濯バサミが乳首よりも下へ動くのを凝視していた。大尉の指が二本の縦縄を広げて、淫核をこじり出す。包皮をつるんと向かれて……

「待ってください。せめて、声を出せなくしてください」

ちょっと爪を立てられただけで悶絶しそうになる突起。そんなところを洗濯バサミで噛まれたら……悲鳴をあげるより先に気絶するだろうか。

「だいじょうぶだ。発条は焼き戻して弱くしてある」

美雪の絶望とは裏腹に刺激で勃起した実核に、大口を開けたワニが正面から襲いかかる。

「いっ……ひいいいいい！」

か細い悲鳴が長く尾を引いた。極限の苦痛は絶叫する気力すらも人から奪うのだと、美雪は知った。

剥きだしの突起に喰らいついた洗濯バサミは、乳首の二つより大きかった。大尉が手をはなすとだらんと垂れて、先端が畳に当たった。

「俺は、これから懇親会に行く。二二〇〇（午後十時）までには帰るから、おとなしく待っておれ」

大尉の言葉に美雪の全身から血の気が引いた。あと三時間以上も、この姿のまま放置する。大尉は、そう言っているのだ。

「無理です！」

叫んで、それから必死で理由を考える美雪。「女中さんとかに見られます。それに……縛られたままだと鬱血で手足が腐ります。それに……」

「だから、縄は緩めにしたのだ」

大尉が乳首の洗濯バサミを指で弾いて、美雪の抗議を封じた。

「暴れると、だんだんきつく締まってくるぞ。」

おとなしくしておれ。この洗濯バサミも、半日くらいでは乳首がもげたりはしないと実験済みだ」

さらに抗議しようとする美雪に背を向けて、大尉は出て行った。玄関口を開けたままにしたのは、美雪が最初に挙げた理由への答えだったろうか。

「こんなのって……ひど過ぎる」

呻くように怨じる美雪の白い脹脛に、ぽたぽたと涙が降り注いだ。美雪は、身をよじって泣くことすら許されなかった。縄から抜けようとして手首を動かせば、逆にじわっと締めつけてくる。腰をちょっとでも揺ると洗濯バサミの先が畳を擦って、突起に鮮烈な痛みを伝えた。

こういった離れ屋は男女の密会にも使われる。玄関口が本館からは見えない向きになっているのが、せめてもの救いだっただけ。しかし、僥倖は長く続かなかった。

がらりと引き戸の音がして、美雪の意識は慢性化した苦痛の煉獄から引き戻された。

「あらあら、まあまあ」

驚き呆れた声を放ちながら、女中が美雪の

前に立った。

「女の兵隊かと思っていたら、将校さんの慰み者だったんだねえ。それとも、これが噂に聞く軍隊の懲罰ってやつかい？」

好奇心も蔑みもあらわにして、縄をまわって淫虐な飾りを身につけた裸身をしげしげと眺める女中。

気が遠くなりそうな羞恥におののいている美雪は、夕食の時刻に女中が手ぶらで現われたことに疑問を持つどころではなかった。心付けのひとつも握らせて、皆川大尉が仕組んだ茶番劇ではないかと勘繰りもしなかった。ただ深くうなだれて黙りこくっているしか、身の処し方を知らなかった。

女中は、けがらわしい物に触れるかのように、それでいて触らないではいけないといった様子で洗濯バサミをつまんで引っ張ったりひねったりし始めた。

「うぐ……くひっ……」

噛み締めた唇からこぼれる呻き。美雪がやめてと頼まないのは、それが無駄なことどころか、かえって厳しい責めを招くだけだと、大尉に調教された成果だったろうか。

「ふん、まんざらでもない啼き声だね。まだ若いのに、とんだ変態娘だよ」

憎まれ口を叩いてから、女中は布団を敷きにかかった。

「一組だけでいいね。どうせ、夜っぴて抱き合って寝るんだろ。それとも、そのまま床の間にでも飾ってもらうのかい」

突起に食いついた洗濯バサミを指で両側から強くつまんで、美雪からそれまで以上の呻きを搾り出してから、女中は出て行った。

縄に締めつけられて美雪は身じろぎひとつできず、秘裂に埋め込まれた結び瘤の緩やかな刺激を感じながら、ひたすら皆川大尉を待っていた。乳首と淫核を苛む激痛は半ば麻痺して、それが常態と化していた。

(こんなに虐められているのに、なぜ腰が疼くんだろう?)

いつか、考えはそこへ行き着く。もちろん、そこをいやらしく刺激されているからだ。男性だって、その気がなくても刺激されれば勃起する。疲れ魔羅とか朝勃ちとか、直接の刺激さえ関係ない場合だってある。でも……二度目の従兵見習も皆川大尉に仕えるのだと知

らされたときの、落胆の奥にひそんでいた胸のときめき。あれは……？

ぶるっと身震いをして、揺れた洗濯バサミで甦った激痛に眉をしかめて、美雪は想念を打ち切った。ほかのことを考えようとした。

忠勇報国。滅私奉公。そんな言葉が虚しくなる、軍隊生活の実態。女子兵だから性的な色合いが濃くなるのだろうけれど、新兵虐めが蔓延していることは、兄の話からも薄々知っていた。根性を根本から叩きなおすとか、もっともらしい理屈があるそうだけど。古参兵の中でも、手を上げる人は限られているそう。農家の次男坊とか、小学校しか出ていない町工場の徒弟とか——民間で地位の低かった人が、悪平等の軍隊で鬱憤を晴らしているだけだと、これも兄の受け売りだった。

ここの班長たちは、兵隊としては優秀なのだろう。それを評価するのは下士官だ。会社での出世が約束されている人や跡取り息子は、下士官なんかにならない。新兵虐めに熱心な者が下士官になって、同類を高く評価する。

三か月目にしてようやく、美雪は軍隊の本質が見えてきたように思った。訓練に明け暮

れ、点呼や服装検査に追い回され、わずかな残り時間も罰直や上官の性処理や同輩の虐めに費やされて、睡眠時間さえ不足気味の日々。こんなふうじつくりと物事を考える時間を持てたのは、初めてのことだった。

――夜がとっぷりと暮れてから、皆川大尉が戻ってきた。灯火管制で周囲を暗幕に遮られた電灯が、ぽうっと闇を遠くへ押しやった。

ホッとしかけた美雪は、大尉の背後にある人影に気づいて顔を引き攣らせた。

「なるほど……貴様の趣味は、相変わらずだな」

途中の駅から乗り合わせた少佐だった。

「懇親会に遅れたと思ったら、こういう悪戯をしていたのか。貴様がオンナにした娘だろうに。もうちょっとは大切にしていればどうだ」

「大切にしていっているとも」

着けたとき以上に無雑作に、大尉は三つの洗濯バサミを取り去った。

「あ、あん……」

白く変色していた突起に血流が甦って美雪は、はしたなく喘いだ。痺れた足で立とうと

するときのもどかしさとむず痒さ。それを何百倍にもしたような感覚が、三点の突起から全身に広がってゆく。

股縄を解かれて、あお向けに転がされた。

「こいつは虐められて悦ぶ天性の変態娘なのだ」

それは違うと、美雪は内心で強く反発した。征子たちに虐められても、嬉しくなんかない。大尉が言っているのは、虐めに性的な意味合いのある場合なのだろうが、桃色罰直を悦んだことも絶対はない。整列休めだって、厭で恥ずかしくてたまらない。

けれど……

「なるほど……なんとも卑猥に濡れているな。四十女でも、ここまで濡らすのは珍しいかな」

下半身に裏切られて、美雪は自分自身すらも納得させられないのだった。

「で、どうする？」

ふたたび美雪の顔がこわばった。何人もの男どもに嬲られているあいだ、卑猥な会話がいやでも聞こえてくる。美雪の卑猥な姿を自慢たらしく見せつけておいての、この質問がどういう意味か、悟れない美雪ではなくなっ

ていた。

「貴様と穴兄弟になるのだけは遠慮しておくが……」

少佐は美雪の股間に視線を奪われたまま、しばらく考えていた。

「今生の別れに、一度くらいは貴様の遊び方を見ておくのも悪くないな」

ひとたび戦地へ赴けば生還の可能性は低い。少佐も近々にどこかへ出征するのだろう。しかし美雪にとっては、見ず知らずの男の生死によりも、自分の痴態を見物される屈辱のほうが大問題だった。

「では、少佐殿のために張り切るとしよう」

皆川大尉は美雪を起こして、縄をほどきにかかった。

「俺だって上等兵なんかと穴兄弟にはなりたくないが……」

そのつぶやきを聞いて、美雪は暗澹とした気分になった。

(この人は知っているんだ……)

美雪が班長たちの餌食になっていることは、もはや公然の秘密だった。雲の上の中隊長の耳にまで達してはおかしくはない。どころ

か。行軍訓練で転んだとき、美雪への制裁を小隊長に指示したのが皆川大尉だったという噂もあった。

「指揮官先頭で飛び出してしまったからには、部下と一丸になって突撃せんことにはなあ」

自分への性的な虐めをそそのかしているのは、案外とこの人かもしれない——美雪は直感した。しかし、そんな詮索をしているどころではなかった。縄をほどかれて、美雪はいつもの姿勢をとらされた。

「我が部隊では、ビンタのごとき野蛮で危険な私的制裁は廃れておる。そのかわり、女子兵に対しては効果的な手段が、いろいろと考案されておってな」

「考案したのは、貴様じゃないか？」

ありそうなことだと、美雪も思う。

大尉は少佐の言葉は聞こえないふうを装って、美雪に正対した。

「四点背中反らし、用意」

そら、来た。美雪は沈んだ表情で仰臥して、手と足の裏を畳につけた。

「始め！」

美雪は四肢を突っ張って身体を持ち上げ、

ぐっと腰を突き出した。

「五分とか十分とか時間を決めて、この姿勢を保持させる」

「裸でか？」

「袴下くらいは認めるのが普通かな。情状にもよるが」

「恥ずかしさもひとしおだな。しかし、連続ビンタよりは優しそうだ」

床の間を背に胡坐をかいて、なぜかつまらなさそうにつぶやく少佐。

「ふふん……」

皆川大尉は軍装を解いて、旅館の浴衣に着替えた。

「大尉殿……何分続ければよろしいのですか？」

「一時間だ」

その答えに、美雪は絶望した。そんなには、とても手足を突っ張ってられない。けれど、時間に意味はないのだとすぐに気づいた。このまま何もされないわけがないのだ。

大尉は旅行鞆から竹笞を取り出して、たっぷりと美雪に見せつけた。先端が松脂のようなもので固められている。

大尉が動いて美雪の視界から消えた。

ヒュンッ！

空気を切り裂く音とともに、美雪の股間で激痛が弾けた。

「ひぎゃあっ……！」

腰が砕けて、足を蹴り上げるような姿勢で畳に崩れ落ちた。股間を両手で押さえて背中を丸める美雪。以前に帯革で打たれたときの何倍もの激痛だった。道具の違いではない。前はかなり手加減してもらっていたのだと、美雪は悟った。

「二か月半の訓練は、どこへ行った？ さっさと元の姿勢に復せ」

「は……はい」

美雪は痛みをこらえて、身体をあお向けに持ち上げた。これしきのことで音をあげるなんて、だらしがない。皆川大尉殿のためにも、少佐殿に見苦しいところをお見せしたくない。そんな意識が、美雪の裡にあった。

（大尉殿のために……？）

なぜ、そんなふうに思うのか、自分にもわからなかった。が、一瞬の疑問は二発目の筈で吹き飛ばされてしまった。

「っひ……」

股間をまっぴたつに斬り割られるような衝撃に耐えて悲鳴を呑みこみ、四肢を痙攣させながら四点背中反らしの姿勢を保持する美雪。

ヒュンッ！

三発目は乳房の根元を下から薙ぎ払われた。

「ひゃっ……」

驚愕の、小さな叫び。打たれる痛みの中に甘く疼くような別の感覚が忍んでいて、それが大仰な悲鳴を封じていた。

「胸がひとまわり大きくなったな。ぶるんぶるんと弾んでおる」

この二か月間でずいぶんと乳を揉まれたのだろうかと、大尉がからかった。だぶつき気味の軍衣を着ていたから美雪はあまり意識していなかったが、言われてみれば、駆け足のときに乳房が揺れて乳首がこすれ、妖しい痛みを感じることもすくなくはなかった。

その乳首に、笞の先端がめり込んだ。乳房が爆ぜるように左右に分かれて、それからふるんと震えた。

「かはっ……」

息を吐き出したまま、凍りつく美雪。

パシッ、パシッ、パシッ……乳房の揺れに合わせるように、軽く笞が叩きつけられる。

「っはあ……はあ、はあ、はあ……」

笞がやんでからやっと、美雪は呼吸を取り戻した。

「驚いたな。ここまでされて、まだ泣きもしないとは」

涙を流せるのは感情が生きているからだ、美雪は心の中で少佐に反発した。哀願も反抗も、いっそう苛酷な責めにつながるだけだと思いき知らされたうへは、男が欲望を吐き出してくれるまで感情を殺して痛みに耐えるしかない。

「では、啼かせてみせよう」

うそぶいて、大尉が極太の張形を手にした。「縄には酔っても、笞では無理か。乾いてしまったな」

四点背中反らしで開脚した股間に張形の先端をあてがい、秘唇を搔き分けて錐を揉みこむようにゆっくりと押し進めていく。

「く……」

美雪の口からこぼれた呻きは、苦痛のせいではなかった。たったこれだけの刺激でたち

まち濡れそぼっていく自分への驚きだった。

ずぐっと膣口を割った張形が、胴部の凹凸で柔肉をえぐりながら子宮口に突き当たるまで一気に突き進んだ。二か月前に比べて、美雪はそれほどの痛みを感じなかった。

「くはあ……」

内臓を突き上げられる衝撃に、美雪は大きく口を開けて喘いだ。

「はあ……あっ、あっ、あっ……」

張形が抽挿され始めると、喘ぎが短く躍動する。苦痛よりも官能が、はっきりと大きかった。そこへ大尉の左手が加わって、淫核を蹴られる。

「あっ……ああん」

喘ぎになまめかしさが添えられる。

「山口よ……」

せわしなく手を動かしながら、皆川大尉がのんびりした口調で少佐に声をかけた。

「こいつ、大口を開けて貴様を誘っておるぞ。こっちなら穴兄弟にはなるまい」

(……………！)

美雪は狼狽した。大尉に女の部分を虐められながら、少佐殿に口を犯される。班長たち

に同時に二穴を犯されるよりもずっと惨めで……妖しく胸がさわいだ。喘ぎに事寄せて口を開けたまま、美雪は上下が逆転した視界に映る少佐の行動を見守った。

少佐はしばらく考えてから立ち上がると、焦ったふうもなく軍袴を脱いだ。袴下は隆々と盛り上がっていた。

「そうだな。お相伴にあずかるとするか」

少佐が美雪の顔を跨いで膝をつき、袴下を脇へずらした。

美雪は肘を伸ばして身体を起こし、顔を少佐の股間に近づけた。みずから進んで卑猥な行為をしながら、あまり恥ずかしさはなかった。自分が拒めば大尉殿に恥をかかせる。その思いが美雪を動かしていた。恥をかかせれば、あとで厳しく折檻される——と、自分に言い訳をしながら。

少佐が身体を立てたまま腰を落として、美雪の口唇に怒張を突き立ててくる。美雪はそれを舌で搦め取って唇で啜えた。苦しい姿勢で、頭というより首を上下に動かした。

「うおっ……こいつ！」

少佐が、感極まった唸り声を漏らした。

この時代、吸茎などまともな女がする仕種ではないとされていた。夫に強いられれば、それだけで離婚の理由にもなった。商売女でも、花代とは別にご祝儀をはずんでもらって、しぶしぶといったところ。吸茎上手という評判が立てば売れっ妓にはなれたが、朋輩からは白い目で見られた。

そんな時代に。女学校を卒業したばかりの素人娘が、積極的に男根を咥えるばかりか、舌まで絡めてくる。皆川大尉よりもはるかに身持ちが固いらしい山口少佐にとっては、驚天動地の目くるめく初体験だったろう。

「うおお、たまらん！」

びゅくびゅくっと怒張が脈打って、おびただしい量の液体が美雪の喉に叩きつけられた。

少佐が身体をはなすと、美雪はこくこくと喉を鳴らして塩素の臭いがする液体を呑み込んだ。最初に大尉の逸物を咥えさせられたときにそれを強制されて、そうするものだとしばらくは思い込んでいた。班長たちに口を使われたときも呑み込んだら、すごく褒められた。それで、ふつうは吐き出すものだと悟ったのだが、もう取り返しはつかなかった。一

度は呑んでみせた。つぎに吐き出したら、それを理由に虐められるかもしれない。そして今も。吐き出したら畳を汚してしまうという、つまらない配慮もはたらいていた。かろうじて残っている美雪の理性は、そんなふうには理屈立てていた。自分をいつそう惨めなところへ追い込みたいなどとは、これっぽっちも思っていない……はずだった。

山口少佐は欲望を吐き出すと急に醒めて、表に車を待たせているのを口実に、そそくさと帰っていった。

それからさらに三時間以上も、旅行鞆に詰められた責め道具のほとんどが美雪の身体に使われた。満足した大尉が一組しか延べられていない夜具に身体を横たえた後も、美雪は四肢を広げて座敷机に縛り付けられ、そのまま朝を迎えたのだった。